

平成21年度 修士論文

笑いは平和構築に役立つか

広島大学大学院総合科学研究科

博士課程前期

佐伯 美保

指導教官 町田宗鳳教授

副指導教官 岩永誠教授

副指導教官 窪田幸子准教授

2009年7月

笑いは平和構築に役立つか

【目次】

謝辞	ii
図表一覧	iii
第一章 序論	
第1節 本研究の目的	1
第2節 本研究の方法	2
第3節 本論文の構成	3
第二章 現象としての笑い—笑いの発生以前—	
第1節 笑いの起源	5
第2節 笑いの要因	9
第3節 笑いの分類（種類と機能）	11
第三章 現象としての笑い—笑いの発生以降—	
第1節 笑いの医学的効果	21
第2節 笑いの心理的变化	27
第3節 幸福感の効用	30
第四章 象徴としての笑い	
第1節 ベルクソンの笑い論とその背景	37
第2節 日本における笑い	42
第3節 スリランカの悪魔祓いにおける笑い	50
第五章 笑いの実践的活動—ケアリングクラウンの場合—	
第1節 ケアリングクラウンの活動概要	62
第2節 ケアリングクラウンの活動事例	68
第3節 ケアリングクラウンの思想と笑い	74
第六章 結論	
第1節 結論	81
第2節 今後の課題	84
参考文献	85

謝辞

本論文の研究執筆にあたり、指導教官の町田宗鳳教授に心から感謝致します。町田先生はご多忙を極める中、いつも真剣に、厳しくも温かい指導をして下さり、論文を完成へと導いて下さいました。町田先生からは、論文の指導だけではなく、自由さと正確さを持って、粘り強く緻密に研究及び執筆を行う姿勢を教えられました。そのことは、学術研究の枠を超越して、自分自身の人間性と向き合うことにさえ繋がりました。笑いという研究テーマに取り組み、途中で投げ出さずにいられたのは、町田先生が歩みの遅い私を決して見限らず、叱咤激励と助言を与え続けて下さったおかげです。感謝の気持ちで一杯です。

副指導教官の岩永誠教授、窪田幸子准教授に心から御礼申し上げます。心理学・文化人類学における笑いに関する文献をご教示下さり、また貴重なご助言をいただきました。さらに、研究の進行や内容、精神的疲労など気遣って下さり、励まされました。深く感謝申し上げます。

日本ケアリングクラウン研究所の高田佳子様を筆頭に、「ケアリングクラウン養成講座 2008 広島」でお世話になった皆様にお礼申し上げます。何の前知識もなく飛び込んだ私を温かくケアリングクラウンの世界へ引き入れて下さった高田様には、本当にお世話になりました。また、ケアリングクラウンで知り合った皆様から頂く研究へのエールにはいつも励まされました。ありがとうございました。

町田研究室の院生仲間及び同研究科の先輩・友人たちに感謝します。率直な疑問や批判、新たな視野の提案を与えてくれ、切磋琢磨し合える学友から得た影響は計り知れません。このように、研究だけでなくプライベートにおいても深く付き合える友人と出逢えたことは私の生涯の宝です。

2 年半の大学院生活を研究面、精神面共に支えてくれた家族に感謝します。最後まで真摯に研究と向き合うことができたのは、家族の皆が論文の成就を祈り続けてくれたおかげです。本当にありがとうございました。

末筆ながら、私を支えて下さった全ての方々に心から感謝御礼申し上げます。

2009 年 7 月 22 日 佐伯美保

図表一覧

【図の一覧】

図 1	ほほえみと笑いの進化	6
図 2	笑いの分類 C—角辻説—	15
図 3	中島英雄の実験結果図表一覧	22
図 4	感情のスペクトル（ウッドワース、1938）	32
図 5	感情の円環モデル（シュロスバーグ、1952）	33
図 6	日本人における笑い観	50
図 7	ケアリングクラウン活動の三分野	64

【表の一覧】

表 1	時系列でみる幼児の発達と笑い	9
表 2	笑いの分類 A—小此木説—	11
表 3	笑いの分類 B—志水説—	13
表 4	笑いの分類法 D—橋元説—	17
表 5	日本の笑いの儀式	47
表 6	ホスピタルクラウンの共通点	66

【写真の一覧】

写真 1	胸を打ち笑う男性	45
写真 2	ホスピタルクラウンの様子	65
写真 3	アンバセダークラウンの様子	67
写真 4	「希望の家」訪問時の参加者	73
写真 5	クラウンの格好	75

第一章 序論

第1節 本研究の目的

笑いには破壊力がある。笑いは、人と人との間にある壁を破壊する。共に笑い合うことで、性別、年齢、社会的ステイタス、言語、文化的差異などの壁が破壊される。人と同じことで笑い合えたとき、その人との差が縮まったように感じ、親近感や連帯感といった人間関係をスムーズにする肯定的な気持ちで満たされていくのを、だれしも経験したことがあるはずだ。

笑いは、ある問題に対して深刻になり過ぎている主体の殻を破壊する。自分の失敗や境遇の中に、笑える要素を発見し、自らを愉快地笑い飛ばせた時、問題解決への突破口を見出せることは少なくない。笑うことによって、問題だと感じていた事柄が、ずっと塞ぎ込み続けなければならないような大きな問題ではなかったと穏やかな心持になることは多い。そうして得た心の余裕は、それまではとても向き合えない問題だと悲観していたことが、実は悲観し続けなければならない問題ではなく、解決へ向けて前向きに取り組むことのできる課題であると現状認識の変容を促す。笑いには、人間関係の緊張状態や思考の硬直化を破壊する力がある。

こうした笑いの破壊力は、平和構築論の観点からも見直すことができるのではないだろうか。何故なら、冷戦終結後勃発する地域紛争は、社会生活を営む基盤である政府や社会システムの崩壊以上に、顔の見える範囲での人間関係の崩壊を意味するからである。

地域紛争とは、言い換えれば、隣人同士の対立である。限られた地域の中で、親兄弟を殺され、組織的な暴力にさらされた個人の強烈な悲しみや怒り、対立する集団への憎しみや不信感が蔓延している。敵対する集団間の対立関係を協力関係へと移行しようという気持ちを当事者が持つことなしに、いくら外部からの支援で法的制度が整備されたとしても、それは脆弱な土台に終わってしまう。そのことは、幾度と無く破棄される紛争調停の条約や、停戦後も続く緊張関係、法的手続きを済ませておくつもり続ける紛争の火種をみても明らかである。極度の緊張状態にある隣人同士が、再び協力し合う関係へと一度崩壊した人間関係が修復されなければならない。

換言すれば、条約の締結や法制度の整備、外交上の友好的な国家間関係などに重点が置かれてきた従来の政治学的アプローチに加えて、そこに生きる当事者の精神面へのアプローチ、そして顔の見える範囲での人間関係の再構築という視点を平和構築に積極的に取り入れることが必要不可欠である。笑いのもつ破壊力は、緊張した人間関係や硬直した事態や、当事者の思考を肯定的なものへと転換し、問題解決への突破口を提示する可能性がある。

本研究の目的は、従来の平和構築論が政治学的アプローチに偏重してきたのではない

かという問題意識に立脚し、笑いをさまざまな角度から学際的に検討した上で、平和構築に役立つか否かを考察することである。

第2節 本研究の方法

人は笑う。それは、喜びや楽しさを表現するためであったり、知人に挨拶をするためであったりする。友人との何気ない話の中で、可笑しさから笑いが止まらなくなることもある。笑いは、人間特有の感情表現の一つであり、極めて日常的な行為である。

しかし、誰もが日常的に笑いを体験しているにも関わらず、笑いとは何かという問いに対して、笑いとはこうであるという一問一答形式の単純な答えを提示することはできない。何故なら、大笑い、愛想笑い、さげすみ笑いなど、笑いには多くの種類があり、それぞれが社会的に果たす機能も異なるからである。笑いの破壊力も、人間にとって常に肯定的に働くとは限らない。笑いが嘲笑の対象となった人の心や、それまで良好だった人間関係を破壊する力を有しているのもまた事実である。

笑いとは、生理学的に言えば表情筋の収縮であり、呼吸の一形態である。感情心理学的に言えば、喜びや楽しさの感情表出である。社会学的に言えば、他者とのコミュニケーションの一手段である。日常的な現象である笑いは、このように様々な観点から部分的に説明される複雑な現象である。

こうした笑いを学問研究の対象とした研究は、これまでも哲学、医学、精神生理学、心理学、人類学、脳科学、遺伝子学など多くの分野で取り組まれてきた。1994年には、日本笑い学会²が設立し、個別の学問的取り組みを蓄積するとともに、そうした研究の総合性の上に成り立つとする「笑い学」の探求が行われている³。

本論文では、笑いを(1)現象としての笑い、(2)象徴としての笑い、(3)笑いの実践的活動に大別し、文献調査とフィールドワークを行なう。

文献調査では、医学、心理学、哲学、文化人類学などの分野でこれまで個別に蓄積されてきた笑いに関する文献を調査し、分類、整理する。(1)現象としての笑いでは、笑い現象が発生する以前と以降に区分した上で、笑いの起源・要因・分類、笑いのもたらす医学的効果・心理的变化・幸福感の効用を研究課題とする。(2)象徴としての笑いでは、宗教的要素における笑いを研究課題とし、ベルクソンの笑い論の背景を探るとともに、神話や宗教的儀礼の中に笑いを取り入れてきた日本における笑いやスリランカの悪

¹ 心理学者の鈴木健人によれば、心理学や自然科学の領域では感情研究はこれまで非科学的な存在として扱われてきたが、1980年代から日本における感情心理学の学問的取り組みが始まっている。

(鈴木直人編『感情心理学』朝倉書店、2007；p.4.)

² 日本笑い学会(JSLHS)のホームページは、<http://www.age.ne.jp/x/warai/> (2009/7/10閲覧)である。「笑いの総合的研究」と「笑いの文化の発展」に寄与することを学会の目的とし、1994年7月に設立された。

³ 井上宏『笑い学のすすめ』世界思想社、2004；p.3.

魔祓いを取り上げる。

フィールドワークでは、クラウン（道化師）のもたらす笑いやユーモア、その存在が人々に与える建設的な効果に着目し、医療現場や紛争後地域においてクラウニングを実践しているケアリングクラウンの活動を調査する。（3）笑いの実践的活動としてケアリングクラウンをケーススタディに選択する理由は、病院や紛争後地域など人々の心身が疲弊しており笑いやユーモアが起こりにくい場で、あえて笑いやユーモアに着目した活動を展開しているからである。笑いは日常的行為であるが、笑いやユーモアの少ない場でこそそれらを重視しようとするケアリングクラウンの活動を深く見ていくことが、笑いの持つ可能性を検討する上で最も適していると考えられる。

ケアリングクラウンに関する文献調査に加えて、「国境無き道化師団アメリカ (Clowns Without Borders-USA)」代表のモショ・コーエン (Moshe Cohen) へのインタビュー調査、日本ケアリングクラウン研究所主催の「ケアリングクラウン養成講座」受講を行い、さらに社会福祉法人「希望の家」(広島県呉市焼山中央 5-11-28) への 2009 年 3 月 17 日ケアリングクラウン訪問は筆者もクラウンに扮して参加した。

第 3 節 本論文の構成

本論文は、笑いを（1）現象としての笑い、（2）象徴としての笑い、（3）笑いの実践的活動に大別した上で以下の構成をとる。

第二章は、（1）現象としての笑いを笑い現象の発生以前と以降の研究課題に区分し、笑い現象の発生以前の課題として、笑いの起源・要因・分類に関して文献調査を通して整理するものである。まず、笑いという人間特有の身体活動の起源について、系統発生的視点及び個体発生的視点からまとめる。つまり、人類の進化の過程において笑いが発生した経緯と、一人の人間が誕生して成長していくにつれて発達する笑いの様相を整理する。次に、笑い現象が引き起こされる要因として古典的な三つの理論を紹介する。そして、発生する笑いの種類に関して、複数の研究者による笑いの分類法を整理する。こうした議論を踏まえて、笑いの多面性を理解する。

第三章は、前章に引き続き、笑い現象の発生以降の課題として医学的効果・心理的変化・幸福感の効用について文献調査を通して整理するものである。まず、笑い与健康の観点から、笑いが身体にもたらす医学的効果に言及する。さらに、笑いが身体健康だけでなく精神の健康に与える効果について、補完代替医療としての笑い療法の先駆けとなった人物ノーマン・カズンズの報告を取り上げる。次に、笑いのもたらす心理的変化の観点から、身体的表出が感情経験を形成するという説を土台とし、笑いが感情経験の中でも幸福と結びつく点に着目する。そして、感情研究における幸福の位置づけとその効用について整理する。こうした議論に基づき、身体活動としての笑いが当人に及ぼす影

響を取りまとめる。

第四章は、(2) 象徴としての笑いとして、経典や神話、儀礼といった宗教的要素における笑いについて文献調査を通して整理するものである。まず、ベルクソンの笑い論を取り上げ、その背景を明らかにするためベルクソンの受けた時代的制約とキリスト教における笑い観をまとめる。次に、日本の神話や神事及び信仰における笑いを整理する。そして、スリランカの悪魔祓いの儀礼における笑いをまとめる。こうした議論を通して、人間の文化の中で笑いが深い意味合いを持ってきたことを明らかにする。

第五章は、(3) 笑いの実践的活動として、ケアリングクラウンの活動について文献調査と活動者へのインタビュー、筆者自身のケアリングクラウン訪問を通してその活動内容を整理し、ケアリングクラウンの思想における笑いの位置づけを浮き上がらせるものである。まず、ケアリングクラウンの活動概要に関して、その歴史と活動分野を概観し、次に、筆者のケアリングクラウン訪問を含めた活動事例を取り上げる。そして、ケアリングクラウンの活動の根底を流れるその思想に言及し、そこでの笑いの位置づけを明らかにする。こうした議論を通して、笑いの実質的な可能性を模索する。

第六章は、「笑いをさまざまな角度から学際的に検討した上で、平和構築に役立つか否かを考察する」という本論文の目的を達成するために、第二章から第五章において得られた知見を基に、研究課題に沿って笑いをホリスティックに取りまとめ考察するものである。そして、本研究の結果において十分に明らかに出来なかった点を含めた限界について言及し、今後の研究課題を提起して結語とする。

第二章 現象としての笑い—笑いの発生以前—

古代ギリシアの哲学者アリストテレス（前 384～322）は『動物部分論』の中で「人間だけが笑う動物である」と述べた⁴。アリストテレスのこの指摘は、生物種としての人類の特異性を笑いが端的に表すことを明確にしている。他にも人間特有とされる涙や言語と同様、笑いを解き明かそうとすることは、人間存在の本質に迫ることと同義である。

人は何故笑うのか。しかし、この問いかげは笑いという複雑な現象を解き明かすにはあまりにも漠然としている。明確な答えを導き出すことが可能となる、より具体的な問いを設定することが必要である。そこで、笑いとは人間の身体活動であり、可視的な現象であることに着目し、笑い現象が発生する以前と以降に研究課題を区分した上で、本章では笑い現象以前の研究課題に取り組むことを目的とする。具体的には、(1) 笑いの起源、(2) 笑いの要因、(3) 笑いの分類（種類と機能）を明らかにする。

第1節 笑いの起源

本節では、笑いの起源を二つの視点から整理する。第一に、人類の進化の過程において、笑いが発生した経緯を示す系統発生的視点。第二に、一人の人間が誕生し、成長していく過程において、笑いが複雑化していく様子を示す個体発生的視点である。

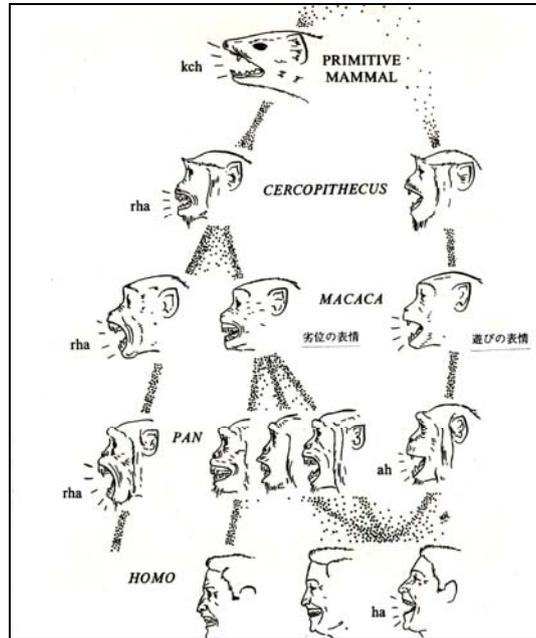
系統発生的視点

オランダの比較行動学者ファン・フーフ（J. A. R. A. M. Van Hooff）は、「笑いと微笑みの系統発生論に対する比較行動学的アプローチ（筆者訳）（A Comparative approach to the phylogeny of laughter and smiling.）」（Cambridge university Press、1972）の中で、ニホンザルやアカゲザルが含まれるマカク類のサルの研究を通し、人間の微笑みと笑いの進化についての図を表している（図1参照）。

⁴ 森下伸也『もっと笑うためのユーモア学入門』新曜社、2003；p. 2.

森下は、『動物部分論』『ニコマコス論理学』『詩学』『弁論術』などの著作を通して鋭い洞察力で笑いを多面的に論じたアリストテレスを「ユーモア学の祖」として挙げている。

<図1 ほほえみと笑いの進化>



<Van Hooff, A Comparative approach to the phylogeny of laughter and smiling.

In R. A. Hind (Ed.), *Non-verbal communication*, Cambridge university Press,
Cambridge・London・New York・Melbourne, 1972. ; p. 237. より改変>

ファン・フーフは、ニホンザルやアカゲザルが含まれるマカク類のサルには、笑いの表情に相当する「劣位の表情」(Silent bared-teethface、無声の歯のむき出した表情)と「遊びの表情」(play face、もしくは Relaxed open-mouth face、リラックスして口を開けている表情)があることを挙げている。「劣位の表情」の特徴は、口角と唇は完全に後ろに引かれ、そのために歯茎の一部が容易に見ることが出来、口は少し開かれているか閉じられており、無声で、体の動きはなく、目は通常通りか大きく開かれており、交流する相手に対してまっすぐまたは斜めに伝達することができることである。マカク類のサルの群れの中で、順位の低いサルが順位の上のサルに対して向ける表情で、相手に敵意がないことを示す。

一方、「遊びの表情」の特徴は、口は大きく開かれているが、唇は歯の大部分を隠しており、目と体の動きは通常通りで、口角は引っ張られておらず、しばしば断続的な呼吸を伴う。発声を伴う際は「アッアッアッ」という音がする。子供のサルが遊ぶ場面で見られ、一見攻撃的な場面に見えるが、実際には相手を噛むなどの行動はせず遊びであることを伝える表情である。

ファン・フーフの説では、サルの「劣位の表情」が人間の微笑 (Smiling) へと発展

し「遊びの表情」が人間の笑い (Laughter) へと発展したと考えられている。

多くの研究者が微笑み (Smiling) と笑い (Laughter) を程度の異なる同質の行動と位置づける中で、ファン・フーフは系統発生的にみて両者が別の派生から生じていることを指摘した。

個体発生的視点

笑いは人類に共通した行為である。とはいえ、一人の人間が誕生し、死去するまでに起こる笑いが常に一樣の形相を示すわけではない。精神医学者の志水彰は、個体発生的視点からみた笑いに関して、「笑いを含む表情は生得的な表出行動ではあるが、感情や身体の状態を外面化するところまでは生まれながらに備わっていても、社会的に自分の意志や内面を知らせるコミュニケーションの役目を担う部分については、社会における学習が必要である⁵⁾」と述べている。

志水の指摘を言い換えれば、人の笑いは成長とともに発達し、複雑化していくということである。では、人の笑いはいつ頃発生するのだろうか。志水によれば、人間の個体発生上で最初の笑いは生後 3~4 ヶ月後頃主に授乳後の満足を示すものとして出現する。表情学的に言えば、これは泣きが続く早い発達であると言う⁶⁾。

最初、食欲が充たされた満足感を示すものとして現れた笑いは、年齢とともに複雑化していく。保育を研究する友定啓子は、幼児の笑いの変化発達を追う目的で、0 歳児の観察を一年間、保育園の一クラスに在籍する 14 名の子ども達を一歳時から 5 年間、計 6 年間に渡り断続的に観察した。その観察記録をまとめた『幼児の笑いと発達』(勁草書房、1993) では、からだ・知的認識・人間関係の観点から幼児の笑いが整理され、「乳児の「天使の微笑」が年長児の「他者を笑う」ようになるまで、複雑に変化していく⁷⁾」様子が丁寧に示されている。

友定によれば、人間の笑いは、笑うという行為自体に大きな変化はなくとも、笑いの対象と使用方法が変化発達していく。個体発生的視点からみて、初期段階にあたる笑いは、からだを舞台としたものである。暖かい羊水に守られていた胎児は、出生後、外の世界のさまざまな刺激にさらされていく。食べる・飲むといった行為に笑顔がともなうだけでなく、自分の力で立ち上がるなどの身体運動能力を獲得する際も満面の笑みを浮かべる。言語ではなく、笑顔で知的理解を伝達する⁸⁾。個人の心理状態や状況に応じて差異はあるものの、皮膚感覚への刺激であるくすぐりや冷たい水、温かいお湯の心地よさ

⁵⁾ 志水彰『笑い／その異常と正常』勁草書房、2000；p. 14.

⁶⁾ 志水 前掲書、2000；p. 17.

⁷⁾ 友定啓子『幼児の笑いと発達』勁草書房、1993；p. 14.

⁸⁾ 友定 前掲書、1993；pp. 27-30.

友定は、「ぞうさん、ぞうさん」の歌を聞いた子ども（1歳1ヶ月）がぞうの絵を指して微笑むなどを事例として挙げている。

が笑顔へとつながる。おんぶやだっこ、快いリズムなどに安心感を得て微笑む。こうしたからだに関する笑いは、身体の成長発達とともに自己意識の発達と密接に関わっている。

知的認識にともなう笑いは、たとえばシールの貼り方を理解したときに「わかった！」と見せる笑顔や、知らない歌を歌う時には不安そうな表情を見せるのに対して、理解している歌は満面の笑みで生き生きと歌うなど、それまで未知であったことが理解された時に起こる笑いである。理解の対象は単純なものから複雑ものへと発達していく。二歳児になると、「おかしき」に基づく笑いが出現するようになる。おかしきがうまれるためには、まず一定の図式に対する理解があり、それと実際との間に「ずれ」に気がつく必要がある。たとえば、先生は転ばないという図式への理解があり、先生が転んだ場合に、その図式とのずれを認識することから笑いが起こる。また、おしり⁹など身体の部位や、性にまつわる話、うんち¹⁰など排泄物に関する言葉を使用することで自ら笑いをとり、他者との親和関係を樹立しようとする。おかしみを共有し、人間関係を積極的に樹立していく。

人間関係における笑いは、自分を支えてくれる大人への親しみの笑いから始まる。幼児の自己認識は他者認識と密接に関係しており、他者の認識及び受容は、自己の認識及び受容と表裏一体の関係で発達していくが、幼児は言語に代わり笑顔で親しみや受容を伝達する。同年齢の子どもの間においては、一歳前後では一方が笑いかけても一方は興味を示さないなどの行き違いがみられるが、自他の認識が出来始める二歳児になると、子ども同士の親しみが表れる。このような親しみの笑いを通して、集団への同調など小さな社会の一員としてふるまえるようになる。また、笑顔は所属集団に対する親和性を表現するものでもある。

三歳児頃には、他者と自分との違いを認識し、集団の中で自己を確立しようとする中で、他者からの受容と評価を意識するようになる。自分が他者を受容するだけでなく、自分が他者から受容されているか、さらにはプラスの価値をもって評価されているかということに敏感になる。幼児は、保育者からの賞賛や注意の体験を内面化することで自己の行動指針を確立させていく。他者からの評価を意識し始めた子どもは、集団の中で付与される自分の価値にも敏感になり、笑われることをおそれるようになる。笑われることは、マイナスの価値を付与されることを意味するからである。たとえば、保育者が

⁹ 友定 前掲書；pp.104-105.

おしりがおかしい理由は「それは隠しておかなければならないもの、すなわち「タブー」だからである」と友定は説明する。自由に排便を楽しんだ赤ん坊から、排泄を自分でコントロールできるまでの道のりは、子どもたちにとって屈辱と栄光の混ざった混沌とした時間である。排泄の快感、失敗の屈辱、裸でいる解放感、無理に下着を身に付けさせられる抑圧感など、様々な感情が交差するだけでなく、おしりを舞台に排泄をめぐる大人との関係が展開されるからである。おしりは、重大でありながら隠しておかなければならないアンヴィバレントな部位である。

¹⁰ 志水 前掲書、2000：p.24.

志水によると、「うんち」を上手に出来るか否かは、母親に褒められるか叱られるかを決定する行為であるため、幼児にとって「うんち」は、幸・不幸を支配する重要な道具である。

「シャツがはみ出ていたら、笑われるよー」と子どもたちを注意することがあるが、これは、集団の規範からのずれを笑うことによって戒めようとするからである。こうした体験から、幼児たちは、笑われることが自分にマイナスの価値を付与することを学習していく。

四歳児になると、その笑いを他者に向け始めるようになる。つまり、嘲笑の出現である。自分より劣ったものや他者の失敗を笑うようになり、よく人を笑う者と、よく人に笑われる者が出てくる。笑いは集団の構造化に一定の役割を果たすようになる。

五歳児になると、笑われた者をかばい笑った者を戒めるなど、笑いの抑制がみられるようになる。このようにして、笑いが人間関係に対して果たす役割は、成長につれて複雑になっていく¹¹（表1参照）。

＜表1 時系列でみる幼児の発達と笑い＞

[他者との関係性型]

私が笑う—快感情、親和表現

人と笑う—肯定的な人間関係の樹立

人を笑わせる—親和作用、積極的な人間関係の樹立、自己の受容を促す

人に（から）笑われる—制裁作用

人を笑う—嘲笑・優越・攻撃

[自己完結型]

私自身を笑う—自嘲／ふっきれる

事態を笑う—問題の客観視／ユーモア

＜友定啓子『幼児の笑いと言語』勁草書房、1993より筆者作成＞

第2節 笑いの要因

何が笑いを引き起こすのか。友定が幼少期の笑いに焦点を当てたのとは異なり、これまで笑いの要因に関する言及の多くは、主に成人の笑いを想定するものであった¹²。心

¹¹ 友定 前掲書、1993

¹² 友定は「笑いは単なる生理的快感に対応する表情であるとか、あるいは「おかしいから笑う」といってしまつて認知の問題になってしまうか、また、人間関係の円滑油だといって、社会的な役割に着目するかである。どれも部分的な捉え方である。」という問題意識を持ち、笑いを人格全体に関わる行為として捉えようとした。

理的メカニズムに焦点を当てた笑いの要因として、優越理論、ズレの理論、放出の理論が有力とされてきた。本節では、これら三つの理論の基本的なメカニズムと具体的な事例に関して志水の説明を要約する。

優越理論

優越理論は、プラトン（BC. 427－BC. 347）によって提唱され、ホップズ（1588－1679）によって強化された。優越理論では、笑いは他人に対する優越感の表現であるとする。笑いは、ジャングルでの戦いの勝利の雄叫びから発展したものであるとの説を支持する。たとえば、ライオンに殺されるキリスト教徒を見て楽しむ古代ローマ人の笑いや、他の子どもの服装や知恵の遅れを攻撃する子どもの笑いなどが挙げられる。他者に対する自己の優越を表現し、攻撃する笑いのみを取り上げたこの理論では、くすぐられた際の笑いなど多くの笑いを説明することができない¹³。

ズレの理論

ズレの理論は、パスカル（1623－1662）、カント（1724－1804）、ショーペンハウアー（1788－1860）などの哲学者によって唱えられてきた。ズレの理論では、期待と現実のズレが笑いを引き起こすとしている。それは、パスカルの「予期したことと実際に見ることの間に生じる驚くべき不釣り合い以上に笑いを生み出すものは何もない」という言葉やショーペンハウアーの「いついかなる場合にあっても笑いの原因とは単にある概念と、何らかの関連のうちにその概念によって考えられてきた現実の対象とズレに関する突然の知覚であり、笑いそのものはそうしたズレの表現に過ぎない」という言葉に凝縮されている。しかし、ズレが笑いを引き起こすには、そのズレた結果が無害でありそのもたらす感情が小さいものに限定される。たとえば、母親の方へ走りだした幼児が突然バイクにはねられるという状況は、予期したことと現実との間にズレは生じているが、笑いをもたらすことはない。この理論においても、くすぐりの笑いなどには説明がつかない¹⁴。

放出の理論

放出の理論はスペンサー（1820－1903）により主張され、フロイトによっても支持さ

（友定 前掲書、1993；p. 170.）

¹³ 志水 前掲書、2000；pp. 66-67.

¹⁴ 志水 前掲書、2000；pp. 67-68.

¹⁴ 志水 前掲書、2000；pp. 68-70.

れた。放出の理論では、笑いは「蓄積された神経エネルギーの発散」そのものであるか、その結果生じる現象である。たとえば、地震で揺れる最中には緊張してじっとしており逃げるために神経エネルギーを高めているが、地震がおさまったと同時にニコリ笑ってそのエネルギーを放出することで元の状態に戻るといのように説明される。この理論でも、くすぐりの笑いや冷笑など、多くの笑いを説明することができない¹⁵。

第3節 笑いの分類（種類と機能）

では、このようにして発生する笑いは、どのように分類できるのだろうか。これまで笑いの種類は、研究者ごとに異なる指標を用いた独自の分類法を用いて整理されてきた。

本節では、精神医学の専門家である小此木啓吾、志水彰、角辻豊と、コミュニケーション論の専門家である橋本良明の分類法を紹介し、それぞれの分類法の特徴と補足点を考察することで笑いの種類を様々な角度から理解する。

小此木説

小此木は『笑い・人みしり・秘密一心的現象の精神分析一』（創元社、1980）の中で、笑いを心理・生理学的観点から、微笑(Smile)と笑い(Laughter)に大別している（表2参照）。

<表2 笑いの分類 A—小此木説—>

	笑い(Laughter)	微笑(Smile)
表出	<ul style="list-style-type: none"> ・ 声を出して笑う ・ 表情にとどまらず、むしろ腹をかかえたり、ひっくりかえったりするほどの全身的な表出（抱腹絶倒） ・ はげしく、一過性にわきおこる ・ 苦しくても止めようとしても止まらないはげしさをもった付随的な反射、けいれん、ひきつけ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 口もとや視線、頬の和らぎなどの表情 ・ おだやかではあるが、長くつづく ・ 時には、顔つきそのものになってしまう場合さえある
原因	<ul style="list-style-type: none"> ・ おかしさ感情の生理的表出 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 《満たされ、心地よくなって微笑む》という、快い内的な充足感（ないし感情）の生理的表現

心理作用	・内面に起こったはげしい心的な緊張の 解消作用そのものを主とする	・何らかの心的な緊張（例えばくすぐら れ快感やおかしさの高まり）の解消作 用の結果生じたリラックスした状態 （充足感にみちた状態）に伴う表情
------	-------------------------------------	---

＜小此木啓吾『笑い・人みしり・秘密—心的現象の精神分析—』

創元社、1980；pp. 6-8. より筆者作成＞

この二つの主な違いは、笑い声の有無である。微笑(Smile)が顔の表情の変化に限定されるのに対し、笑い(Laughter)では笑い声や身体を動かすなどの全身的な変化に伴う。また、それらの笑いを引き起こす原因が、微笑(Smile)の場合、快い内的な充足感（ないし感情）の生理的表現であるのに対し、笑い(Laughter)の場合は、おかしさ感情の生理的表出である。さらに、心理作用という点で両者は基本的に異なっている。笑い(Laughter)が内面に起こるはげしい心的な緊張の解消作用そのものであるのに対して、微笑(Smile)は心的な緊張の解消作用の結果生じる充足感に伴う表情である¹⁶。

こうした小此木の分類法は、表出する笑いの形態を明確に区分したが、笑いを引き起こす原因や笑いの表出が果たす社会的機能という点に関しては、いくつかの疑問が生じる。

まず、微笑(Smile)が常に快い内的な充足感を表出しているとは限らない。たとえば、友人と同じ大学を受験した人が、友人は合格し自分は不合格であった場合に「おめでとう」と見せる微笑は、快い内的な充足感ではなく、自己の内的葛藤を隠すために見せる微笑という方がより正しいと考えられる。

次に、おかしさから生じる笑い(Laughter)の対象となる人物、すなわち「笑われる」人にとっての笑いの意味をこの分類では説明することができない。

志水説

そこでより複雑な笑いの分類が必要となる。精神医学者である志水彰は『笑い／その異常と正常』（勁草書房、2000）の中で、笑いを「快の笑い」「社交上の笑い」「緊張緩和の笑い」に三分した上でそれぞれ下位分類を行っている（表3参照）。

¹⁶ 小此木啓吾『笑い・人みしり・秘密—心的現象の精神分析—』創元社、1980；pp. 6-8.

<表 3 笑いの分類 B—志水説—>

II 社交上の笑い				I 快の笑い				
④	③	②	①	⑤	④	③	②	①
価値無化の笑い	攻撃の笑い	防御の笑い	協調の笑い	価値低下・逆転の笑い	不調和の笑い	優越の笑い	期待充足の笑い	本能充足の笑い

<志水彰『笑い／その異常と正常』勁草書房、2000；p. 42. >

志水によると、生後3週間の乳児が哺乳後満足してみせる微笑みが人間の「笑い」の原形だと考えられる。これは満足による快の感覚の表出であり、I「快の笑い」の基本的な形である。その後、成長に伴う精神機能の変化により「快の笑い」はさまざまな形に変化する。

- ①本能充足の笑い：食欲、便通、性欲、睡眠欲などの本能が満たされたとき、人は微笑んでいることが多い。
- ②期待充足の笑い：入試に合格したときや試合に勝ったときなど、期待が満たされたときにみられる笑いである。それに費やした時間や努力、期待の大きさ、意外性などに比例して笑いは大きくなる。たとえば、強い野球チームが勝つよりも、弱い野球チームが勝つ方が大きな笑いとなる。喜び合う仲間がいるときの方が、より大きな笑いとなる。
- ③優越の笑い：他者よりも自分の方が優越であるときに起こる笑いである。たとえば、商売仇より自分の年収が多いことが分かったりした場合にみられる。

④不調和の笑い：「成敗するぞ！」と振り下ろした刀が折れた竹光であった場合など、その場面の流れから当然期待される事とは異質な行動や、言葉や場面の意味の取り違いなどがおかしみを誘い、笑いが起こる。

⑤価値低下・逆転の笑い：仕事上あらゆる点で有能な課長が家庭では妻に怯えているなど、極めて高かった課長の価値が下落することによって起こる笑いである。

人間のコミュニケーションの上で表情が伝える情報量は言葉以上に多く、とりわけ笑顔のもつ意味は大きい。Ⅱ「社交上の笑い」は、次の四つに区分することができる。

① 協調の笑い：挨拶に代表されるように、快の表現ではなく協調の意志の表現として表れる笑顔である。

② 防御の笑い：自分の心の内面を知られたくないときなどに浮かべる笑いで、相手から自分を防御する役割がある。店員に声をかけられ、曖昧に笑顔で受け流すときなどにみられる。

③ 攻撃の笑い：冷笑、嘲笑に代表される笑いで、相手に対する攻撃性が高い笑いである。

④ 値無化の笑い：待ち合わせに遅刻するなど、都合の悪い状態を価値の無いものにしようという作用をもつ笑いである。

精神的、身体的緊張を緩和する笑いは、生体の健全な機能の維持のために重要な笑いである。

①強い緊張が緩んだときの笑い：緊張を要する手術を終えた後の外科医が手術の結果に関わらずみせる微笑など、緊張が緩んだ際にみられる笑いである。

②弱い緊張が緩んだときの笑い：与えられた刺激にまず少し驚いて緊張し、次にそれが無害、または愉快であることに気づいて、ホッとして安心、弛緩することにより生じる笑いである。自分の知らないものごとのいわれを聞かされ、「へー、そうですか。ハハハ」などが典型である。

全ての笑いがこの分類のどれか一つに属するのではなく、二つ以上の笑いの性質を兼ね備えていることが多い¹⁷。

角辻説

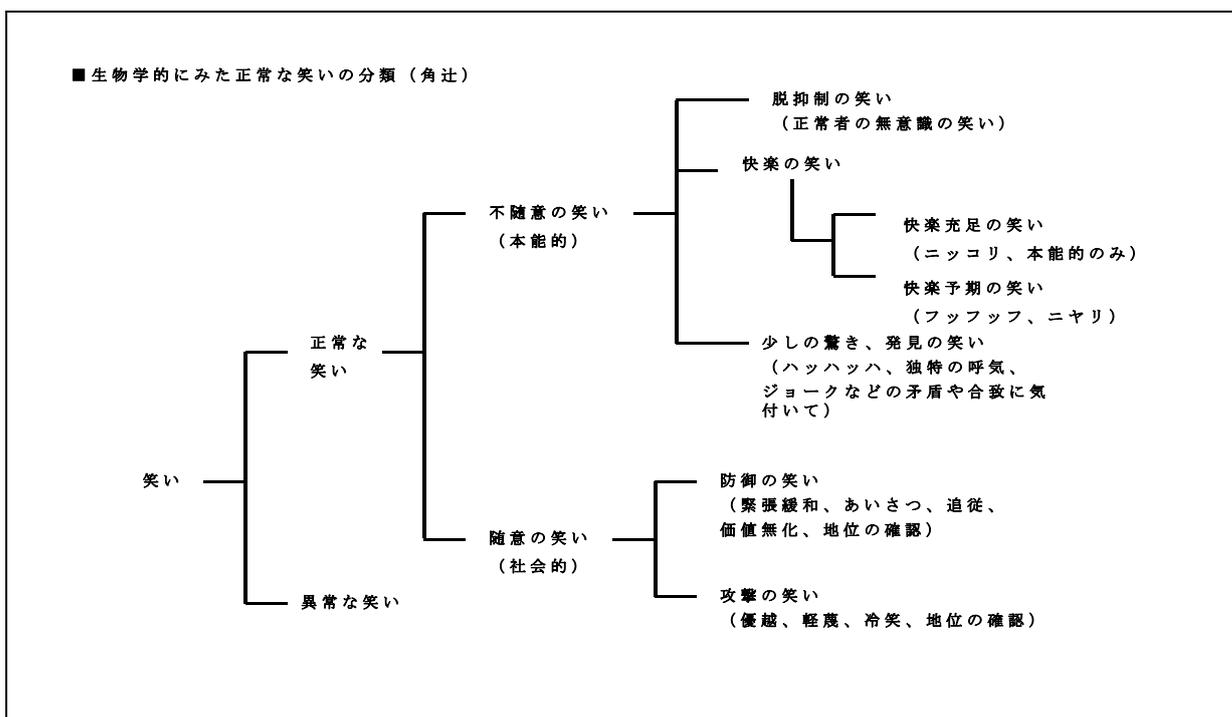
精神生理学を専門とする精神医学者の角辻豊は、『笑いの力』（光の家協会、1966）の中で笑いを生物学的視点から分類している（図2参照）。角辻は、笑いとは表情の一つであることに着眼点を置き、笑いの表情を発生させる外からの刺激の性格によって様々な種類の笑いが生まれるとする。笑いを「正常な笑い」と「異常な笑い¹⁸」に区分した上

¹⁷ 志水 前掲書、2000；pp. 43-54.

¹⁸ 志水 前掲書、2000；p. i

で、「正常な笑い」をさらに詳細に区分している。

< 図 2 笑いの分類 C—角辻説— >



< 角辻豊『笑いの力』家の光協会、1996 ; p. 95. >

角辻によると、正常な笑い大きく「不随意の笑い」と「随意の笑い」に二分される。「不随意の笑い」は、「快だけの笑い」や「本能的な笑い」と言い換えることができる。「不随意の笑い」とは、最も根源的な笑いであり、この笑いを引き起こす原因である快の感覚の原点は、おいしいものを口に入れ、そしゃくし飲み込むことにある。人間の快楽の始まりは、乳児が母親のおっぱいに吸い付き吸いとることにあるが、この体験と同じような気分の良いことがあった時に、おっぱいを吸いとるときの口の感じに似せて、口角の筋肉で口が横に引っ張られるのである。

この「不随意の笑い」は、「快楽の笑い」「少しの驚き、発見の笑い」「脱抑制の笑い」に三分される。「不随意の笑い」の代表例である「快楽の笑い」は、「快楽充足の笑い」と「快楽予期の笑い」にさらに区分される。「快楽予期の笑い」とは、快感情を引き起こさせる事態が現実には起こっていないが、高い確率で快楽が予期される場合や快楽が連

角辻と共同研究者である志水は、「精神疾患たとえばうつ病の診療にあたって、表情は言葉と同じくらい重要な情報の源であり、その中でも笑いはその人の精神状態を知る上で特に大切である」とし、主に精神疾患において笑いの量と質の異常な変化が観察されると報告している。

想される場合に起きる笑いである。たとえば、子どもが食べ物の写真を見せられたときや、大人がうまい儲け話をもちかけられたときなどが想定される。

角辻は、快の要素は大きいが快のみに限定されない「少しの驚き、発見の笑い」を「アッハッハの笑い」と呼んでいる。この笑いの特徴は必ず驚きの要素が含まれていることである。「アッハッハの笑い」のプロセスは次の5段階から成る。

- (1) 「発見」と、発見の内容が「快」または「無害なもの」であることへの気づき。
- (2) 笑いのきっかけとなるエピソードが一応の完結をみたものであると分かる。
- (3) このとき、自分の身柄の安全が保証されている。
- (4) しばらくその安全な状況が続くということが分かっているときに「ホッ」と少しだけ息を出す。
- (5) まだ息が残っているのでさらに「ホッ」と息を出す。このような状況で「ホッ」と息を吐くこと自体が気持ち良いので、それを繰り返す。

この流れによって「アッハッハ」という笑いが可能となる。「アッハッハの笑い」の初期の感情が軽い驚きであることは、1967年に角辻自身が行った実験において、筋電図による「アッハッハの笑い¹⁹」の筋肉の初期の動きが、驚きの表情時の筋電図パターンと同様であったことから、すでに証明されている。

笑いの中枢は脳縁系にあり、普段は意志の中枢である脳新皮質によって絶えず抑制されている²⁰。しかし、時折その抑制が外れ、無自覚の内にふっと笑うことがある。これが「脱抑制の笑い」である。客観的にみると面白いことは何もないのに独りで笑う「空笑」という症状は、精神分裂病の患者などにみられる典型的な症状の一つであるが、普段は空笑のみられない健康な人でも40分～1時間ほど椅子に座らせていると1～2回の空笑を確認できる。このことから、正常な笑いの中にも「脱抑制の笑い」という区分を設けた。

「随意の笑い」は、社会的・随意的な特徴を持ったやや高等な笑いである。「不随意の笑い」との違いは、感情よりも意志で笑う要素が強いことと、本能的に笑うのではなく、情報伝達的手段として或いは社交上のフォローといったさまざまな意味を持っている点である。たとえば、初対面の人と出会ったとき笑顔で挨拶するのには、必ずしも快の感情を抱いているわけではないが、社交場のマナーをともなった挨拶として仲良くしようというメッセージを送っている。

「随意の笑い」は、時と場所や状況によって「防御の笑い」と「攻撃の笑い」に区分

¹⁹ 角辻は、「博物学者のチャールズ・ダーウィン（1809-1882）は、『人間及び動物の表情』（1982年刊）の中で「人が『アッハッハ』と笑うときの奇異なる呼吸状態はなぜか分からない」と述べているが、「その問いかけの答えとなり得る理論である」としている。
（角辻豊『笑いのちから』光の家協会、1996；p.105.）

²⁰ 角辻 前掲書、1996；pp.113-114.
角辻によると、脳新皮質は人間の行動を状況に応じたものにするため、笑いを含めたさまざまな反応を抑制しており、たとえばお葬式などの厳粛な場でいかに面白いことがあっても笑いを抑制する役目を負っている。

される。「防御の笑い」は、たとえば、あいさつの時「あなたには敵意を持っていませんよ」という防衛的な意味をもつ笑いや、知人の家に招かれた際に自分の嫌いな食べ物が混ざっていたのをごまかすために見せる笑いなどが挙げられる。

「攻撃の笑い」の原点は快感情である。前述した本能的な快とは違い、他者との関係の中で「自分だけが快」という感情の芽生えが優越感を生み出す。この優越感を相手に誇示することが武器としての笑いにつながり、「攻撃の笑い」に分類される。たとえば、ワープロの不得手な人が一日がかりで書いた文書を一瞬で削除してしまったとき、ワープロを得意とする自分が見せる笑いが優越感からきているとすれば、その笑いは相手にとって「攻撃の笑い」となることもある²¹。

橋元説

橋元は、笑いの機制や原因に対して、笑いの機能や意味に関する言及が少ないことに着目し、コミュニケーションの一形態である笑いを多様なノンバーバル信号の複合体として位置づけ、笑いの機能に特化した分類を行っている（表4参照）。

＜表4 笑いの分類法D—橋元説—＞

<p>●笑いのコミュニケーション的機能</p> <p>＜対自機能＞</p> <p>(1)感情表出</p> <p>(2)緊張解放</p> <p>(3)心理的安全弁（諦観・自棄）</p> <p>＜対他機能＞</p> <p>(1)攻撃的機能</p> <p> 威嚇、軽蔑、価値の引き下げ、優越感の誇示</p> <p>(2)社交的機能</p> <p> 挨拶、親愛、宥和、媚び、追従、連帯感表示、はにかみ、気配り</p> <p>(3)自己防衛的機能</p> <p> 当惑の迷彩、自己カリカチュア</p> <p>(4)会話進行調節機能</p> <p> 応答、話題転換・オチづけ、仮人称性表示</p>
--

＜橋元良明「笑いのコミュニケーション」言語編集部

「言語」第23巻第12月号、大修館書店、1994；p.43.＞

²¹ 角辻 前掲書、1996；pp.94-154.

橋元は、まず笑いを対自機能と対他機能に二分している。対自機能とは、その効用が自己完結し相手の存在が副次的なものとなる笑いであり、対他機能とは、はじめから他者に対する働きかけが動機となっている笑いを指す。それぞれの内容、特徴、事例を要約してみよう。

対自機能は、次の三つの機能に区分される。

- (1) 感情表出：楽しい・満足・滑稽感などの感情を表出する機能を担う笑いである。
この場合、笑いの誘因はあるものの伝達の相手や聴衆の存在を必ずしも必要とせず、かつ笑いの矛先が直接他の人間に向けられたものではないことに特徴がある。たとえば、漫画や小説などを読みながら浮かべる笑いなどが挙げられる。
- (2) 緊張解放：フロイト（1905－1970）が言ったように、苦痛な心的興奮の体験が節約され、その分のエネルギーを放出して生じる笑いである。他者への働きかけや感情伝達を第一目的としたものではない。他者に伝染しやすく、場全体の雰囲気や和らげる働きを持つ。たとえば、授業中に教師が誰かを指名しようとして広がる教室内の緊張が、誰か一人が指名されたことによって他の生徒の顔に笑みが広がるなどが挙げられる。
- (3) 心理的安全弁（諦観・自棄）：あきらめ、絶望感などからくる笑いである。極度の失望・恐怖によって精神的錯乱をきたすことを回避する防衛機能として働く。直接に笑いを差し向ける相手がいなかったことが特徴である。たとえば、全財産が火事で失われるのを目の当たりにした人が突発的に大笑いをするなどが挙げられる。

対他機能は、次の4つに区分される。

- (1) 攻撃的機能：攻撃的武器として能動的に使用される笑いである。「単なる優越感の誇示」から「積極的威嚇」まで様々なレベルの攻撃的機能を果たすが、笑いを伴わない威嚇や憎悪との違いは自分の優位性の自覚及び誇示への意図の有無である。たとえば、嘲笑やあざけりの笑いなどが挙げられる。
- (2) 社交的機能：日本の場合、自分の心の動揺や当惑を覆い隠そうとする「照れ隠し」の感情と、相手を自分の悲しみに巻き込むまいとする「気配り」の笑いがある。たとえば、小泉八雲が描写した「これがわたしの亭主です」と自分の亭主の骨壺を指し示す老婦の笑いなどがそれである。また、主従関係にある者がみせる「追従」や「媚び」の笑いや、好意を抱く相手に見せる「親愛」や「協調」のシグナルとしての笑いが挙げられる。社会的機能を果たす笑いは、表情、頻度、誘因の文化差が大きい笑いでもあり、誤解や摩擦を引き起こしやすい。
- (3) 自己防衛的機能：自分の犯した失敗で滑稽なさまになっている自分を、自分自身が笑うことによって、「当惑の迷彩」を図るだけでなく、他人に対してカリカチュアした自分を積極的にアピールする意図を持つ笑いである。自分自身を笑う

意味で似た笑いの「自嘲」と異なる点は、滑稽な自分を上のレベルから眺めるスタンスを取っている点である。たとえば、質問に対してとんちんかんな答えをし、まわりに笑われているときの笑いなどが挙げられる。

- (4) 会話進行調整的機能：会話の進行上明確な役割を担って発信される笑い及び微笑である。具体的には、言語に付随したり発話間に挿入されたり相手の発話に対する応答などで表出する。また「さて、話がつまらなくなったところで話題を変えよう」というメッセージを伴う笑い（とそれに続く一同の沈黙）は話題転換の機能を果たす。さらに、面白くも無いのに雰囲気上仕方なく起こる笑いは「オチづけ」としての機能を果たしている。「オチづけ」の笑いは、笑いがオチに際する象徴的儀礼であることも示唆している。さらに、皮肉がそのまま解釈されることを防ぐため、反語性を明示するために発話に随伴して起こる笑いも挙げられる。たとえば、泥だらけになって帰ってきた子供に「きれいな顔だこと」と笑みを浮かべるなどである²²。

以上、小此木、志水、角辻、橋元による四つの分類法を紹介した。しかし、日常生活に起こる笑いの全てを分類尽くすことに成功した分類法はないと言える。なぜなら、発生する笑いが分類法上どの笑いにあたるかを説明する場合、一つの分類法の中でも複数の箇所を横断して説明されることがあるように、発生する笑いとはそもそも分類し切れない多くの側面を有しているからである。

本章では、笑い現象の発生以前の研究課題として笑いの起源、要因、分類を整理した。

笑いの起源では、系統発生的視点から見て、サルの上位の表情が微笑（Smile）へ遊びの表情が笑い（Laughter）へと進化したことと、個体発生的視点から見て、成長と共に笑いが複雑化していくこと明らかになった。

個体発生的視点から見て、最初は食欲が満たされるなどの自己の満足感を表すものとして表出した笑いは人間関係を肯定的にも否定的にもする道具として発達していく。人間関係を肯定的にする笑いの機能としては、笑いが他者の受容や親しみの伝達、所属集団への親和性を表現するものとなり、さらには自ら笑いをとり他者との親和関係を築こうとするなど積極的に人間関係を樹立する道具として笑いが使用されるようになる。

一方で、人間関係を否定的にする笑いの機能としては、周囲とのずれを笑いによって戒めようとする教育的体験を通して、人から笑われることを恐れるようになり、さらにはその笑いを他者に向けるようになり、他者に対する攻撃として嘲笑を使用するようになっていった。

笑いの要因では、他者に対する優越を感じた時笑いが生じるとする優越理論、物事の

²² 橋元良明「笑いのコミュニケーション」言語編集部「言語」第23巻第12月号 大修館書店、1994；pp. 42-48.

ズレが起きた時に笑いが生じるとするズレの理論、笑いは蓄積されたエネルギーの放出であるとする放出理論を紹介した。

笑いの分類では、異なる指標を用いた笑いの分類法として小此木説、志水説、角辻説、橋元説の四つの分類法を整理し、それぞれの特徴を挙げた。これらの分類法を整理することで、笑いが自己の満足感の表出や他者への親和性のみを示すのではなく、時に他者へ感情を読み取られないようにするための防衛機能を持つことや嘲笑といった攻撃的機能を持つことが見えてきた。

本章を通して、笑いには多くの側面があり、多重層的な議論を要するものであることがわかった。こうした笑いの多面性を深く理解し、先人の成果を組み合わせることによって、笑いを一側面的に捉えることなく、発生する笑いの要因や種類、機能をより多角的に捉えることが可能となるに違いない。

次章では、発生した笑いが笑っている主体に対してどのような身体的変化・精神的変化をもたらし、そのことが主体にどういった効果をもたらすのか、笑いの効用を整理していく。

第三章 現象としての笑い—笑いの発生以降—

笑いが人間の身体活動であることに着目し、笑い現象が発生する以前と以降に研究課題を区分した上で、本章では笑い現象以降の研究課題に取り組むことを目的とする。具体的には、(1) 医学的効果、(2) 心理的变化、(3) 幸福感の効用を明らかにする。

第 1 節 笑いの医学的効果

本節では、笑いが人に与える医学的効果に焦点を当て整理する。

医学的効果

笑いを引き起こす要因やその機能に関わらず、笑うという行為が身体的に意味することは「ハッハッハッ」という呼気を伴った呼吸の一形態だということである。換言すれば、笑うという行為は、体内にある二酸化炭素を吐き出し新鮮な酸素を吸い込む行為である。笑うことで引き起こされる身体的変化には医学的効果があるとされ、近年、医学の分野で多く研究されている。

ごく一例を紹介すれば、(1)NK 細胞²³の活性化、(2) 痛みの軽減、(3) アレルギー反応の抑制、(4) 糖尿病患者における食後血糖値の上昇の抑制、(5) ストレスの低減などがすでに報告されている²⁴。

脳神経外科医の中島英雄は、病院寄席で種々の実験を行い、笑うことで引き起こされる体内の変化の数値的なデータを通して笑いが身体全体にもたらす効用をまとめ、笑う前後において体内に起こる変化として次の 5 つを挙げている。(1) 血液の pH、(2) 血糖値、(3) 脳波、(4) 脳の血流量、(5) 血液中のホルモン・神経伝達物質の変化である。中島の調査結果は以下のとおりである。なお、中島の実験結果のデータは図表一覧としてまとめた (図 3 参照)。

人間の血液の pH は、7.35～7.45 と弱アルカリである。血液の pH が酸性に傾くと、疲労、ストレス、不眠の原因になる。寄席の前後で動脈血を採取し、pH を測定したところ、笑った後では、正常な pH に近づく (図 a 参照)。

血糖値に関して言えば、笑った後に下がること became 明らかになった (図 b 参照)。血糖値が下がる率は、とくに高血糖の人ほど大きくなる。

脳波は、61 例中、 α 波と β 波が同時に増加するものが 29 例と最も多く、 α 波が増加し β 波が減少した 12 例、 α 波が減少し β 波が増加した 12 例と続き、最後に β 波が増加し α 波が減少した 8 例がみられた (図 c 参照)。リラックス時には多量の α 波が出現し、脳が活動しているときに β 波が出現する。笑うことで相反する性質を持つ α 波と β 波の両方が同時に出現するのは、笑いが大脳の活性化とリラックスを同時に引き起こしているからである。

²³ NK 細胞とはナチュラルキラー細胞のことであり、がん細胞を退治する役割をもっている。

²⁴ 広崎真弓「笑いが認知機能に及ぼす短期的効果—リラックスとリフレッシュ—」ユーモア・サイエンス学会編「笑いの科学 Vol.1」松籟社、2008；p.54.

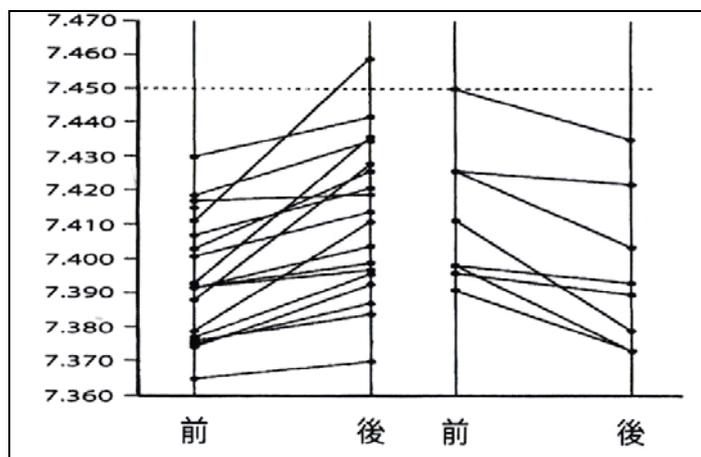
SPECT (Single Photone Emission Tmography) を用いて、被験者の脳血流量の増減を40名測定した結果明らかになったことは、笑うと脳の血流量が増加することである。(図 d 参照)。大脳半球での増減率は左脳の方が大きく (図 e 参照)、部位別の増加率では、海馬、扁桃体、大脳基底核などが活発に活動していることが見てとれる (図 f 参照)。

血液中のホルモンでは、ドーパミンとセロトニンが同時に増加する (図 g 参照)。全身の交感神経系を働かせる作用のあるストレス対抗ホルモンの一種であるドーパミンと、癒しのホルモンとも呼ばれるセロトニンの血液中ホルモンの変化から、身体の活性化とリラックス化が同時に行われていると言える。

血液のサラサラ度の指標の一つと言われている血小板凝集能の変化を調べたところ、12名の被験者の内9名の血小板凝集能が減少し、3名の血小板凝集能が増加した (図 h 参照)。また、大脳高次機能を測定するためにかな拾いテスト²⁵を行ったところ、正答数平均が増加した (図 i 参照)。このことから笑った後には大脳高次機能が改善されるとうことができる²⁶。

< 図 3 中島英雄の実験結果図表一覧 >

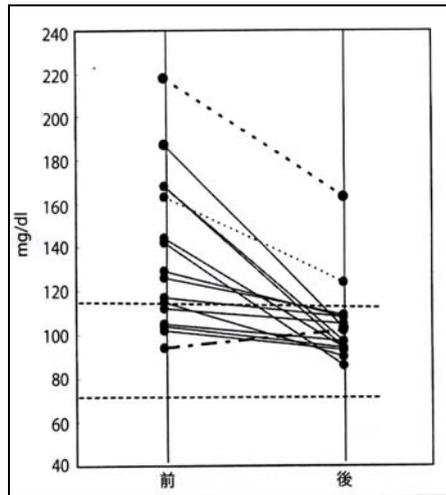
< 図 a pH (動脈血) >



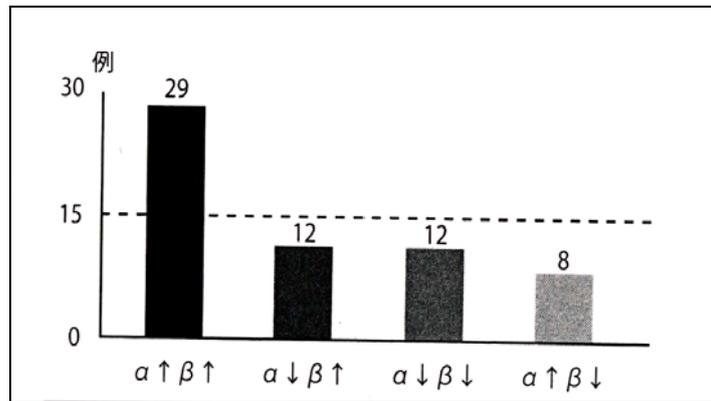
< 図 b 血糖値 >

²⁵ かな拾いテストとは、被験者に全て平仮名で書かれたおとぎ話と全く文章になっていない文を提示し、2分間で母音にのみ丸を記入させる。丸をつけた箇所の母音の正誤、見落としを検査する。

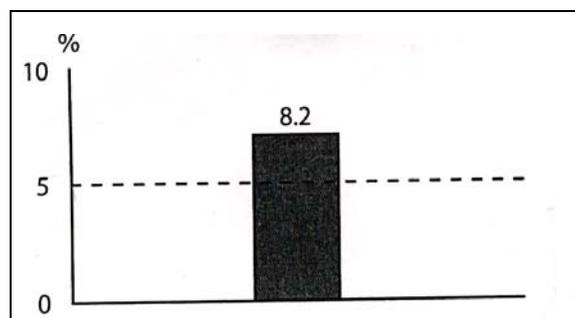
²⁶ 中島英雄「笑いとユーモアの科学」ユーモア・サイエンス学会編「笑いの科学 Vol.1」松籟社、2008；pp. 44-48.



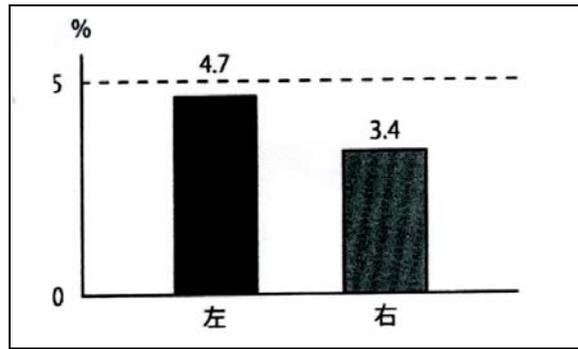
< 図 c 脳波 61 例 >



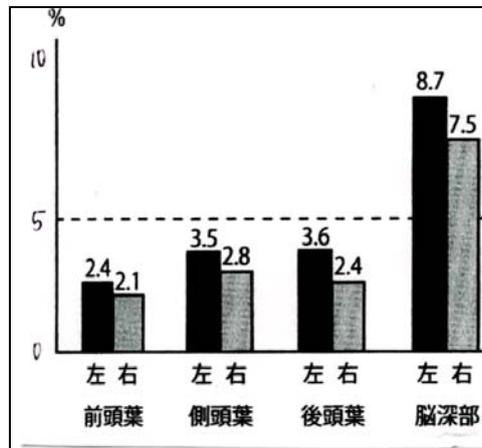
< 図 d 全脳の増減率平均値 >



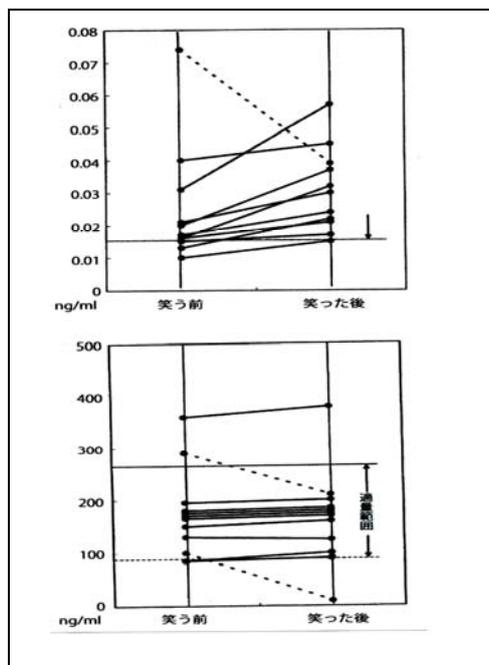
< 図 e 全症例 (40 例) の左右大脳半球の増減率 >



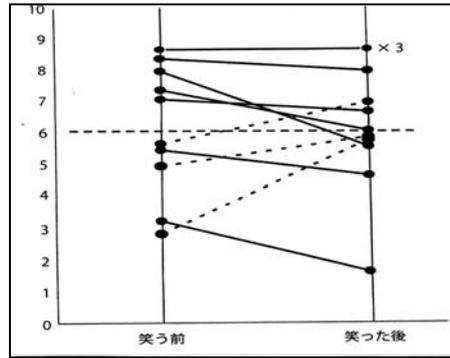
< 図 f 左右共増加 19 例の部位別増加率 >



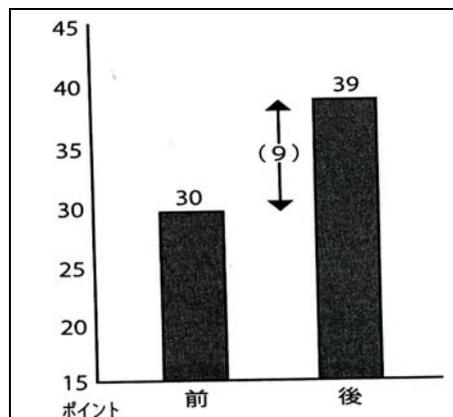
< 図 g ドーパミン (上) とセロトニン (下) >



< 図 h 血小板凝集能 >



< 図 i 正答平均数 >



< 中島英雄「笑いとユーモアの科学」ユーモア・サイエンス学会編
「笑いの科学 Vol. 1」松籟社、2008 ; pp. 44-48. >

中島はこれらの実験結果を基に、笑いが副交感神経支配（リラックスマード）にすると同時に、交感神経支配も適切に活性化させると結論付けている。副交感神経支配と交換神経支配が同時に活性化されることから、笑いが身体の健康にとって有益であるだけでなく、精神の健康にとっても重要な役割を果たすということが出来る。

こうした笑いの効果は補完代替医療として注目され、自己治癒力を高める療法である笑い療法や、笑いを持って患者の自己治癒力を高めることをサポートする笑い療法士の推進が行われるようになった²⁷。次項では、笑い療法の先駆けとも言われているノーマン・カズンズの体験記をみていく。

²⁷ 高柳和江「補完代替医療としての笑い」日本補完代替医療学会誌第4巻第2号、2007 ; pp. 51-57.
高柳によると、補完代替医療における笑いとは、自己治癒力を高める療法である。2005年より、高柳が代表世話人を努める「癒しの環境研究会」では、笑いを持って患者の自己治癒力を高めることをサポートする「笑い療法士」の認定及び育成を行っている。

ノーマン・カズンズの体験記

医学の分野において笑いと健康との関連が研究の対象となり始めた発端は、1976年、アメリカの医学専門誌『ニューイングランド・オブ・ジャーナル・オブ・メディシン (New England of Journal of Medicine)』に掲載されたジャーナリストのノーマン・カズンズ (Norman Cousins、1915–1990) の体験記にまでさかのぼる²⁸。これは「生への意欲の強化と笑いとビタミンCの大量投与²⁹」によって難病の強直性脊椎炎を克服したカズンズの体験記である。邦訳本の『笑いと治癒力 [Anatomy of an illness as perceived by patient: reflection on healing and regeneration (W. W. Norton & Company, Inc, 1979)]』(岩波書店、2001)を基に、カズンズの発病から回復に至るまでの経緯を整理してみよう。

『サタデー・レビュー (Saturday Review)』の編集長を務めていたカズンズは、文化交流問題の検討のためのアメリカ代表団の団長としてソ連を訪問した直後、1964年8月に体調を崩し始め、一週間もしない内に、痛みから顎・腕・手・指・脚を動かす事ができなくなった。複数の専門医にかかった結果、膠原病の一種である強直性脊椎炎を患っていることが判明する。症状は極めて深刻で、全快の可能性を500分の1と診断する専門医がいる程の重症であった。

「その五百人中の一人になるつもりなら、当然のこと、単に受身の傍観者に甘んじていてはだめだ³⁰」と彼は自ら治療法を考案するようになる。その背景には、患者の治療上の必要よりも病院職員の都合からなされる勝手放題な検査や過剰の薬物投与、患者の休養よりも病院の日課を優先した生活環境、杜撰な衛生管理及び栄養管理などの理由があった。

彼はまずソ連国内での自分の行動を振り返り病気の原因を探った結果、副腎と内分泌系全般を活発にすることが治療に役立つという結論に至る。ハンス・セリエ (Hans Selye) の『生命のストレス (In vivo : the case for supramolecular biology)』を読んで、不快なネガティブな情緒が人体の化学的作用にネガティブな効果を及ぼし、副腎の疲労などの症状を引き起こすことを知ったことから、反対に肯定的な情緒が積極的な化学反応を引き起こすのではないかと、思いつく。そして、愛・信仰・信頼・希望・笑い・生への意欲が治療的価値を持つ、という仮定を立て、主治医と相談しながら治療を実行していくのである。

²⁸ 『ニューイングランド・オブ・ジャーナル・オブ・メディシン』は、アメリカのもっとも権威ある医学専門誌であり、専門家以外の書いたものが掲載されることは極めて稀なケースであった。カズンズ氏の体験記は、アメリカの医学界にすさまじい反響を生み、彼の下には三千通を超える各地の医師からの投書が殺到した。

(松田銃「訳者のことば」ノーマン・カズンズ著／松田銃訳『笑いと治癒力』岩波書店、2001；p. 187.)

²⁹ カズンズ 前掲書、2001；p. 125.

³⁰ カズンズ 前掲書、2001；p. 6.

カズンズはすぐに病院からホテルの一室に引越し、ビタミン C の大量摂取とともに、体内の化学作用増進法の一つとして、積極的情緒の喚起のために笑いを計画的に取り入れていった。「脊椎と関節の骨が一本残らず火がついたように痛みながらあおむけに臥せているのは、面白いどころの騒ぎではない³¹」状態であったが、手始めに滑稽な映画を鑑賞し、10分笑うと少なくとも2時間は痛みを感じずに眠れるという鎮痛効果を得た。その後も、コメディ、ジョーク集、ユーモア小説、家族や友人との冗談など、笑う機会を日課として取り入れていった。そして、ひどい時には発話するのさえ困難だった状態から、8日後には指を動かしても痛みを感じないほどに回復し、数ヵ月後には職場に完全に復帰したのである。

彼の回復にとって、笑いほどの程度重要だったのだろうか。後に膠原病を患う女性から笑いについて尋ねられた際、彼はこう答えている。

笑いについて重要なのは、単にそれが寝たきりの人間の体内の運動——一種の内臓ジョギング——をさせることだけではなくて、ほかのあらゆる積極的な情緒までも作用できるようなムードを作り出すことだ、一言で言えば、笑いはいいことが起こり得るように、その助けをするのだとわたしは答えた³²。

この言葉を咀嚼すれば、笑いを医療の現場に取り入れるのは、体内の運動を引き起こすという治療目的のためだけではない。笑いには不安や絶望や暗澹たるムードを一転させ、積極的な情緒を引き起こすという当人の主観的な世界観を好転させる力がある。その笑いの好転力がより良いことを引き起こす中核を担うからこそ、笑える状況ではない治療の現場にも笑いを取り入れることが重要だということである。

カズンズ氏の体験記を通して見出せることは、笑いが身体に対して治療的効果を持つこと以上に、笑いがポジティブな情緒を喚起させる要因の一つとなることである。そして、たとえ体の痛みや先の見えない不安に苦しむ中でも、人は笑いを失わない強さを持ち得るという事実である。

次節では、笑いのもたらす心理的变化と、笑い好転力の真髄だと考えられる積極的情緒に焦点を当て整理していく。

第2節 笑いの心理的变化

本節では笑いのもたらす心理的变化を整理していく。ここでは、笑うという行為がもたらす身体的変化から精神的変化を推測する構造をとるが、この議論の土台は、ジェー

³¹ カズンズ 前掲書、2001；p. 16.

³² カズンズ 前掲書、2001；p. 150.

ムズ＝ランゲ（James-Lange）説及び顔面フィードバック仮説に基づいている。

ジェームズ＝ランゲ説

ジェームズ＝ランゲ説とは、1884年にアメリカの心理学者ウィリアム・ジェームズ（William James）と1885年にデンマークの生理学者カール・ランゲ（Carl Lange）が個々に提出した理論である。ほぼ同時に提出された理論なので、彼らの名前を組み合わせ、ジェームズ＝ランゲ説と呼ばれている³³。

ジェームズ＝ランゲ説の中心的な考え方は、情動的刺激の知覚に続いて身体および内臓の変化が生起し、この変化によって感じる体験が感情であるとするものである³⁴。ジェームズは、彼自身の仮説に関して以下のように述べている。

私の仮説は、身体的変化が興奮している事実の知覚を直接伴い、これらが起こすのと同じ変化の感じ feeling が情動 emotion であるということである。一般的には、幸運を失ったときには

悔しいし悲しい。また熊にあったときには怖くなり、逃げる。敵から屈辱を受けたときには怒り、攻撃すると考えられる。ここで正しいと論じている仮説によれば、この一連の順序が誤りであり、一つの心的状態は他の心的状態によって直接生じるのではない。合理的に説明すると、始めに身体的表出がありそれらの間隙に入り込み、われわれが泣き叫ぶために悲しく、衝突するために怒り、震えるために怖くなるのであり、悲しくなり、怒り、怖くなったために泣き叫び、衝突し、震えるわけでない³⁵。

すなわち、ある出来事に遭遇した（幸運を失った）ときに、始めに身体的表出（泣く）があり、それ故にある心理的状态（悲しい）が生じるとする考え方である。具体的に言えば、「悲しくなるから泣く」のではなく、「泣くから悲しくなる」と言えるのである。

³³ 現在の感情理論におけるジェームズ＝ランゲ説の位置づけに関して、心理学者の鈴木直人は、「ジェームズ（James, 1884）は「泣くから悲しくなる」という抹消説を提唱した。この考え方は同時期に心臓血管系や内臓系の活動が感情体験をもたらすと考えたランゲ（Lange, 1895）とともに、ジェームズ＝ランゲ（James-Lange）説と呼ばれている。抹消説はキャノン（Cannon, 1915）によって批判され、一時期衰微したが、トムキンス（Tomkins, 1962~1963）の顔面フィードバック仮説などによって見直され、先に述べたネオ・ダーウィニズムと結合して、基本感情説と呼ばれるようになり、現在の感情理論の中心的立場を占めている」と述べている。

（鈴木直人「最近の感情心理学研究の動向とその課題」鈴木直人編『感情心理学』朝倉書店、2007；p. 2.）

³⁴ ロス・バック著／畑山俊輝監訳『感情の社会生理心理学』金子書房、2002；pp. 100-101.

³⁵ 福田正治「付録「情動とは何か」（抄訳）」福田正治『感じる情動・学ぶ感情～感情学序説～』ナカニシヤ出版、2006；pp. 174-175 James, W., *What is an Emotion?*, *Mind*, 19:188-205, 1884. 本稿では、ウィリアム・ジェームズ論文の福田による邦訳を引用した。

顔面フィードバック仮説

身体的表出が感情経験を引き起こすというジェームズ＝ランゲ説を補強したものが、顔面フィードバック (Facial feedback) 研究である。心理学者の余語真夫は、表情と感情経験や生理状態との間を媒介するフィードバック過程を最初に述べた人物として、1962年トムキンス (Tomkins) を挙げている³⁶。

余語によれば、トムキンスが感情の源とするのは表情である。顔面部位にある筋肉と腺の生得的な反応パターンの感覚フィードバックの結果として感情が生じる。感情は、特定の表情筋の組み合わせによる表情パターンが、脳へとフィードバックされた結果喚起されるものである。トムキンスは脳の皮質下に遺伝的に組み込まれた感情プログラム (innate affect program) があると仮定しており、刺激の入力により皮質下中枢で生じた神経発火が表情筋および皮膚感覚の反応パターンを生じさせ、その結果生じた表情パターンが脳へとフィードバックされ、感情が経験されるとする³⁷。

ジェームズ＝ランゲ説及び顔面フィードバック仮説は、共通して身体的表出が感情経験に先立つという構図をとっている。

笑いは幸福感と結びつく

では、笑いという身体的表出はどの感情経験と結びつくのであろうか。表情研究の第一人者であるアメリカの心理学者ポール・エクマン (Paul Ekman) とウォレス・フリーセン (Wallace V. Friesen) らの研究チームは、顔に表れる感情を、幸福、悲しみ、驚き、恐怖、怒り、嫌悪の6つのカテゴリーに分類している。さらに、これら6つの基本的な感情が混ざり合った恥ずかしさや興奮などを含む33種類の感情を挙げている³⁸。エクマンらは、笑いに関して以下のように記述している。

幸福は、ここまで述べてきたように、タイプだけでなく強さにおいてもさまざまである。控えめな喜びもあるし、エクスタシー、あるいは歓喜もある。幸福は沈黙したままでも、聞き取れる形でも示される。微笑から、大きく口を開けて笑うものまでさまざまである。そのうちには、含み笑いやふつうの笑い、あるいはもっと極端な形では涙を流すような笑いがある。ふつうの笑い、あるいは含み笑いが、それだけで幸福の強さを示すわけではない。非常にうれしくとも笑わないことがある。げらげら笑っ

³⁶ 余語真夫「表情と感情のメカニズム」吉川左紀子、益谷真、中村真編『顔と心－顔の心理学入門－』サイエンス社、1993；p. 146

³⁷ 余語真夫 前掲書、1993；pp. 146-147.

³⁸ P. Ekman・W. V. Friesen著／工藤力訳編『表情分析入門－表情に隠された意味をさぐる－』誠信書房、1987。Paul Ekman and Wallace V. Friesen, UNMASKING THE FACE, San Francisco, 1975；p. 31.

たり、くすくす笑うのは、ある特別のタイプの幸福経験と共に起こる。子供に限らず大人でもある種の遊戯（play）は、その心がわくわくするものであれば、声を出して笑うタイプの幸福感を生み出すものである。ある種のジョークは、笑いを伴うタイプの幸福感を生み出せる³⁹。

すなわち、笑い声の有無や微笑の強弱といった程度の違い、笑いに表出される本人の幸福度合いの違いはあるものの、笑う主体の感情経験に焦点を当てて言えば、笑いが結びつく感情は幸福感である。それは、エクマンらの「笑いが起こるときには、その人が幸福な気分にいるのにまずまちがいないからである⁴⁰」という言葉からも明らかである。

次節では、笑うという身体的表出がむすびについている幸福感に焦点を当て、幸福感が人にもたらす効用を整理する。

第3節 幸福感の効用

本節では、笑っている主体の感情経験の内、幸福感にのみ焦点を当てて議論を進める。何故なら、エクマンの指摘したように笑いが結びつく感情で最たるものは幸福感だからである。

感情研究の流れ

誰もが日常的に経験する感情に関して、科学的に明らかにされていることは多くない。何故なら、心理学や自然科学の領域で学術研究の対象として感情が取り扱われ始めたこと自体が、近年の新しい学問的潮流だからである。

心理学者の鈴木直人は、「最近の感情心理学研究の動向とその課題」（『感情心理学』朝倉書店、2007 所収）の中で近年の感情研究の流れをまとめている⁴¹。

鈴木によれば、心理学において感情が非科学的な存在として扱われてきた理由は以下のとおりである。

従来、感情研究は、感情現象が複雑であいまいであることや、感情は主観的な個人的な現象であること、個人にとっての感情喚起刺激が必ずしも他人にとっても喚起刺激とはならないこと、さらには主観的経験は繰り返し経験され、観察されるものではないこと、感情現象は操作的に定義しがたく、また操作できないことなどの理由で近代

³⁹ エクマン 前掲書、1987；pp. 130-131.

⁴⁰ エクマン 前掲書、1987；pp. 6-8.

⁴¹ 『感情心理学』（朝倉書店、2007）は、感情と人格をテーマにこの分野における感情心理学の動向がまとめられた本である。鈴木直人は編者を務めている。

心理学の分野にはなじまないものとして等閑視されてきた⁴²。

つまり、主観的かつ一時的である感情を研究対象とすることは、元来客観性や普遍性を追求する学問体系になじまないということと、こうした研究対象に対して「世界中のどこでも同一の条件を整えることが出来、いつ誰が行っても同一の結果を出すことができる」という科学的実験の研究手法を編み出し得なかったことが、感情に対する学問的取り組みを長らく阻害してきたと言える。

しかし近年では、fMRI、PET、NIRS といった高度な研究機器の発展により、科学的実験の研究手法をとる素地が整ってきたことや、生命科学やロボット工学の分野で感情に対する関心が高まってきたことから、1984年には国際感情学会（International Society for Research on Emotion: ISRE）が発足し、1992年には日本感情心理学会⁴³が設立され、学問的取り組みが活性化してきた⁴⁴。なかでも、幸福感を含むポジティブ・サイコロジーの出現は、1984年から2003年までの20年間の感情研究の内容に関する特徴の一つであると鈴木は指摘する⁴⁵。鈴木は、1984年～2003年の20年間の日本における感情関連の論文・発表を分析した結果、ポジティブ感情に関する研究の動向を以下のようにまとめている⁴⁶。

鈴木によれば、2000年を境にポジティブ感情に関する研究は急激に増加したものの、論文数から言えば、2000年～2003年に掲載された論文が対象とする感情の内、不安が約1万3000件、恐れが約4000件、怒りが約2000件とネガティブ感情が大半を占めるのに対して、ポジティブ感情の中心的位置を占めると考えられる喜びを対象とした研究はわずか約1000件であるという⁴⁷。

これらの報告から、感情研究そのものが新しいだけでなく、不安や抑圧など否定的な感情に比べ、幸福感などの肯定的な感情に関する研究は、論文・発表数も少なく、取り組みが始まったばかりであることが分かった。

⁴² 鈴木 前掲書、2007；p. 1.

⁴³ 日本感情心理学会ホームページは、http://www.jasre.org/index.php?file_add=bbs (2009/7/10 閲覧) である。
掲載されている会則によれば、「本会は、感情研究に関心を持つ者が、知識・技術の交流と親睦を図り、感情心理学および近接領域における研究を推進し、その成果の普及に貢献することを目的」として設立された。

⁴⁴ 鈴木 前掲書、2007；p. 1-3.

⁴⁵ 鈴木 前掲書、2007；p. 7.

鈴木は、近年の感情研究の内容に関する特徴として以下の四点を挙げている。第一に、ポジティブ・サイコロジーの出現。第二に、ストレスを中心とする感情と健康に関する研究やあれアレキシミアの研究が隆盛を極めていること。第三に敵意・攻撃性・罪悪感・羞恥・自尊感情などの社会的感情に関する研究の著しい増加。第四に、脳イメージング法を用いた感情の神経基盤や感情のネットワークに関する研究の出現である。

⁴⁶ 鈴木 前掲書、2007；p. 6.

鈴木は、1984～2003年の20年間の『心理学研究』、*Japanese Psychological Research*、『感情心理学研究』、『健康心理学研究』、『実験社会心理学研究』、『日本心理学会発表論文集』、『日本感情心理学会発表妙録』などの日本における感情関連の論文・発表、および心理学関連文献データベース (PsychINFO) に掲載された感情関連の論文を分析した。

⁴⁷ 鈴木 前掲書、2007；pp. 6-9.

幸福感をもたらす効用

では、感情全体の中で幸福感はどのように位置づけられてきたのだろうか。ここでは志水の説明に沿って、アメリカの心理学者ウッドワースの提唱した感情のスペクトル説と、ウッドワースの弟子であるシュロスバークの提唱した感情の円環モデルを紹介する。

志水の説明によれば、ウッドワースの提唱した感情のスペクトルでは、各種の感情は光のスペクトルのように連続したものである（図4参照）。スペクトル説において、感情は感情の連続体の上にある場所に一定の広がりを持って位置しており、各種の感情がまったく独立するのではなく、互いに接点をもつ連続体であると考えられている。そのため、表情の読み取りの際、近接する感情は誤認されやすい。たとえば、怒りは隣接する嫌悪と混同されやすく、離れている幸福と混同されにくい。

<図4 感情のスペクトル（ウッドワース、1938）>

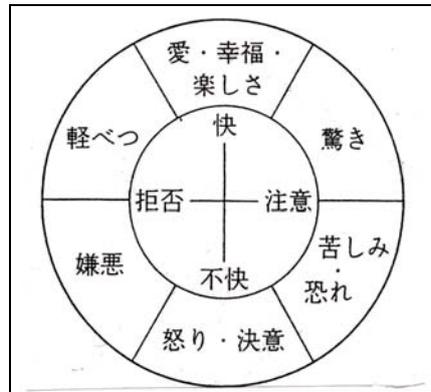
愛 幸福 楽しさ	驚き	怖れ 苦しみ	怒り 決意	嫌悪	軽べつ
----------------	----	-----------	----------	----	-----

<志水彰、角辻豊、中村真『人はなぜ笑うのか～笑いの精神生理学～』
講談社、1994;p.138.>

しかし、ウッドワースの弟子であるシュロスバークがさらに研究を進めた結果、最も遠い関係であるはずの幸福や楽しさが軽蔑を混同されることが多いことが見出された。このことから、ほかの感情との位置関係を維持したまま幸福と軽蔑の関係を近づけるために、シュロスバークは一直線であった連続体の両端を接続し、感情を円環状の連続体として捉えた（図5参照）。感情の円環モデルでは、隣接する感情は近い関係であり、直径の両端に位置する感情は最も遠い関係となる。これによって、幸福と最も遠い関係にある感情は怒りであることが見て取れる⁴⁸。

⁴⁸ 志水彰、角辻豊、中村真『人はなぜ笑うのか～笑いの精神生理学～』講談社、1994;pp.137-140.

<図5 感情の円環モデル (シュロスバーグ、1952) >



<志水彰、角辻豊、中村真『人はなぜ笑うのか～笑いの精神生理学～』
講談社、1994;p. 140. >

以上、志水の説明に沿って2つの感情モデルを見てきた。用いる感情モデルによって感情全体における幸福感の位置は異なるが、共通して言えることは、感情を快・不快に二分したとき、幸福感は明らかに快感情に分類されるということである。

幸福に関する心理学的研究をまとめた『幸福の心理学 [THE PSYCHOLOGY OF HAPPINESS, London, 1987]』(誠信書房、1994)の中で、著者のマイケル・アーガイル (Michael Argyle) は幸福感を「正気分」「良い気分」と呼び、より大きな枠組みの中で幸福感を捉えている。

幸福感の定義に関して、アーガイルは「人びとがどのように感じているかということについての主観的報告に全幅の信頼を寄せたいのである。すなわち、もし人が自分が幸せであると言え、本人は事実幸福なのであり、もし人が自分はひどく気がめいっていると言え、本人はまさにうつ状態にある⁴⁹」という立場をとっている。幸福に対する主観的報告が、他者による評定もしくは客観的測度のいずれとも必ずしも一致しない場合でも、被験者本人が幸福である、或いは不満であるとするならばそれを事実として取り扱うと定義する⁵⁰。

幸福感の定義を被験者からの主観的報告に因るとした上で、アーガイルは「良い気分は行動と思考過程にも多くの強力な効果を及ぼす⁵¹」とし、正の思考、記憶、問題解決、援助行動と愛他心、他者を好きになることの観点から、正気分の効果をまとめている。アーガイルの議論は以下のとおりである。

正の思考に関して言えば、催眠を用いて、幸福気分とうつ気分を作り出した実験によって、人々は、悲しい気分である時よりも幸せな気分である時の方が、正の自由連想、快活な TAT (主題統覚検査) 物語、社会的事象の寛大な記述、社会的に有能であるとの

⁴⁹ マイケル・アーガイル『幸福の心理学』誠信書房、1994 ; p. 2.

⁵⁰ アーガイル 前掲書、1994 ; pp. 2-3.

⁵¹ アーガイル 前掲書、1994 ; p. 149.

自己知覚、自身と自尊の感情が導かれることが分かっている。また、良い気分にある個人は、ビデオテープの録画上の自分自身と他者の行動に負の行為よりも正の行為を多く知覚する。

記憶に関して言えば、人々は良い気分下では幸せな出来事や正の単語の記憶を高めることができる。催眠によって幸福な気分或いは悲しい気分誘導された被験者に対して、単語リストを学習させ、後でそれを再生するよう求めたところ、幸福な気分下で単語を再生した場合、幸福な気分下で学習した単語の78%を、悲しい気分下で学習した単語の47%を再生した。また、被験者は幸福な気分下では幼少期の不快な出来事(26%)より楽しい出来事(2%)を多く想起した。

問題解決に関して言えば、良い気分下にある人々はより迅速に行動しもっとも簡明な方略で解を導く。画鋸入りの箱1個とマッチ1個が与えられ壁に一本のろうそくを取り付けるといふ問題に対して、何も映画を見ていなかった者たちの13%が1本の非喜劇映画を見ていた者たちの20%が解答を見つけた一方で、事前に1本の喜劇映画を見ていた者たちではその75%が解答を導き出した。

援助行動に関していえば、幸福な人ほど他人に援助の手を差し伸べ人に寛大であることを多くの実験は示している。ある実験では、統制条件下では献血を申し出たのが17%であったのに対し、幸せな過去の出来事を想起することで幸福な気分にある被験者群では47%が献血を申し出た。

他者を好きになることに関して言えば、喜劇映画や正の自己陳述によって喚起された良い気分下では、他者に関して比較的肯定的な評価を導くことが明らかにされている⁵²。

これらの調査結果に基づいて、アーガイルは幸福感のもたらす効用を「正気分は、肯定的な思考、幸せな出来事の美化再生、すぐれた創造性と問題解決、援助行動の増大、ならびに他者への好意の増大を生み出す母体である⁵³」と結論付けている。

さらに、アーガイルは「精神医学が苦悩の軽減に関心を置くのに対し、われわれの重要な関心は、人生に対する満足感の高揚および正の情動にある⁵⁴」とし、自発的に幸福の増進に取り組むことを提案している。

アーガイルは人々が大きな正気分を喚起する方法として薬物やアルコールなどの快活動を選択する場合に関しては注意を促している。何故なら、薬物の使用や大量のアルコールの摂取は歓喜ではなく単なる興奮を呼び起こすものであり、かえって健康上の害をもたらす恐れや、非合法的な行動や犯罪を誘因するなど、非倫理的なものに転じる可能性があるからだ。一方で、笑いに関しては以下のように述べている。

喜劇映画が楽しい気分を誘導することにわれわれは留意したが、ユーモアに誘導され

⁵² アーガイル 前掲書、1994；pp. 149-154.

⁵³ アーガイル 前掲書、1994；p. 154.

⁵⁴ アーガイル 前掲書、1994；p. 215.

るこの気分は、喜びと興奮の組み合わせだったもの（137 ページ）にほかならず、ある社会的出会いの享受と組み合わせられる場合が多い。人が笑うときには、二つのことが起こっているのである。いわゆる冗談には、一定の事態をそれほど脅威的でも、深刻でもないとして再定義する効果があるが、と同時に、当の冗談のちぐはぐさがカタルシスや緊張の解除、不安その他負情緒の快適な低下を誘導する。人を元気づけるために最もよく使われる方法の一つは、当人に冗談を言うことなのである⁵⁵。

すなわち、笑いは喜びと興奮の組み合わせだった幸福感の誘因剤であり、二つの点で効果がある。第一に、事態をそれほど驚異的でも深刻でもないとして再定義する作用。第二に、緊張や不安など負の情緒を低下する作用である。

こうした笑いの作用から、笑いは薬物やアルコールなど着手するのに慎重さを要する快活動とは対照的に、副作用のない幸福感の増進剤であると言えるだろう。

アーガイルの議論を要約すると、笑うことによって喚起される幸福感は、当人の思考と行動に好ましい影響を与える。思考過程を正の思考へと導くだけでなく、当人にとって心地の良い記憶を想起させるという思考過程に変化を及ぼす。行動としては、創造性に富んだ問題解決能力を高め、他者への援助行動を増大させるという行動に好影響を与える。また、他者を好意的に理解する他者理解を促す。笑いは喜びと興奮の組み合わせだった幸福感を誘引し、事態の再定義と緊張や不安感などの負の情緒を低下させる効果がある。

以上、本章では医学的効果と心理的变化及び幸福感の効用という観点から笑いの効用を整理した。中島の研究より、笑うことが副交感神経支配と交換神経支配が同時に活性化されることから笑いが身体の健康にとって有益であるだけでなく、精神の健康にとっても重要な役割を果たすことが分かった。

カズンズの体験記から、笑いが医学的に有用であるだけでなく、笑いは積極的情緒を引き起こし事態を好転させる力を有していることが見出された。

アーガイルの幸福感の効用に関するまとめから、笑いによって引き起こされる幸福感は当人の思考と行動に変化を与え、肯定的な物事の捉え方や問題解決への行動を促すことが分かった。

本章でみてきたように、身体活動としての笑いは、身体及び精神の双方に密接に関わり合いながら当人の思考過程や行動過程に変化を生じさせ、肯定的な物事の捉え方や問題解決能力を高める中核を担う。逆説的ではあるが、笑えないような深刻な状況でこそ、こうした笑いの好転力が役に立つと言えるだろう。

次章では、象徴としての笑いを取り上げ、文化の中で笑いがどう取り扱われてきたか

⁵⁵ アーガイル 前掲書、1994 ; pp. 219-220.

をまとめる。

第四章 象徴としての笑い

第二章、第三章を通して理解しようとしたことは、人間の身体活動としての笑い現象であった。しかし、人間の行為としての笑いの解明に留まるのでは、笑いを深く理解したことにはならない。何故なら、人は日常生活の中で笑うだけではなく、文化の中で笑

いを取り扱ってきたからだ。それは、経典や神話、儀礼などの宗教的要素の中に人類が笑いを取り入れてきたことから考察することができる。こうした笑いを象徴としての笑いと呼び、本章では象徴としての笑いを整理することを目的とする。

第一に、ベルクソンの笑い論を取っ掛かりとして、その背景としてのキリスト教の聖書における笑いを取り上げる。第二に、日本の神話や神事及び信仰における笑いを整理する。第三に、スリランカの悪魔祓いの儀礼における笑いをまとめる。

第1節 ベルクソンの笑い論とその背景

人類は、笑いにどのような意味を付与してきたのだろうか。その背景に迫るために、まず、フランスの哲学者アンリ＝ルイ・ベルクソン (Henri-Louis Bergson、1859-1941) が、1900年に出版した『笑い (Le rire)』を取り上げる。現在では笑い学の古典の一つとなっている文献である。

本節では、邦訳本の『笑い』(岩波書店、1938)を基にベルクソンの笑い論を整理し、その背景を考察する。

ベルクソンの笑い論

ベルクソンは、笑いの問題を「アリストテレス以来、おえらい思想家たちがこのちっぽけな問題と取り組んで来たが、この問題はいつもその努力を潜りぬけ、すりぬけ、身をかまし、またも立ち直るのである。哲学的思索に対して投げられた小癩な挑戦というべきだ⁵⁶」と言い、笑いとは何を意味し、笑いを誘うものの根底には何があるかについて真っ向から対峙しようとした。そのために、まず滑稽そのものよりも滑稽を索ねるべき場所として三つの観察を示している。

第一に、人間が笑いの対象とするのは人間である。景色を賞賛することはあっても景色を笑うことはなく、動物を笑うとしてもそれは動物が人間的な態度をみせた場合であり、帽子を笑うとしても帽子そのものではなく帽子に型を与えた人間的気まぐれを笑うのである。人間のみが滑稽であり、おかしみには常に人間的な意味が付随する。人間は笑うことを心得た動物であると同時に、人を笑わせる動物である。

第二に、笑いは無感動が伴う。情緒は笑いの最大の敵であり、憐憫や愛情を抱きながら笑うことはできない。その行為をしている人々への共感や、あらゆる事件への感情的な共鳴を捨て、われ関せずの見物人になったとき、多くのドラマは厳粛から笑い事へと移るのである。

⁵⁶ ベルクソン著／林達夫訳『笑い』岩波書店、1938；p. 11.

第三に、我々の笑いは常に集団の笑いである。孤立を感じる時、人が滑稽さを味わうことはない。ある集団の中で起こる笑いを集団の外の人間が見たとき、その笑いを共有することはできない。笑いは共同生活の或る要求に応じているものであり、社会的意味をもっているに違いない。社会にとっての有用な役目が笑いにはあるはずである。

ベルクソンはこれら三つの観察が寄り集まる点として「おかしみというものは、おもしろにグループとなって集まっている人びとが、彼らの感性を沈黙させ、ただ彼らの叡智のみを働かせて彼らのうちの一人に向けてときにうまれるものであろう⁵⁷」とまとめる。そして、笑いに関して明らかにすべき課題を「彼らの注意が向けられるべき特殊な点はどんなものか。この際、叡智はいかなることに用いられるのであろうか⁵⁸」と二つの課題を提示する。すなわち、笑いを引き起こすおかしみの要因と笑いの社会的役割である。

ベルクソンは様々な事例を用いて笑いの起きる状況を分析しているが、あらゆる事例の中に共通するおかしみの要因を「笑うべき点は、注意深いしなやかさと生きた屈伸性があるって欲しいところに、一種の機械的なこわばりがある点だ⁵⁹」と指摘する。たとえば、往来を走っていた男がよろめいて倒れるのを人は笑う。それは、道端の石を注意深く避けて通るべきだったのに、筋肉が依然として同じ運動を行い続けていたために転んだからである。或いは、数学的な几帳面さで仕事に精を出している人がいつも通り腰掛けようとした際に椅子が引かれていて尻餅をつく場合や、インク壺にペン先を浸すとインクの代わりに泥が詰められていて泥をひきだす場合、人は笑う。それは、彼が運動を止めるか別の運動をしなければならなかったのに、習慣という機械的なこわばりがあったために、尻餅をつき泥を引き出したからである。すなわち、おかしみの要因はこわばりである。

では、何故人はこわばりを笑うのか。それは、「こわばりはすべて社会の懸念の種になる⁶⁰」からである。「生活と社会とが我々各人から要求するところのものは、現在の境地の輪郭を識別するところの絶えず気を張っている注意であり、それはまた、我々をそれに適応させることができる肉体と精神との一種の弾力である⁶¹」という言葉に凝縮されているように、人が社会に求め、また社会が人に求めるものは、緊張と弾力である。社会に適応するためには、緊張と弾力を持つことが必要であり、反対にこわばりをもつことは社会に対する不適応を意味する。社会に対する不適応を示した人間は社会の懸念の種であるため、懲罰として人は彼を笑うのである。

ベルクソンは笑いの社会的役割を、「笑いは何よりもまず矯正である。屈辱を与えるように出来ている笑いは、笑いの的となる人間につらい思いをさせなければならぬ。社

⁵⁷ ベルクソン 前掲書、1938；p. 17.

⁵⁸ ベルクソン 前掲書、1938；p. 17.

⁵⁹ ベルクソン 前掲書、1938；p. 19.

⁶⁰ ベルクソン 前掲書、1938；p. 26.

⁶¹ ベルクソン 前掲書、1938；p. 26.

会は笑いによって人が社会に対して振舞った自由行動に復讐するのだ⁶²」という言葉で締めくくる。すなわち、笑いの社会的役割とは矯正のための懲罰である⁶³。

以上のベルクソンの笑い論を一言でまとめるならば、「笑いを引き起こすおかしみの要因は、人間のこわばりであり、適応のために緊張と弾力を要求する社会において、笑いの社会的役割は、こわばりを持つ人間への懲罰と矯正である」ということになる。しかし、ベルクソンが笑いの本質としたそれらのものは、まだ笑いの一部分に過ぎないのではなからうか。

何故なら、人は赤ん坊の笑い声を聞いて笑い、友人と成功を分かち合う時に喜びの笑いを共有するように、笑いを引き起こす要因はおかしみのみに留まらない。さらに、笑いの社会的役割が矯正と懲罰に限定されるならば、挨拶の際に見せる親和の笑顔などに説明がつかない。

本論文の第二章で明らかにしたように、笑いを引き起こす要因及び機能には様々な種類があり、笑いとは本来多くの側面を有する現象である。多重層的な議論を要する笑いを一つの側面に落としこめ、笑いの部分的事実を笑い一般の真実であるように語ったベルクソンの笑い論には検討の余地が残されていると言える。

まとめると、ベルクソンの笑い論は、二つの点で一つの側面に限定的である。一つは、笑いを引き起こす要因をおかしみに限定した上でおかしみの分析に始終した点であり、もう一つは、笑いの社会的役割を制裁機能にのみ求めた点である。

しかし、何故ベルクソンの笑い論はこのように一側面的に成らざるを得なかったのだろうか。続いてその背景を探っていく。

現代ユーモア学の開祖であったベルクソン

ユーモア学を専攻する社会学者、森下伸也は『もっと笑うためのユーモア学入門』（新曜社、2003）の中で、西洋哲学における笑いに関する思索の蓄積をユーモア学と総称し、古代ギリシアから現代に至るまでのユーモア学の歴史をまとめている。

森下は、20世紀のユーモア学の代表的な哲学者としてベルクソンとフロイトを挙げ、ベルクソンの『笑い』が後世に与えた影響を以下のように述べている。

笑いに関する科学的研究が遅々として進まなかったひとつの原因として笑いという現象があまりにも瑣末で学問的に検討するにあたいしないという偏見があったように思われる。だが、二十世紀の初頭、二人の偉大なユダヤ的知性が、まさに笑いを主題とする堂々たる著作を書いて、この偏見をみごとに粉砕した。それは、ベルグソ

⁶² ベルクソン 前掲書、1987；p. 179.

⁶³ ベルクソン 前掲書、1987

ン（1859～1941）の『笑い』とフロイト（1856～1939）の『機知—その無意識との関係』である。（中略）ここで大事なのは、笑いについてきらめくような知見を随所にちりばめた『笑い』と、笑いの精神分析を執拗に展開する『機知』によって、数多くの知性が触発され、笑いという謎に本格的に取り組むようになったことだ。そしてそれは、現代のユーモア学に一直線に通じている。すなわち、ベルグソンとフロイト以降、とりわけ二十世紀も後半になると、笑いに関する本格的な研究が加速度的に増え、現在ではじつに多彩な研究がくり広げられているのだ。その意味では、ベルグソンとフロイトこそ現代ユーモア学の開祖とよばれてしかるべきであろう⁶⁴。

すなわち、学問的に検討する研究対象として笑いはふさわしくないとする学問の風潮の中でベルクソンは『笑い』を執筆し、結果的にはその功績が当時の笑いに対する軽視を打ち砕き、それ以降笑いの学問的研究の取り組みが盛んになったということである。言い換えれば、ベルクソンやフロイトの笑いへの学問的取り組みと彼らの功績によって現代ユーモア学が始まったのである。

ベルクソンが笑いの学問的取り組みの先駆的役割を果たしたという森下の指摘は、ベルクソンと同年代のフランスの思想家ジョルジュ・バタイユ（Georges Albert Maurice Victor Bataille, 1897-1962）の講演録『非知』（平凡社、1999）に納められている次の言葉からも裏付けることができる。

バタイユは、1953年2月9日の講演の中で、ベルクソンの『笑い』を購読した感想を、「そのときわたしを熱中させたのは、笑いについて反省することができるかということ、笑いを反省の対象としうるか、というその可能性だったのです⁶⁵」と述べ、「わたしがやっているのが哲学だとすれば、自分の哲学は笑いの哲学だと言うことができます⁶⁶」と、ベルクソンの『笑い』との出会いがバタイユ自身の笑いに関する思索を深める契機となったことを示唆しているからだ。

これらのことから、哲学的思索を深める対象として笑いを選択することが、当時のベルクソンにとっていかに困難を要する作業であったかが推測される。

ベルクソンの笑い論が、笑いの一側面に偏らざるを得なかった理由の一つには、このように新しい分野を切り開こうとする者が受ける時代的制約があったと考えられる。つまり、笑いを取り扱うに当たって豊富な先行研究があったわけではなく、新しく研究を始める切り口として何か一つの視点に焦点を絞る必然性があったと言えるのである。すなわち、時代的制約からみれば、ベルクソンが笑いを引き起こす要因の中でもおかしみ

⁶⁴ 森下伸也『もっと笑うためのユーモア学入門』新曜社、2003；p. 24-25.

⁶⁵ ジョルジュ・バタイユ著／西谷修訳『非知』平凡社、1999；p. 73.

バタイユは講演の中で「反省する」という言葉を「哲学的思索を深める」という意味合いで使用している。

⁶⁶ バタイユ 前掲書、1999；p. 71.

に限定し、研究を行ったことは当然の流れであると言えるだろう。

さらに森下の触れた「笑いという現象があまりにも瑣末で学問的に検討するにあたいしないという偏見⁶⁷」に関して、キリスト教文化圏に位置するフランスが有していたと考えられるキリスト教における笑い観に焦点を当ててみよう。

キリスト教における笑い観

ヨーロッパ思想史を専攻する宮田光雄は『キリスト教と笑い』（岩波書店、1992）の中で、キリスト教と笑いの関係を扱い、「イエスは笑ったか」という観点から聖書を読み直しつつ、キリスト教の新たな側面をさぐることを試みている。

宮田によれば、「新約聖書の中の福音書を読んでいると、イエスがときに涙を流したという記事（たとえばヨハネ一・三五）に出会う。しかし、イエスが笑った、という記事は一度も出てこない。また周囲の人びとに冗談を言って笑わせた、という記事も見当たらない⁶⁸」ことから、「古代キリスト教らしい、イエスはけっして笑わなかった⁶⁹」というのがキリスト教及びイエスの通説である。宮田は、イエスが笑わなかったことを裏付ける証拠のみで、この通説が上塗りされ続け、聖書とユーモアの相性の悪さが強調されてきたキリスト教理解に問題意識を持ち、この通説とは反対に「イエスは笑った」という大胆な仮説を打ちたてて研究を行っている。宮田は聖書においてユーモアがみられる箇所やイエスがユーモアに溢れる人物であったと見出される箇所を取り上げて論じ、キリスト教と笑いの関係に対して新たな解釈を加えた。

一方で「キリスト教史においても、笑いが罪のしるしとして、修道院や教会組織から追放された時代もないわけではない⁷⁰」と指摘し、古代・中世教会において次第に笑いが禁じられ始め、笑いに対して批判的なキリスト教の伝統が形作られていく様子を描いており、たとえば以下の発見を報告している。

すでに新約聖書でも後期の文書では、笑いや冗談にたいする批判があらわれる。たとえば、「卑猥な言葉や愚かな話、下品な冗談」（エペソ五・四）などはキリスト者にふさわしくないという。いな、さらに一歩進んで、「悲しみ、嘆き、泣きなさい。笑いを悲しみに変え、喜びを憂いに変えなさい」（ヤコブ四・九）とさえすすめられる⁷¹。

このように聖書において笑いや冗談が批判的に捉えられているだけでなく、笑いより

⁶⁷ 森下 前掲書、2003；p. 24.

⁶⁸ 宮田光雄『キリスト教と笑い』岩波書店、1992；p. 70.

⁶⁹ 宮田 前掲書、1992；p. 70.

⁷⁰ 宮田 前掲書、1992；p. 124.

⁷¹ 宮田 前掲書、1992；p. 136-137.

も悲しみが、喜びよりも憂いが尊ばれている記述から、キリスト教において、笑いやポジティブな感情が否定的に捉えられていることが分かる。

さらに、宮田は聖書に出てくる笑いの性質に関して以下の発見を記述している。

たしかに、福音書の登場人物で、はっきり笑っているのはイエスの敵対者たちだった。しかも、彼らの笑いは、捕らえられたイエスを前にしたガリラヤの領主ヘロデヤ、十字架のイエスを前にしたユダヤ人指導者たちのように、侮辱と悪意にみちた嘲笑だった（ルカ二三・一一、二三・三五）⁷²。

すなわち、聖書の中において、笑いは親和を示すものではなく、自分よりも低い価値を与えている人間、或いは敵対する者に向ける嘲りの笑いなのである。

宮田の指摘から、キリスト教において笑いの役割が批判的に見られてきたことと、聖書に登場する笑いの質が嘲笑に限定されていることが見えてきた。

こうした笑い観に基づくキリスト教の精神的土壌をもつフランスにおいて、ベルクソンの提出した笑い論の結論が、笑いの持つ社会的役割が懲罰・制裁という限定的な見方に帰結したことは不思議ではないと言えるだろう。

第2節 日本における笑い

日本の代表的な民俗学者柳田国男（1875－1962）は、『不幸なる芸術・笑いの本願』（岩波文庫、1979）の1945年12月に書かれた序の中で「虎溪の三笑とか寒山拾得の呵々大笑とか、またはこの本にも出てくる閻魔大王の笑い顔とか、まだベルグソン氏の言わなかった笑いが、色々こちらには有るように思うのだが、それを集めた見たり考えたりするまでの、時を残念ながら自分は持っていない。他日学問の再び反映する時代が到来して、是が文化史上の大切な、また興味ある一課題であったことを、承認してもらえればもうそれで満足しなければならない⁷³」と述べ、ベルクソンの笑い論とは別の笑い観を日本が有していることを暗示している。

本節では、アマテラス大神話と、樋口清之（1909－1997）の日本人の笑いに対する呪力信仰説、及びかつて行われていた笑いの行事「ヤマノオコゼの行事」に関する柳田国男の研究を整理し、日本の宗教的要素における笑いの観念について言及する。

笑う日本の神々

⁷² 宮田 前掲書、1992；p. 74.

⁷³ 柳田国男『不幸なる芸術・笑いの本願』岩波書店、1979；p. 7.

キリスト教の聖書の中で笑いが批判され、かつキリスト教史の中で笑いが禁じられてきたこととは対照的に、日本では、神話や信仰及び神事といった宗教的要素と笑いが対立することなく結びついてきた。

文献上最も古い事例をあげれば、それは『古事記』の天照大神の天岩戸の場面にまず見ることができる。

天宇受売命、天の香山の天の日影を手次に繋けて、天の真析を縵と為て、天の香山の小竹葉を手草に結ひて、天の石屋戸にうけを伏せて踏みとどろこし、神懸り為て、胸乳を掛き出で裳緒をほとに忍し垂れき。爾に高天原動みて八百万の神共に咲ひき。

[天宇受売命は天の香具山の聖なる日影蔓を襷にかけ、聖なる真拆葛を髪飾りにして、天の香具山の笹の葉を採物に束ねて手に持ち、天の岩屋戸の前に桶を伏せて踏み鳴らし、神がかりにして胸の乳を露出させ、裳の紐を陰部までおし垂らした。すると、高天原が鳴り響くほどに数多の神々がどっと笑った⁷⁴。]

この場面は、天岩戸に身を隠してしまった天照大神が天宇受売命の踊りと八百万の神々の笑いによって再び世に出て来た場面である。天照大神は須佐之男が乱暴を働いたことに腹を立て天の岩戸に隠れてしまうのであるが、太陽神である天照大神が隠れてしまったために、世の中は真っ暗になり悪いことばかりが起こるようになる。そこで、八百万の神々が相談して天岩戸の前でお祭りを行い、天宇受売命が半裸体になって踊ると、八百万の神々がどっと笑う。何故皆が騒いでいるのかと訝しがって天照大神が岩戸を開けたとき、天手力男が扉を開け、天照大神を招きだすと、世の中は再び光を取り戻すのである⁷⁵。

日本の考古学・民俗学を専門とし幅広い研究を行った樋口清之は、民俗学的著書『笑いと日本人』（講談社、1982）の中で、このアマテラス大神話を取り上げ「ここで私が最も重視したいのは、笑いによって神が出現したとされている点である⁷⁶」と述べ、この神話の意味を以下のように解釈する。

さらに、ここで重要なのは、天照大神が太陽神としての性格をもっていることである。農耕社会にあっては、太陽がそのもっている物理的性格から最も重要な要素で、しかも人間の力に及ばない現象であることから、神聖視された。つまり、太陽こそが人間に幸福をもたらす源と考えられていたということである。

そして、その太陽神＝天照大神を招くことが、笑いによってなされたと、この神話

⁷⁴ 荻原浅男校注・訳『古事記』（完訳日本の古典1）小学館、1983；p. 82.

⁷⁵ 樋口清之『日本人と笑い』講談社、1982；p. 21

⁷⁶ 樋口 前掲書、1982；p. 21.

は語っているのである⁷⁷。

つまり、『古事記』に出てくるアマテラス大神話の意味することは、農耕社会である日本人にとって幸福をもたらす源だとされていた太陽の神を呼び戻すのに笑いが有効に働いたということである。こうした神話の背景として、樋口は「笑いには呪力があって、その呪力が太陽神も動かすと、古代の日本人は考えていた⁷⁸」ことを述べている。続いて、樋口による日本人の笑いの呪力信仰説について見ていく。

笑いの呪力信仰説

樋口によれば、日本人の笑いはジャパニーズ・スマイルとかシークレット・スマイル（神秘の笑い）と呼ばれ、西洋人にとって理解し難いものとして捉えられてきた。何故なら、日本人の笑いは愉快や滑稽だけでなく不快、侮辱、羞恥、自嘲、失敗、慚愧、後悔、怒り、得意、満足など複雑な感情の包括的表情だからである⁷⁹。こうした日本人の笑いに関する樋口の説明は、以下の通りである。

日本人の笑いの本質は、親近感の表現ではなく親近感の演出である。演出と言っても、長年の社会構造の中で養われ、習慣化されたものであり、無意識的にそういう行為であるという点では、「知恵」であるとも言える。

何故、笑いによって親近感の演出をするという知恵が伝統的に形作られてきたのか。その最大の原因は、日本人が島国に定住して農耕を営んできた農耕民族であることに起因する。

今日では機械化が進み、農耕の個人経営が可能となったが、以前の農耕は集団作業で成り立つものであった。広大な耕地を共同管理し、水系を共同使用するのだから、どうしても集団での共同作業が必要である。共同体の中の各個人にとっては、その共同体からはみ出すことや疎外されることは死を意味する恐怖でもあった。

生活の糧を得るといふ重大事の前に、各人はある程度自己を抑制し、多少の不愉快なことは我慢して集団で共同する術として笑いを介在させることが最適であることを身に付けたのである。共同体の中で互いに笑い合うことは、同じものに対して同じ感情を抱きあうという擬態であり、一種の共同意識の確認でもあるからだ⁸⁰。

⁷⁷ 樋口 前掲書、1982；p. 25.

樋口は、天宇受売命が乳房を露出させ陰部に裳の紐を垂らして踊ったことで神々が笑った理由について、性にもまた呪力があると捉えられていたからだと説明している。出産は子孫繁栄をもたらすもので、性は、出産と豊作などと同一視され、招福の呪力があると信仰的にとらえられていたと言う。

（樋口 前掲書、1982；p. 21.）

⁷⁸ 樋口 前掲書、1982；pp. 6-8.

⁷⁹ 樋口 前掲書、1987；p. 11.

反対に、西洋人にとって笑いは、愉快なとき、滑稽なとき、相手を嘲るとき、相手と協調するときに発するものであるため、怒りなどで笑う日本人の笑いは理解しがたいのだと樋口はいう。

⁸⁰ 樋口 前掲書、1987；pp. 10-16.

樋口の説明をまとめれば、「農耕共同体社会を成り立たせる上で、日本人は個を抑制し柔和な人間関係を築くために笑いを身に付けてきた」ということになる。

では何故笑いなのか。樋口は「日本人の笑いに対する観念の中には、招福・魔除の信仰があった⁸¹」からだと言う。

樋口によれば、ある事象の原因と結果が逆転して原始信仰が生み出されることがある。たとえば、夜明けに鶏が鳴くのは鳥類全体にみられる習性であるが、この原因と結果が逆転し、鶏が鳴くから夜が明けるのだと考えられ、鶏が神聖視されるようになる。

この逆転の思想が笑いにも当てはまる。つまり、快感や幸福が笑いを発生させるのではなく、笑いが快感・幸福が招来すると考え、笑いを神聖視するようになったのである。そして、個人の快感・幸福をもたらす笑いが広義に解釈され、集団生活における繁栄にまで結びついたとき、笑いが広く福を招き厄災を除くものとして捉えられるようになり、笑いと呪力の関係が生じたと樋口は説明する⁸²。

笑いを呪力とする信仰を裏付ける証拠として、樋口は前述のアマテラス大神話の他にいくつもの証拠を挙げている。その中の一つを取り上げると、胸を打ち笑う埴輪が挙げ

<写真1 胸を打ち笑う男性>



<猪熊兼勝『日本の原始美術 6 埴輪』講談社、1979 ; p.18.>

られる（写真1参照）。

古墳に添えられた土製品である埴輪は、古墳時代の習性を知る上で貴重な資料となっているが、埴輪の中には、葬送を表現し、死者の供養のために置かれたと思われるものがある⁸³。樋口は、死者を葬る古墳に笑う埴輪が置かれた理由として、古代人の死に対

⁸¹ 樋口 前掲書、1987 ; p. 17.

⁸² 樋口 前掲書、1987 ; pp. 18-19.

⁸³ 樋口 前掲書、1987 ; p. 23.

樋口によると、埴輪は円筒埴輪と形象埴輪に大別され、形象埴輪には家や船や生活上の器物、動物、人物などがある。人物埴輪は、貴人、武人、楽人、伎人、農民、鷹匠、巫女などを表現したもので、その

する考え方を挙げている。

樋口によれば、古代人は人が死んでも魂は死者の近くを浮遊しており、死の直後であれば靈魂をもとの身体に戻し死者を蘇生できると考えていた。そのため「笑う埴輪は靈魂の力を強め、それによって死者を蘇生させようとして、笑っているのである⁸⁴」と述べ、ここに笑いによる呪力信仰をみることができると結論付けている。

神々を笑わせる日本人

樋口による日本人の笑いの呪力信仰説とは別の角度から、柳田は「日本人はどちらかと謂うと、よく笑う民族である（中略）少し笑い過ぎるかと思うほど我々はよく笑う⁸⁵」と指摘する。

山口県防府市の笑い講や愛知県熱田神宮の笑酔人神事など、日本人は古くから笑いを中心とした行事を多く伝承してきた。本項では、かつて行われていた笑いの行事「ヤマノオコゼの行事」に関する柳田の研究を取り上げる（表5参照）。

中にははっきりと笑っているものがいくつか出土している。

⁸⁴ 樋口 前掲書、1987；p. 24.

<表 5 日本の笑いの儀式>

名称	場所	実施日	内容
笑い講	山口県 防府市	12月 第一月曜日	地区の戸主が集まって、意識的に「ハッハッハ」と大笑いの動作を行う。一年の方策を感謝し、来年の豊作を願い、今年の苦労を忘れるための儀式。
笑い祭り	和歌山県 川辺町 丹生神社	10月10日	かつて丹生津媛命が神の集合時間に遅れ、おまけに木の枝を取られ、裸になってしまったのを悲しんで、神殿にこもってしまったので、これを慰めるために始められたとのことである。まず天狗と鬼が向き合って高笑いしたあと、御輿を繰り出し、「余白らじゃ、イエラクジャ、ワラエ、ワラエ」という鈴振りと音頭とりで数回高笑いを繰り返す。
泣き祭り・笑い祭り	兵庫県 養父町 日枝神社	旧暦 9月9日	松明、別当寺住職、神主、氏子、小支司、甘酒つぼ、供物の順で泣きながら神社に行き、供物をして読経し、甘酒を飲んだあと、参加者同士や通行人を加えて笑いあう。
酔笑人神事	愛知県 名古屋市 熱田神宮	5月4日	俗に「熱田オホホ祭り」とも言う。辛櫃から出した神面をもち、下座の二人が扇で面を叩いて笑う。ほかの人も左右に向き合って同じことをし、最後に一人を中心にして三度笑う。神宮の由来記によると、かつてご神体である草薙の神剣が盗難にあい18年後に還座された。これに人々は狂喜して大笑いしたが、その故事を今に伝える行事であるとのことである。
ヤマノオコゼの行事	三重県 尾鷲市	かつて行われていた	神酒をいただいたあと懷中にオコゼ（魚）を入れた祭りの当番が真ん中に座り、氏子が「オコゼをみせて下され」、当番が「いやいや見せ申すまい、皆の衆がお笑いなさるであろうゆゑに」、氏子が「笑いますまい、一目でよいかから見せてください」。そこで少しオコゼの頭を見せると一同がハハハと笑う。このやりとりを三回行い、そのうちに儀式としてでなく皆で自然に笑ってしまう。
ドンド祭り オンベ祭り 等	日本各地	—	47 —

<志水彰『笑い／その異常と正常』頸草書房、2000；pp. 219-220. より筆者作成>

柳田は「山の神とヲコゼ」（『柳田國男全集 8』筑摩書房、1998 所収）の中で、ヲコゼを以って神を祀るという儀式が『奇談雑史⁸⁶』においてみられることを報告している。原文で明確でなかった地名は、後に民俗学者堀田吉雄の探索によって三重県尾鷲市矢ノ浜であろうと推定されたが、現在では執り行われていない行事である⁸⁷。柳田の報告に沿ってヲコゼの行事の内容をまとめると、以下の通りになる。

紀州熊野路の八木山峠の下にある八木山という部落の産土神は山神で、社は里から離れた山中にある。旧暦 11 月 8 日に山神祭りが執り行われていた。

社頭の広庭に蓆を布いて、ここに氏子一同が座り神酒を戴く。氏子の中の一人が当番で、その者は真ん中に座る。女や子供は蓆の外に立って祭りの式を見物する。当番は懐中に干したヲコゼが一尾入れている。神酒が一巡した後、氏子一同と当番との間で対話がなされる。

氏子一同：「貴殿御懐中のヲコゼを見せてください」

当番：「いやいや見せ申すまい、皆の衆は御笑ひなさるであろう故に」

氏子一同：「笑ひますまし、一目でよいから見せて下され」

当番：「それならば」

と当番が懐へ手を入れ、右の手で持てば左の袖口から左の手で持ては右の袖口へ干したヲコゼの頭をちょっとだす。一同はハハハと笑う。当番はわざと不機嫌な顔をしてヲコゼを引っ込める。一同は又酒を飲んで暫くあつて再び懇願する。

当番：「いやいや決して見せることでは無い、あのやうに御笑ひなさる故に」

氏子一同：「今度こそは笑ひますまい、平に見せて下され」

当番：「それならば」

と当番が又同じように出すと、一同は前よりも高く笑う。

同じ順序でこれが三度続く。三度目の酒が巡ると最後には当番も見物も我慢できなくなって自然に皆で笑い、祭りの式が終わる⁸⁸。

以上が祭りの式の内容である。また、その地域では大笑いすることを「山の神にヲコゼを見せたようだ」と言ったそうである⁸⁹。さらに、山の神にヲコゼを見せる風習は他

⁸⁶ 柳田國男『不幸なる芸術・笑いの本願』岩波書店、1979；pp. 11-12.

⁸⁶ 平田篤胤翁晩年の門人で宮負定雄という人が、一生の間に聞き溜めた諸国の話を集めて著したものが『奇談雑史』である。十巻数百篇の珍しい物語が書き残されている。宮負定雄の親友であった紀州の某氏の家で発見された。

（柳田國男「山の神とオコゼ」『柳田國男全集 8』筑摩書房、1998；p. 567.）

⁸⁷ 井之口章次「日本の笑い行事」言語編集部「言語」第 23 巻第 12 月号、大修館書店、1994；p. 34.

民俗学者の井之口によれば、堀田が 1965 年に行った調査では、祭日は 2 月 7 日で簡略になっており、山仕事をする人たちは 11 月（または 12 月）と 2 月との 7 日に対応して行われるのが一般であるという。

⁸⁸ 柳田 前掲書、1998；pp. 567-578.

⁸⁹ 柳田 前掲書、1998；pp. 567-578.

の地域でも報告されているという⁹⁰。

この祭りにおいて、人々は何故オコゼを見せるのだろうか。『奇談雑史』によれば、それは「ヲコゼは山の神の甚だ好みたまふ物で悪魔除けともなれば、貧乏神のごく忌み嫌う物⁹¹」だからであり、柳田によれば「諸国の山奥の村においては山の神はヲコゼという魚を悦び、これを見れば御笑いなさると信じていた⁹²」からである。つまり、山の神がヲコゼを好みそれを笑うが故にヲコゼを見せるのである。

では何故、山の神の笑いを誘うヲコゼを見せ後、皆で大笑いするのだろうか。柳田は『笑いの本願』の中で「ヤマノヲコゼの行事」に代表される笑い祭りの起源に関して以下のように述べている。

少なくとも笑われる職務だけは古くから、ずっと古くからその存在を認められたのである。ただし笑い手は今日のように人間を主とせず、神様に笑われるということが最初の目的であった。昔の日本人は勇猛不屈であったが、神に対してのみは一目を置き、しかも神によっては御気が荒く、斟酌もなく罰したもう神あった。十分なる帰状の意を表し、怒りをなだめご機嫌を取るためには、人として一番辛抱しやすいのは「笑って貰う」ことであった⁹³。

すなわち、神々のご機嫌を損ねて罰せられては困るので、人間にとっては神々に笑ってもらわなければならないのである。日本人は神々を笑わせることで神の怒りをなだめ、自らの安全を確保した。とはいえ、「神々に取って何が笑うべきものになるかを知ること、必ずしも容易ではない⁹⁴」と柳田は指摘している。そのため、「人間には格別おかしくもなさそうな事でも、神が笑いたもうと知ればこれをもって笑祭としたのであった⁹⁵」という。前述したようにヲコゼを見て山の神が笑うと知れば、ヲコゼを見せ人も大笑いし、神々の笑いを誘ったのである。

以上、日本における笑いには笑いの呪力信仰があるとする樋口の説と、神に笑われることで神の機嫌を取っていたとする柳田の説を整理した。

この二つの説は、神話や神事といった宗教的要素の中で、日本人が笑う理由が異なっている。樋口説では、神や福を招来する呪力を笑いが有しているためであり、柳田説で

⁹⁰ 柳田 前掲書、1998；p. 569.

柳田の報告によれば、越後の国や出羽の国では、狩人が山に入るときヲコゼを懐中し、獲物の無いときは、山の神に祈祷してヲコゼの頭を少々見せ「獣が獲ましたら全形をお見せ申さう」と祈るといふ。

⁹¹ 柳田 前掲書、1998；p. 568.

⁹² 柳田 前掲書、1979；p. 34.

⁹³ 柳田 前掲書、1979；p. 31.

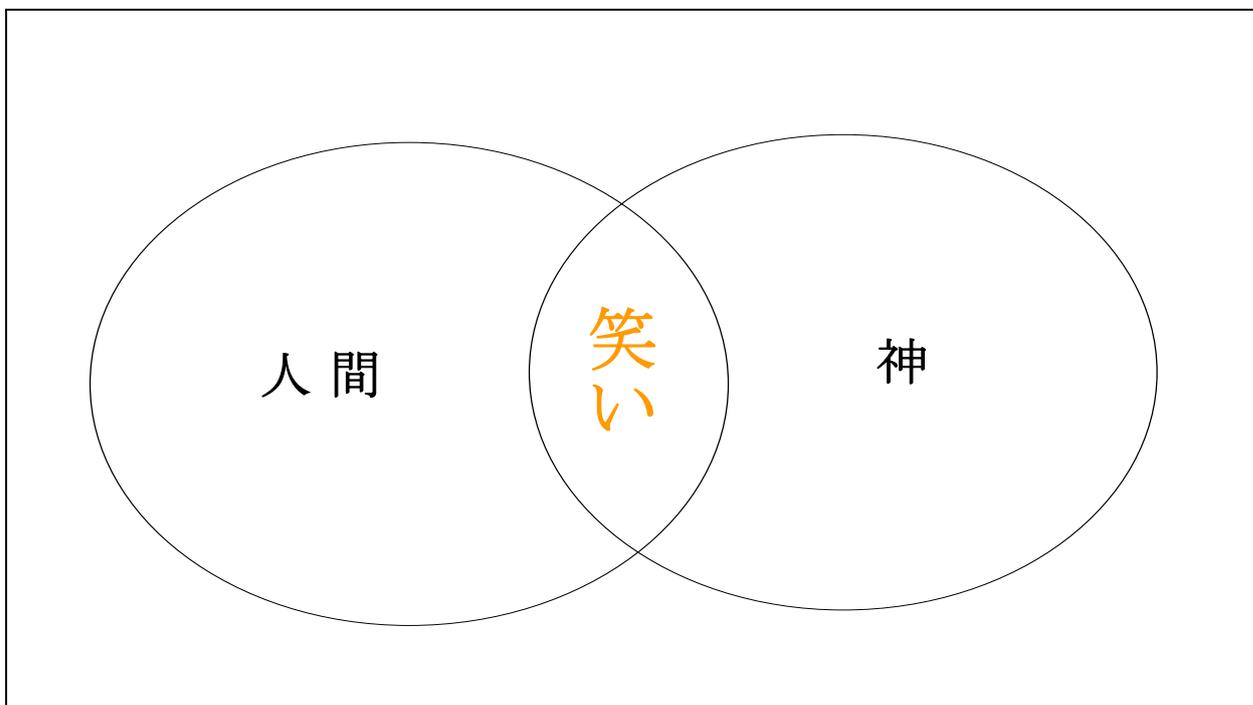
柳田は、「笑いの本願」の中で、日本人はよく笑う民族であるが、人を笑わせる種を滑稽文学や職業化された「笑わしてくれ手」が請け負ってきたという。そして、人を相手に笑わせようとするものの起源が、神を笑わせることであると述べている。

⁹⁴ 柳田 前掲書、1979；p. 34.

⁹⁵ 柳田 前掲書、1979；p. 34-35.

は、神に笑ってもらい神のご機嫌をとるためである。二つの説はこうした相違点がみられるが、人と神と笑いの関係として捉えたとき、ある共通点が浮かび上がってくる。それは次の図のように示すことができる（図6参照）。

<図6 日本人における笑い観>



<筆者作成>

つまり、樋口と柳田の二つの説は、人間の神に対する関係が「神を招く」のか「神のご機嫌をとる」のかという違いはあるものの、日本においては、笑いが人と神を仲介する役割を果たしてきた点で一致しているとまとめることができる。

第3節 スリランカの悪魔祓いにおける笑い

文化人類学者の上田紀行は、『スリランカの悪魔祓い』（徳間書店、1990）の中で、スリランカの悪魔祓の儀礼の最後には、悪魔と共に笑うアクティビティがあることを報告している。本節では上田の報告を整理する。

悪魔祓いの儀式

上田は1986年より2年半スリランカのK村に滞在し悪魔祓いの調査を行った。K村は

スリランカ南部の中心地マータラ市から 30km、海岸から 5km ほど離れた場所に位置する田舎の村である。悪魔祓いの中心地はこのような南部沿岸地帯の田舎にある⁹⁶。

上田によれば、悪魔祓いは小規模なものから大規模なものまでいくつかの種類がある。患者の様態や、患者に憑いている悪魔によって、悪魔祓いの種類が異なるからだ。小規模なものは、患者の家の中だけで行われる静かなものだが、大規模なものは、歌や踊りが交えられ、さながら結婚式のような装いで多くの村人とともに夜を徹して行われる。

大規模な悪魔祓いの中で頻繁に行われる儀礼は、墓場の大悪魔マハソーナを祓うマハソンサマヤマと、女性の妊娠に関わる悪魔リッディを祓うラタヤクマの二つで、他に病魔サンニを祓うサンニヤクマや、呪い悪魔を祓うスニヤマなどが挙げられる。どの儀礼でも複数の悪魔が祓われ、中心的に祓う悪魔で悪魔祓いの種類が決まる。

儀礼には厳密な式次第が存在し、どの種類の悪魔祓も同一の進行で執り行われている。それは三部構成で成っている。第一部で中心となる悪魔と複数の悪魔への供え物が歌や踊りとともに執り行われ、第二部で中心となって祓われる悪魔に関する供え物の段があり、第三部で滑稽な仮面をかぶった悪魔たちによるコメディが繰り広げられる。第二部が儀礼の種類によって差し替えられたり削除されたりするが、基本的な構成は変わらない⁹⁷。

上田はピデンナという悪魔祓いを取り上げ、その詳細を報告している。この悪魔祓いは、リリー・ヤカー（血悪魔）に憑かれた女性の患者に対して行われたもので、彼女は十日もの間物も食わず会話もできない状態であったという。

[第一部] 中心となる悪魔と複数の悪魔への供え物が歌や踊りとともに執り行われる。

19 時半頃悪魔祓いが始まる。ブッダの象徴であるオイルランプを持った患者が家の中から庭へと現れる。患者は幕の張られた患者の席の筵に座り、その前にはバナナの幹で作られた籠が置かれる。籠の中には悪魔への供え物である食べ物や花が入っている。

まず、カル・ヤカー（黒悪魔）への供え物の儀式が執り行われる。笛の音と呪文、焚かれた香の強い香り、単調なリズムを刻むドラムの音によって悪魔が引き寄せられる。すると、大きく見開かれた目は虚空の一点を凝視し、手を大きく振り回し、足をばたつかせ、大人の男でも抑えられないほどの力で患者がのたうつようになる。

呪術師の呪文が終わると、単調だった太鼓の音が激しく叩き込むようなリズムに変わ

⁹⁶ 上田によれば、スリランカには都市のエリートたちの近代仏教と、村人たちの民族仏教という二つの種類の仏教が存在する。前者は、スリランカ近代仏教の祖といわれるアナガーリカ・ダルマパーラ（1864-1933）の仏教改革運動によって先導され、1948 年イギリスからの独立後、仏教ナショナリズムの道を歩んできたものである。仏教改革運動は、スリランカ農村の後進性の否定と近代化の推進によって、キリスト教と植民地支配を打倒しようとする植民地統治下のナショナリズムの精神的支柱として都市エリートの間で急速に広まった運動であった。他方、村人たちの民族仏教は、ダルマパーラによって「迷信的宗教」という言葉で非難され、都市の近代仏教から一方的に否定されてきた。悪魔祓いは「田舎」の民族仏教に残る風習であり、スリランカ国内でも都市部では、消滅したと考えられているか否定的に見られている。

（上田紀行『スリランカの悪魔祓い』徳間書店、1990；pp. 38-44.）

⁹⁷ 悪魔祓いの式の進行の詳細については、上田 前掲書、1990；pp. 78-83. を参照のこと。

り、二人の呪術師が踊り始める。しばらくすると、呪術師が香の粉を火に投げ患者の前にある幕の前に火柱を立て、患者と儀礼を隔てていた幕が取り去られる。呪術師たちは黒悪魔の生い立ちを物語る歌を歌い、歌い終わると踊り、それを節ごとに繰り返す。のたうちまわっていた患者は、再び蓮に座り、上半身だけで激しく踊っている。

ドラムのリズムが落ち着いたあるリズムへと変わり、呪術師はイーガハ（イシュワラ神の矢）と呼ばれる棒を持ってブッダの歌を歌い始める。ブッダの徳力に従って悪魔よ頭から出て行け、と歌いながらイーガハの先で患者の頭から爪先まで触れていくと、患者の動きは止まるが依然と目は虚空を見つめている。

ドラムの音が止まり、呪術師の助手によって悪魔への供え物が患者の前に差し出される。患者の夫が患者の手を取り、赤い花びらを供え物の中に入れてさせる。患者は顔を掌で拭い、供え物の籠に触る行為を三度繰り返し、その度に周りを取り囲んでいた村人たちは「アイボー」（長生きしてね元気でね）と唱和する。患者の中の悪魔を供え物に移す作業である。呪術師が「十の病ももうおしまい、八十の病ももうおしまい、一千万の病ももうおしまい！」と叫び、黒悪魔への供え物の段が終わる。

次に、21 時頃からリリー・ヤカーへの供え物の儀式が執り行われる。新たな供え物と脚を糸で結ばれた生きた鶏が患者の前に置かれ、カル・ヤカーの場合と同じ進行で儀式は進んでいく。

ドラムが激しく叩き込むようなリズムに変わると、患者の体が人間の動きとは思えないほど前後左右に波打ち始める。そして突然立ち上がり、場内を駆け回りながら踊り始めた。患者に憑いている悪魔が踊り出したのである。患者の目をかっと開き、全身を引きつらせ、飛び跳ね、痙攣して踊る姿は踊りを超越してエネルギーの爆発とさえ言える。

ドラムの轟音が突如止まり、合わせて患者の動きも止まると、呪術師がイーガハを彼女の頭にかざし大声で叫ぶ。

「おまえはブッダの権威を認めるか？」「オウーッ！（はい）」

「おまえはダンマ（仏法）の権威を認めるか？」「オウーッ！（はい）」

「おまえはサンガ（僧集団）の権威を認めるか？」「オウーッ！（はい）」

そして、呪術師は悪魔に患者の身体に入り込んだ時期や理由を聞き、供え物のダラハワとともに去ることとその時間を約束させ、去った後にはカサーヤ（アーユルヴェーダ医学の薬）やヤントラ（星の悪影響から守る護符）を渡す約束をし、まだ踊りたいかを尋ねる。悪魔は踊りたいと答え再び患者は踊り狂う。数分後取り押さえられ、

「おまえは三宝（仏教の三宝—ブッダ、ダンマ、サンガ）の権威を認めるか」「オウーッ！」

「三時半に行くな？」「行く！」

「それならば三時半まではじっとしている」

と問答がなされた後、患者は席に戻りぐったりと休み、供え物の段の残りの部分が続

けて行われ、22時半にはリリー・ヤカーへの供え物の段が終了した。

続いて、マハソーナ（墓場の大悪魔）の供え物の段が同じように行われたが、患者は時折からだを振るわせる仕草をするものの、平静に過ごしていた。

0時頃マハソーナの供え物の段が済むと、儀礼は小一時間の大休憩に入る。休憩の時間はもてなしの時間であり、悪魔祓いの場は村の社交場へと変わる。約70人ほどの村人に菓子やタバコが振舞われ、何事も無かったかのように村人達の談笑が始まる。

ところが、患者だけは独りで座っている。患者の家族は村人たちのもてなしに廻っており、村人たちはまだ悪魔の祓われていない患者に近づきたくはないからだ。社交場となって皆が楽しく過ごす中で、儀礼の主役であるはずの患者の周辺だけが真空地帯となっていた。

大休憩が終わると儀礼が再開され、患者は静かなままスニヤム・ヤカー（呪い悪魔）への供え物が同じ形式で行われた。

2時前になると、呪術師が庭の上で“庭の踊り”を踊り始め、ドラムが激しくなるにつれて患者も先ほどと同じように場内を駆け回り踊り出す。そしてまた捕らえられ、呪術師と悪魔の間答が成される。

「おまえはブッダ、ダンマ、サンガの権威を認めるか」「オウッ！」

「悪魔大王ヴェニサムニの権威を認めるか」「オウッ！」

「まだ踊りたいか？」「もういい」

「何時に行くんだ？」「3時20分だ」

「ほかにまだ何か言い足りないことはあるか？」「ない」

「よし、それなら3時20分にお前を呼ぶぞ」

そして、患者は再び座り、患者の前にダラハワと呼ばれる巨大な供え物が置かれた。長方形のベッドの上にピラミッドを載せたような形状のものだ。呪術師が踊りで使った庭を敷き、ダラハワの中に横になる。人間の死体を好むアバマンガレ・リーリ・ヤカー（葬式の血悪魔）への供え物として呪術師が死体の役を務め、悪魔を呼び寄せるのである。

突然、場内の村の男たちがその呪術師に向かって「アーポー、アーポー、何で死んじゃったんだよう」「戻ってきてくれよう、お父ちゃん。俺だけ置いていかないでくれよう」「アーポー、アーポー、悲しいよう」と叫びだし、葬式のパロディが始まる。葬式は悲痛なものではなく、村人からは笑い声が洩れていた。葬式が終わっても呪術師はダラハワの中で呪文を唱え続け、その後悪魔の歌を唄った。

2時45分、呪術師が歌を止めると、患者は前と同じように患者は供え物の中に花びらを供え、今度は結婚指輪も供えた。呪術師は、悪魔との儀礼開催の約束として儀礼の一週間前に患者の首に巻かれた糸を切った。ダラハワの中の呪術師がイーガハで患者の額に触ると、患者は恍惚の表情を浮かべた後、急に目がつり上がり「ああっ」と呻き声を

上げた。

呪術師はイーガハを持ち、先導して儀礼の場を離れ丘を下り始めた。村の若者 7、8人がダラハワを持ち上げ、供え物の籠一つを頭に載せた患者とほかの村人たちが後ろに続いた。

丘の下の平坦な空き地に着くと、ダラハワは地面に置かれ、その上に患者の身代わりを意味する藁人形が乗せられ、火が点けられた。藁人形が燃え上がった瞬間、ドラマーが激しいリズムを轟かせた。すると、患者が供え物の周りを走り回り、狂ったように踊りだした。突然患者から供え物が取られると、呪術師と患者は丘の下の小川に向かって駆け出した。小川の真ん中で、呪術師はブツダの絵を患者の前に掲げた。

「このお方が見えるな」

「この方に約束できるな。それならあとについて言うがよい。“リリー・ヤカーは”」

「リリー・ヤカーは」

「“これから去ります”」「これから去ります」

「“もう戻ってきません”」「もう戻ってきません」

「“もうこの病は起こしません”」「もうこの病は起こしません」

「三回繰り返すんだ」

患者は息を切らせながら約束の三回繰り返した。呪術師はブツダの絵をしまい、大きな水瓶を持つと水瓶に呪文を唱えた。その途端、患者が「フーッ！」と叫び両手を高く差し上げた。間髪入れず呪術師が水瓶の水を患者の頭の上に注ぐと、水は患者の体の上を流れ落ち小川の流れとなった。そして、流れ落ちる水とともに悪魔は去った。

[第二部] 削除。

この悪魔祓いは、第二部が削除されていた。

[第三部] 滑稽な仮面をかぶった悪魔たちによるコメディが繰り広げられる。

休憩のあと着替えて出てきた患者は全く別人のように変わっていた。目つきも正常に戻り、足取りもしっかりし、リラックスしていた。彼女が患者の席に座ると、その子供が両脇に座った。

緊迫感に満ちた儀礼の雰囲気も全く変わり、夜明けまでの二時間の儀礼は仮面をつけた悪魔たちのお笑い演芸会となる。わけの分からない歌を調子はずれに歌う悪魔や、なよなよと歩き威厳の全く感じられない悪魔などが駄洒落や卑猥な言葉を飛ばしながら登場する。

たとえば、手に清水の入った鉢を持った老人のような悪魔は杖をついて登場するものの、自分の足が絡まって止まらない。

「止めてくれ、止めてくれ！」やっと止まると、

「ああ、疲れた。おかげでほっぺたがこんなに腫れたちゃったよ」と尻を撫でる。

「爺ちゃん、そこはほっぺたじゃないぞ。そこはケツだぞ！」

「ああ、そうか」

「ところで何を持ってきたんだい？」

「ああこれか、これはパンだよ」

「それを言うならペン（清水）だろ！ブッダの時代の、アノータッタ湖という聖なる湖の水だ」

「アノータッタ、アノータッタ……タッタメン（尻）」

「聖なる水になんてこと言うんだ。さあ聖なる水をみんなに与えなさい」

「よしきた！さあみんな並んで並んで、喧嘩しないで。はい今日はここまで、ミルク、小麦粉……」

「なに勘違いしてるんだ。配給じゃないんだぞ」

このような調子で入れ替わり立ち代り悪魔たちが登場し、駄洒落や下ネタを言っては村人たちを笑わせる。患者が思わず笑ってしまうと「ほら患者が笑ったぞ」と村人たちが言い合う。場内は笑いの渦で陽気なエネルギーが充満している。大休憩の時ひとりだった患者は、両脇に子供たちに囲まれ、家族と村人たちと一緒に腹の底から笑い合っており、もうひとりではない。患者の周りにあった真空地帯はなくなった。

夜明けが近づくと、最後の悪魔ワディ・サンニが現れる。18人いる病魔サンニの中で最も強力なこの悪魔は、黒塗りにした顔から長い牙を剥き出しにして恐ろしい形相である。ワディ・サンニは、再び患者の前に張られた幕を突然荒々しく取り除くと患者のしかかり充分脅威を与えると遠ざかった。

しかし、この恐ろしい悪魔も瞬時にコメディアンに変貌する。周りを見渡し問答を始める。

「たくさんの方がいるなあ。病院の順番待ちか？」

「いや、彼らは病人じゃない。病人はあそこにいるよ」

「えっ？どこに？おーい病人、どこにいるんだ、病人やーい！」

「あそこだよ」ドラマーが病人を指さす。

「これが病人かい？」

「そうだ、それが病人だ」

「お前は病気を持っているのか？」悪魔が患者に尋ねる。

「いいえ……はい、病気を持っています」

「ああそう。じゃあ手放すのももったいないから、ずっと病気を持っていたら？」

「で、あなたは病人なの？」もう一度悪魔が尋ねる。

「いえ、もう病人じゃありません」

この問答には患者も村人達も大笑いする。そして、悪魔との直接の問答によって患者は皆の前で病気が治ったことを宣言するのである。この恐ろしかった悪魔がひょうきんな馬鹿者になる場面は、悪魔祓い全体のまとめでもある。この儀礼が始まる前、恐ろ

しかつた悪魔から患者は逃れられなかったが、儀礼が終わった後に悪魔は愉快的なコメディアンとなり、患者は村人たちと一緒に悪魔と笑っているからだ。

夜が明けると呪術師が患者に「これからはブッダのおわしますヒマラヤの雄大な景色を思い浮かべながら生活しなさい。さあ、立って」と言葉を授けると、患者は立ち上がり、ブッダのオイルランプを持って家の中に入った。こうして夜を徹して執り行われた悪魔祓いは終わった⁹⁸。

つながりの回復

どのような人に悪魔は憑くのだろうか。上田は「孤独な人」に憑くと呪術師や村人が言うことを報告している。孤独とは、誰もいない家で一人であるなどの物理的な孤独を意味するだけでなく、他者からの疎外感とか寂しいといった心理的な孤独も意味する⁹⁹。悪魔に憑かれ、悪魔祓いを必要とする患者について上田は以下のように述べている。

村の人々は孤独な人に悪魔のディスティが来るといふ。ディスティとは眼差しという意味だ。孤独な人が悪魔に眼差される。悪魔の力とは患者を眼差す力なのである。ディスティという言葉は悪い意味にだけ使われる言葉だけれども、それが眼差しだということは重要だ。孤独でない人に悪魔の眼差しはこない。つまり、人が眼差し眼差されあうような温かい関係の中にあるとき、悪魔の眼差しはこない。しかしその温かい人の輪の外に投げ出されてしまうと、人は悪魔に眼差されてしまうのである¹⁰⁰。

すなわち、他者との温かい関係から投げ出され、他者からの眼差しや、他者への眼差しを失ってしまった孤独な人に悪魔は憑くのである。たとえば、上田は幾人かの患者の事例を挙げている。

ある患者は75歳のおばあさんで、5年前に夫が亡くなってから目も耳も弱り、外界との交渉が減ってしまった。そして悪魔祓いの断片的な箇所が出てくる夢をみるようになり、悪魔祓いをすることになった。

またある患者は51歳の漁師の妻で、自分が金持ちであり優秀であるために村人から妬まれ、呪いをかけ続けられていると信じている。実際には別段裕福でもなく何をやっても文句を言う性格から嫌われやすい彼女は、村の寄り合いにも出ず、悪魔祓いに村人を招待することもなく、村の中で孤立している。彼女は例外的にこれまで15回の悪魔祓いを執り行っている¹⁰¹。

⁹⁸ 上田 前掲書、1990；pp. 13-38.

⁹⁹ 上田 前掲書、1990；p. 89.

¹⁰⁰ 上田 前掲書、1990；p. 89.

¹⁰¹ 上田 前掲書、1990；pp. 86-87.

こうして悪魔に憑かれた患者の症状の多くは、心と体の症状が混ざり合ったものであると言う。頭痛や腹痛、発熱や皮膚病などの身体的な症状と不安や恐れ、失神や鬱状態といった精神的な症状が絡まりあって病んだ状態を抱えているのである¹⁰²。では、悪魔祓いの患者は心身症や神経症を病んでいるのかと言えば、そうではないと上田は反論する。

同じ症状を呈していても、悪魔祓いの患者が心身症や神経症を病んでいるというだけでは全く大事なところを取り逃してしまう。一方では病んでいるのは患者個人、あるいは患者の体の一部だと考える。しかしもう一方では病んでいるのは患者とその周りを取り巻く環境との関係なのである¹⁰³。

前述したように、悪魔が憑くのは温かい関係性から放り出された孤独な人である。そして悪魔祓いで祓おうとする病の原因は、患者個人や患者の体の一部ではなく、患者とその周りの環境との関係なのである。上田は文化人類学の機能主義のアプローチから、悪魔祓いが患者にもたらすことを以下のように説明する¹⁰⁴。

どんな社会に存在する儀式や儀礼もみんなある社会的機能を持っている。スリランカの悪魔祓いだってそうだ。どんな人が悪魔の犠牲者となるのか。それはタニカマ、孤独な人である。共同体の社会関係のなかで孤立している人が悪魔に襲われ、病むのである。だから儀礼ではその病んだ人を再び共同体の中に統合しなければならない。社会関係の網の目の中に取り戻さなければならないのである。そして悪魔祓いで行われるのは、まさにそうした患者の共同体の再統合である。それは、悪魔祓いの最期に患者や家族が村人たちと一緒に笑い合うところに端的に現れている¹⁰⁵。

すなわち、社会の中の温かな関係性から放り出され、孤独であるがゆえに悪魔に憑かれた患者は、悪魔祓いの中で家族や村人とともに笑い合い、共同体にとの繋がりを取り戻すことで回復するのである。このことから、笑いには人と人とを繋げる力があると言える。

¹⁰² 上田 前掲書、1990 ; p. 88.

¹⁰³ 上田 前掲書、1990 ; p. 90.

¹⁰⁴ 上田によると、宗教的な儀礼とされる悪魔祓いを現代の文化人類学で読み解こうとする時、二つのアプローチが考えられる。それは儀礼が何を「為す」のかという機能主義と、儀礼が何を「意味するのか」という構造主義的／象徴論的／記号論的アプローチである。機能主義では、文化のどんな要素でもある機能を持っているという立場をとる。儀礼には、人間関係や社会関係の修復や調停、統合をもたらす機能が含まれる。一方、構造主義において文化の各要素は、すべてシンボルであり何かを意味するという立場を取る。儀礼はシンボルの集まりで、そのシンボルで構成された儀礼が表すものは究極的にはその文化の世界観、宇宙観である。(上田 前掲書、1990 ; pp. 122-125.)

¹⁰⁵ 上田 前掲書、1990 ; pp. 123-124.

悪魔と笑う

悪魔祓いの中で繋がるのは患者と村人だけではない。その儀礼の中で、人は悪魔とも繋がるのである。

上田は、悪魔祓いのプロセスと、癌治療法としてアメリカで生まれたサイモントン療法のプロセスが非常によく似ていることを指摘する。サイモントン療法とは、アメリカの放射線医師で癌の専門家であったカール・サイモントンが考案したイメージによる癌の治療法である。上田はそのプロセスを以下のようにまとめている。

まず患者は日常を一時離れて自分に意識を集中し、体の各部分を頭からつま先までリラックスさせていく。そして心身をリラックスさせた中でイメージを描く。そのイメージとは、自分を悩ませている癌細胞が、じつは弱く混乱したものであり、強力な白血球、自己免疫能力の前では敗れ去る運命にあるというものである。その戦いを鮮やかにイメージし、死んだ癌細胞が体外へに排出される様をありありとイメージする。そして、自分が健康となり、家族や隣人たちと暖かい関係の中で、自分の人生の目標が達成されていくことを思い描く。最期に目を開けて日常へと意識を戻す¹⁰⁶。

そしてサイモントン療法と対比する形で、悪魔祓いのプロセスをこうまとめる。

まず呪文で悪魔が呼ばれ、次に悪魔の生い立ちや姿形が歌われ、ドラムの激しいリズム、踊り、香の匂い、火の点いたトーチなど、五感を通じて悪魔が鮮やかにイメージ化される。しかし次には偉大なブッダのイメージがやってくる。ブッダの偉大さが歌われ、悪魔はブッダの前では全く取るに足らないほど弱い存在であり、ブッダの力によって体から出て行かねばならぬ事が明らかにされ、頭からつま先までの体の各部分から悪魔が去っていくようイメージされる。そして家族や村人たちが「元気になってね」と唱和する中、患者自ら自分の体から悪魔の障りを供え物に排出するよう願って供え物に障り、供え物は家から離れたところへと運ばれていくのである¹⁰⁷。

つまり、サイモントン療法と悪魔祓いは癌細胞と悪魔、白血球及び自己免疫力と偉大なブッダという相関関係がある。そして病の直接的な原因である癌細胞が強力な白血球及び自己免疫力によって体外へと排出されるのと同じように、悪魔も偉大なブッダの力

¹⁰⁶ 上田 前掲書、1990 ; p. 135.

¹⁰⁷ 上田 前掲書、1990 ; p. 137.

によって患者の体から祓われるのである。

しかし、こうした療法のプロセスは酷似しているが、明らかに異なる点があると上田は指摘する。その違いは「サイモントン療法の癌と悪魔祓いの癌の性格¹⁰⁸」であり、「どちらも患者の体から出ていくべき存在だけれども、その二つに対する見方は根本のところでもまったく異なっている¹⁰⁹」と言う。上田はその違いを以下のようにまとめている。

サイモントン療法における癌は明らかに敵である。その敵は徹底的に攻撃し、殺戮し、滅ぼされなければならない。しかし、悪魔祓いの悪魔はそうではない。儀礼の最後で患者は悪魔と笑い合う。そして悪魔は殺されるのではなく、笑いながら去っていくのだ¹¹⁰。

すなわち、サイモントン療法において病の直接的な原因である癌細胞は存在することが許されず徹底的に排除されるべき敵であるが、悪魔祓いの悪魔は、存在すること自体は許されており、殺されることはない。それどころか悪魔は笑いながら去っていくのである。

悪魔と笑う。ここにスリランカ民族仏教の悪魔祓いの真髓がある。そこには、『悪魔は本当に悪なの？』という問いかけが含まれている。実は悪魔もいい奴だったのではないのか。困った奴ではあるかもしれないけど、実は笑い合えるような友達なのではないか¹¹¹』という世界観があると上田は言う。そしてこの世界観の中で問われることは、悪魔の存在ではなく、悪魔との関係である。

悪魔といえどもこの世界で生きている限りはその存在を抹殺することはできない。それならばいい関係を築けばいいじゃないか。敵ではなく、悪魔も味方にしてしまえばいいじゃないかという考え方なのである。つまり、そこには敵を殺すのではなく、敵と見えていたものと和解し敵を味方にしてしまうという解決策があるのだ¹¹²。

すなわち、悪魔祓いにおいて、人は悪魔の存在を抹殺し排除するのではなく、悪魔と和解し悪魔を味方にするような関係を築くのである。こうした悪魔祓いを上田は「悪魔の心変わりを促す悪魔とのパーティ¹¹³」と呼び、悪魔が心変わりする理由を次のように説明する。

¹⁰⁸ 上田 前掲書、1990 ; p. 224.

¹⁰⁹ 上田 前掲書、1990 ; p. 224.

¹¹⁰ 上田 前掲書、1990 ; p. 224.

¹¹¹ 上田 前掲書、1990 ; p. 224.

¹¹² 上田 前掲書、1990 ; p. 225.

¹¹³ 上田 前掲書、1990 ; p. 225.

でも、なぜ悪魔は心変わりするのだろうか。それは、人々が悪魔の存在を認めてあげるからである。「お前は死んでしまえ」と人々は言わない。そのかわりに人々は悪魔の好物を悪魔にプレゼントする。悪魔のありのままの姿を認めてあげるのである。だからこそ、悪魔もハッピーになり、替え歌を歌ったり、駄洒落を連発したりして気持ちよく去っていくのだ。

つまり、悪魔は一方的に否定され排除されるのではなく、自分の存在をそのまま認められ自分の好きなものを与えられ、大切にされるから心変わりすることが可能になるのである。

さらに、心変わりを促されるのは悪魔だけでなく患者の側でもあることを上田は指摘する。本当は一緒に笑い合えるはずの悪魔を敵とし、悪魔に眼差される孤独へと自分を囲い込んでいったのは患者の側にも責任があるからだ。言い換えれば、患者本人が環境や他者や悪魔を敵とみなしたことで自分を孤独へとさらにおいやってしまったのである。病の原因には、実は自分がいることに気がつき、敵だとみなしていたものを味方だとする心変わりが、問題の根本的な解決を促すのである¹¹⁴。そして、スリランカの悪魔祓いを上田はこう結論付ける。

孤独な世界で人はますます自分を孤独にし、心を閉ざしていく。仮面をかぶり、本当の自分を押し隠していく。しかし、そうやって人生の道を見失い、輝きを失ってしまったとき、そこには声を掛け、導いてくれる友達がいる。悪魔祓いの癒しの根底にあるのは戦いではない、それは互いの存在を認め合う「愛」なのである¹¹⁵。

つまり、スリランカの悪魔祓いの根底を流れるものは互いの存在を認め合う「愛」であり、孤独がゆえに悪魔に憑かれた患者は、その愛に触れることを通して心変わりを促され、孤独な世界から回復するのである。

以上、上田の報告によるスリランカの悪魔祓いをまとめた。ここでの笑いを抽出すならば、第一に、孤独を病んでいた患者が村人とともに笑い合い、共同体への再統合を成し遂げたときの笑いであり、第二に、敵視されていた悪魔がその存在をありのまま受容され、大切にされたときに起こす笑いであり、第三に、敵対関係から味方へと関係性を移行した患者と悪魔と村人たちがともに笑い合う笑いであった。悪魔祓いにおける笑いは、患者と村人、人と悪魔を繋ぐ働きがあった。そして、この笑いはスリランカの悪魔祓いの本質を象徴するもので、その本質は互いの存在を認め合い、敵対から味方への心変わりを可能とする「愛」であったとまとめることができる。

¹¹⁴ 上田 前掲書、1990 ; p. 225-226.

¹¹⁵ 上田 前掲書、1990 ; p. 227.

本章では、象徴としての笑いを取り上げ整理した。キリスト教や日本、スリランカの民族伝教での悪魔祓いを紹介し、その経典や神話、儀礼などの宗教的要素における笑いをまとめた。

キリスト教では、嘲笑が強調され、笑いが低いものとして否定的に捉えられてきた歴史がある一方で、日本では、神々が笑い、また神々と人間を仲介するものとして笑いが役割を果たしてきた。スリランカの悪魔祓いでは、笑いは共同体への再統合と孤独からの回復を意味し、悪魔は自分の存在を受容され、敵対関係から味方へと関係性の変容が成されたとき、ともに笑い合うことができるようになった。そして悪魔祓いにおいて、笑いは繋がりを回復させる働きがあった。

西洋、日本、スリランカ、或いは一神教と多神教における象徴としての笑いは、それが表面的には肯定的、否定的に捉えられているという違いがあるにせよ、時代・地域・宗教を超えて笑いが人間の文化の中で非常に深みのある位置づけを占めてきたことがみえてきた。

次章では、笑いの実践的活動をみていく。

第五章 笑いの実践的活動—ケアリングクラウンの場合—

クラウン（道化師）のもたらす笑いやユーモア、クラウンの存在が人々に与える効果

が着目され、病院・福祉施設などの医療現場や紛争・災害などの被災地においてクラウニングが実践されている。こうした活動及びこの活動に従事する人々のことは、ケアリングクラウンと呼ばれている。

本章では、笑いの実践的活動としてケアリングクラウンの活動を整理し、ケアリングクラウンにおける笑いの位置づけを明らかにすることを目的とする。

なお本章では、ケアリングクラウンに関する文献調査に加えて、以下のフィールドワークを行った。「国境無き道化師団アメリカ¹¹⁶ (Clowns Without Borders-USA)」(以下CWB-USAと記す) 代表のモショ・コーエン (Moshe Cohen) へのインタビュー調査、日本ケアリングクラウン研究所¹¹⁷主催の「ケアリングクラウン養成講座 2008 広島」受講、筆者もクラウンに扮しての社会福祉法人「希望の家」(広島県呉市焼山中央 5-11-28) へのケアリングクラウン訪問(2009年3月17日)を行った。

第1節 ケアリングクラウンの活動概要

本節では、日本ケアリングクラウン研究所主催「ケアリングクラウン養成講座 2008」資料を軸に、ケアリングクラウンの活動の歴史と現状の活動分野の概要をまとめていく。

ケアリングクラウンの登場

日本ケアリングクラウン研究所代表を務める高田佳子が「道化はその姿・形・役割を社会の変化と共に変化させています。社会の価値観が大きく変化している 20 世紀から 21 世紀の中で、道化の形も変化しつつあり、新しい形がケアリングクラウンではないか¹¹⁸」と指摘するように、ケアリングクラウンという道化の在り方が登場するまでには、長い道化の歴史がある。高田は「ケアリングクラウン養成講座 2008 資料」の中で、ケアリングクラウン登場までの道化の歴史を以下のように整理している。

西欧における道化の歴史は、11 世紀半ばの宮廷道化師の登場まで遡る。宮廷道化師は、

¹¹⁶ 「Clowns Without Borders-USA」のホームページは <http://www.clownswithoutborders.org/> (2009/7/10 閲覧) である。

「Clowns Without Borders」のアンバセダークラウンの一員としてメキシコの難民キャンプを訪れ影響を受けたモシェ・コーエンが 1995 年に設立した。ホームページには設立の趣旨として「トラウマに苦しむ地域の心理的サポートの手段としてユーモアを運ぶこと」を挙げ「困難な地域に生きる子供たちと人々に笑いとユーモアを運ぶ努力をしている」とある(筆者訳)。

¹¹⁷ 日本ケアリングクラウン研究所は、2007 年 4 月に高田佳子が代表を務める株式会社アートランドの事業部門とし非営利活動を展開する組織として結成され、体系的にケアリングクラウンを学ぶことのできる「ケアリングクラウン養成講座」の開催や情報誌の発行、病院・老人ホームなどへのボランティア活動、海外への研修旅行などを行っている。前身はケアリングクラウンの創始者の一人であるパッチ・アダムス来日時に影響を受けた人々が、ケアリングクラウンについて学び日本の実情に合った形で実践スタイルを見つけ出すことを目指して 2003 年 4 月東京で始まった勉強会である。(高田佳子、下原由香編「Caring Clown Report Vol.1」日本ケアリングクラウン研究所、2007; pp. 2-3.)

日本ケアリングクラウン研究所のホームページは <http://caringclown.jp/> (2009/7/10 閲覧) である。

¹¹⁸ 高田佳子 「第 1 回 ケアリングクラウンの世界」 ケアリングクラウン養成講座 2008 資料; p. 1.

精神もしくは身体に異常のある人々が王侯貴族を楽しませる存在として召し抱えられていたが、15世紀の半ば以降には、健常者を含め笑わせる術に長けたものが道化として志願していくようになる。16世紀の中頃には、イタリアの古典仮面劇コメディア・デラルテ (Commedia dell' Arte) 一座が広めた芝居の中でアルレッキーノやピエロといった道化役が作られ、宮廷にいた道化師は芸術文化の世界に登場し始める。

20世紀に入ると、クラウンはサーカスへと活躍の場を広げるようになる。幕間の道化役やゲート前でお客の呼び込みをするなど、サーカスと観客とを繋ぐ役割を果たすようになる。また、アメリカでは遊園地やショッピングセンターなどの商業施設でクラウンが雇用され、商業施設側のサービス精神やおもてなしの気持ちをクラウンが具現化するようになる。さらに、子供の誕生日やキリスト教の日曜学校にもクラウンが呼ばれ、子供たちを楽しませるようになっていく。

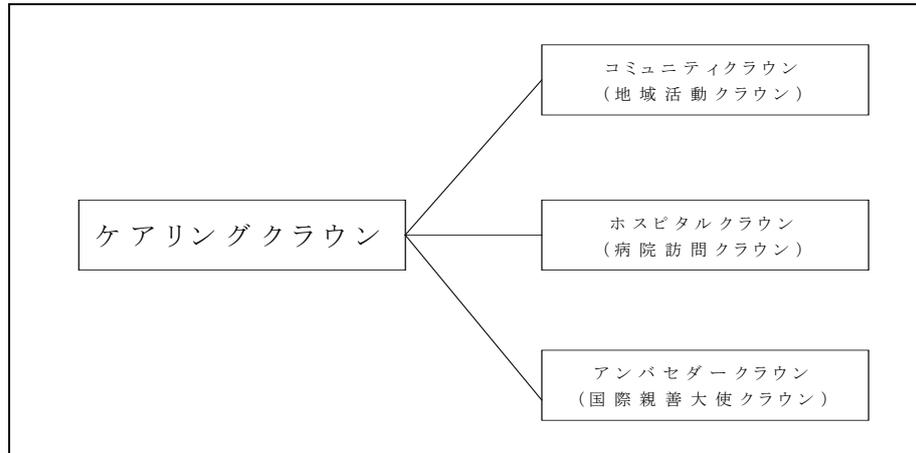
宮廷で王侯貴族に仕え、芝居やサーカスの芸人であったクラウンは、最初一般人から遠い存在であった。時代を経るにつれ、宮廷から外に出て舞台やサーカスで人目につくようになったクラウンは、遊園地や教会などへ登場し、段々と一般人に身近な存在になっていった。そして、1980年代にアメリカで病院や老人ホームを訪問するクラウンが登場し、彼らやその活動がケアリングクラウンと名づけられている¹¹⁹。

ケアリングクラウン活動の三分野

1980年代はじめにアメリカで始まったケアリングクラウンの活動は、この30年間で世界中に広まり、その活動は、大きく「地域活動クラウン (コミュニティクラウン)」「病院訪問 (ホスピタルクラウン)」「国際親善クラウン (アンバセダークラウン)」の3分野に分けることができる (図7参照)。

¹¹⁹ 高田「第1回 ケアリングクラウンの世界」ケアリングクラウン養成講座2008資料、
高田「第2回-1 病院訪問クラウン」ケアリングクラウン養成講座2008資料、
高田「第2回-2 アンバサダークラウン (クラウン親善大使)」ケアリングクラウン養成講座2008資料、
高田「第2回-3 地域活動 (コミュニティ) クラウン」ケアリングクラウン養成講座2008資料。

<図7 ケアリングクラウン活動の三分野>



<筆者作成>

高田は「ケアリングクラウン養成講座 2008 資料」の中で、それぞれの活動内容を次のようにまとめている。

コミュニティクラウン（地域活動クラウン）とは、地域を活動の拠点とするクラウンを指す。20世紀後半、サーカスから出てきたクラウンは、遊園地やショッピングセンターなどの商業施設だけでなく、日曜学校やこどもの誕生日会などコミュニティへと活動の場を広げることになったが、現在では高齢者施設・障害者施設・教育施設・孤児院・ホームシェルターなどの場でクラウンが活動している。善意の人々が、ボランティア活動としてこうした場への訪問や、学校での安全教育の一環として犯罪や危険から自分自身を守る方法を教えるなどの活動を行っている¹²⁰。

アメリカでは「Clowns of America International¹²¹（国際アメリカクラウン協会）」や「World Clown Association¹²²（世界クラウン協会）」などの活動組織があり、その地域支部に属した人々の活動が一般的であるが、フリー・メイソンの運営しているシュライン・クラウンのように大組織の活動の一環として派遣される場合もある。シュライン・クラウンは、1919年に最初の孤児院を建設後アメリカ、カナダ、メキシコ、パナマに病院を建設するなど地域活動にクラウンを活かし病院にクラウンを派遣する活動を続けている組織である¹²³。

¹²⁰ クラウンが安全教育を行う理由は、同じ教育内容でも教師や専門家よりクラウンが面白可笑しく伝達する方が、子供たちにとって理解しやすいからである。

¹²¹ 「Clowns of America International (COAI)」のホームページは <http://www.coai.org/> (2009/7/10 閲覧) である。ホームページの運営目的には、「アマチュア、セミプロ、プロのクラウンたちの情報の共有・教育・集会」とある (筆者訳)。(COAI ホームページより引用)

¹²² 「World Clown Association (WCA)」のホームページは、<http://www.worldclown.com/> (2009/7/10 閲覧) である。

1983年アメリカジョージア州アトランタで結成された。ホームページの運営目的には「会員の要求に沿って世界にクラウンの芸術を広めること」とある (筆者訳)。

¹²³ 高田「第2回-3 地域活動 (コミュニティ) クラウン」ケアリングクラウン養成講座 2008 資料

<写真2 ホスピタルクラウンの様子>



<ビッグ・アップル・サーカス(Big Appele Circus)のホームページより典拠 >

ホスピタルクラウン（病院訪問クラウン）とは、ボランティアで慰問として単発に病院や福祉施設を訪問する地域活動クラウンとは異なり、臨床チームの一員として定期的に病院を訪問するクラウンのことを指す。病院訪問クラウンは、免疫力の低下した患者さんと触れ合いながら病室から病室へと移動するため、クラウン自身が病気の感染源となってしまうかねない。衛生管理の知識を身に付けたクラウンが手洗いや消毒を常に行うほか、持ち歩くパペットや患者さんに対するフェイスペイティングなどに細心の注意を払いながらクラウニングを行っている。

ホスピタルクラウンはクリニックラウン、ホスピタルクラウン、クラウンドクター、セラピュティッククラウン等の種類に分けられ、医師や看護師がクラウンになる場合と特別な訓練を受けた一般人がクラウンになる場合があり、そのほとんどが有償の専門職として確立されている。セラピュティッククラウンが子どものための治療説明用ビデオへの出演やリハビリの補助をするなど対象者がより治療を受けやすくするためのサポートを活動の範囲に含んでいるのに対して、クリニックラウン、ホスピタルクラウン、クラウンドクターは、対象者が入院中であることや、治療の辛さを忘れさせることに重点が置かれている。両者に共通していることは、子どもと遊びの世界を共有し、子どもの力を引き出すことである。

アメリカ・カナダで複数の創始者によって始められたホスピタルクラウンの活動は、「ビッグ・アップル・サーカス・ケア・ユニット¹²⁴ (Big Apple Circus Care Unit)」の考え方・展開方法をモデルとし、主にヨーロッパで発展・成熟した後に全世界に活動が広まった。現在では60～70カ国でクラウンが定期的に病院を訪問するプログラムがあると

¹²⁴ 「ビッグ・アップル・サーカス」のホームページは <http://www.bigapplecircus.org/> (2009/7/10 閲覧) である。「ビッグ・アップル・サーカス・ケア・ユニット (Big Apple Circus Care Unit)」は医師のマイケル・クリステンセンによって「ビッグ・アップル・サーカス (Big Apple Circus)」の中に創立された。

言われており、中でも「クリニックラウンオランダ財団¹²⁵」は、オランダの小児病棟を有する病院の85%の訪問を実現している。日本でも「NPO 法人日本クリニックラウン協会¹²⁶」が2005年よりクラウンの養成・派遣を行っている。活動団体によって活動内容に異なりはあるが、主な共通点は対象者が子供であることや有償であることなどが挙げられる(表6参照)。

＜表6 ホスピタルクラウンの共通点＞

1	対象は、ほとんどの団体が子ども(0-18歳)のみに限定されている。
2	担当の子どもを同じクラウンが定期的に訪問する。週1~2回が標準である。
3	責任を持って担当の子どもに対応する必要性から、有償雇用である。
4	活動は組織的に行われ、個人や有志グループによるボランティア活動ではない。特にヨーロッパでは病院と組織、組織と病院との契約で運営されている。
5	道化師は、エンターテイナーとしてプロ経験と能力が要求される。
6	病院訪問に必要とされる専門的な教育を受ける。また、一般的に年数回のフォローアップトレーニングや、会合への出席も義務付けられる。
7	道化師の精神的疲労を考慮し、2回~4回/1週が勤務日数の上限としている。(1日2時間~6時間程度)
8	患者やその家族と個人的な繋がりを持ってはいけない。
9	病院訪問クラウン以外の仕事を持つことは可能だが、病院訪問クラウンをしていることをその宣伝材料にしない。
10	クラウンの病院派遣費及び団体の運営の費用は、企業や個人の寄付金が財源。

＜高田佳子 「第2回-1 病院訪問クラウン」

「病院訪問クラウンの養成講座」資料

子どもが優先的に対象となる背景には、入院中の子どもの発達に関するサポートとしてクラウンの訪問が有効であるという認識がある。特にヨーロッパでは、人権の観点から、クラウンの病院訪問は義務とさえ考えられている。入院中の子どもは、家庭生活や友人からの断絶及びそれまでの自己や自由の喪失と闘わなければならない。このように外の世界と分断された入院生活という環境が、子どもの自己イメージの変質など、患者

¹²⁵ 「クリニックラウンオランダ財団」のホームページは、<http://www.clinicclowns.nl/> (2009/7/10 閲覧) である。

1992年に設立した。大学病院のがんのこどもの訪問からはじまり、現在では短期入院や骨折のこどもたちのところへの訪問も行っている。

¹²⁶ 「NPO 法人日本クリニックラウン協会」のホームページは、<http://www.clinicclowns.jp/official.html> (2009/7/10 閲覧) である。2005年11月より活動を開始した。ホームページの運営目的には「闘病生活を送るこどもの権利を尊重し、入院しているこどものもとへクリニックラウンの温かい笑顔と心のこもったふれあいを届けること」とある。クリニックラウンオランダ財団の協力の下、クリニックラウンの養成・認定を行い、2008年1月で9名の認定クリニックラウン(うち2名はトレーナー)が定期的な病院訪問を行っている。

の成長・発達にとって負の影響をもつ危険性があるからだ。

また、件数は少ないものの大人を対象とした病院訪問も一部では成されている。子どもの場合とは異なり、病院での生活が成人患者の成長・発達段階に重大な問題を残すことはないが、笑う機会を得ることは気分転換にもなり、大人の患者にとっても価値の大きいことだからである。クラウンの訪問が身体の不快な痛みや闘病生活の苦しみ、不安、恐れ、悲観、孤独などのネガティブな感情から一瞬でも解放されることに一助を果たすとすれば、患者の憂鬱の悪循環を一旦断ち切ることもつながる。特に患者本人にと家族にとって苦しい時期であるターミナル期には、ユーモアや笑いが貴重なものになる¹²⁷。

<写真3 アンバセダークラウンの様子>



<国境なき道化師団アメリカ (Clowns Without Borders – USA)
のホームページより典拠 >

アンバセダークラウン（クラウン親善大使）とは、紛争地域や自然災害に見舞われた地域や貧困地域など、極端に生活が困難な地域に暮らす人々を訪問するクラウンのことを指す。

1985年、冷戦の最中にソ連市民との交流を目的とした市民外交官として選ばれた医師のパッチ・アダムス¹²⁸（Patch Adams、本名 Hunter Adams、1943-）夫妻がクラウンに扮して任務を遂行したことから始まり、以降彼はクラウン経験のない人も含め世界中でクラウンを募り、毎年ロシアへのクラウンツアーを行うほか、コソボ、アフガニスタン、カンボジアといった紛争による被災者たちの難民キャンプや南米各地の貧困地域、水害

¹²⁷ 高田「第2回-1 病院訪問クラウン」ケアリングクラウン養成講座 2008 資料

¹²⁸ 映画「パッチ・アダムス」（1999年、トム・シャドヤック監督、ユニバーサル・スタジオ）ではパッチ・アダムスの半生が描かれている。

や地震、津波の被災地に出向き、一般市民との交流を行ってきた。こうしたパッチ・アダムの活動に参加したクラウンたちが独自に組織を立ち上げ、世界中で幅広い活動を行っている。

その内の一つが 1993 年スペインのバルセロナで設立された「Clowns Without Borders¹²⁹ (国境無き道化師団)」である。クロアチアの難民キャンプでの平和プロジェクトの一貫として行われた教育プログラムにスペインのクラウンが協力し、クラウンの楽しさやユーモアが子ども達の精神に及ぼす影響の大きさが確認されたことが発足の契機となった。

現在「Clowns Without Borders (国境なき道化師団)」はアメリカ、カナダ、ドイツ、フランス、スウェーデンにおいて独立した団体として組織化され、それぞれが独立してもしくは共に活動している。CWB のクラウンツアーでは、500 人～5000 人を対象に言語に頼らないパフォーマンスを行うことができるクラウンが、コロンビアを始めとする中央アメリカの国々、イスラエル／パレスチナ、西サハラなど対立紛争の続く地域への訪問を重ねている。

一方で、パッチ・アダムのクラウンツアーでは、クラウンとしての経験は不問で、慈愛の精神があれば参加することが可能となっている。このように、団体ごとに取り組んでいる活動内容や展開の方法は異なるが、紛争や災害、難民など困難な生活を強いられた地域を訪問し、その土地の人々を対象とした活動を行っている点が共通している¹³⁰。

以上、本節ではケアリングクラウンの登場と現在の活動の三分野を概観した。次節ではより詳細な活動内容を見ていく。

第 2 節 ケアリングクラウンの活動事例

1980 年代に始まったケアリングクラウンの活動は現在世界各地に広まり、地域や病院、紛争後地域といった分野で取り組まれていることが分かった。団体によってその活動内容に違いはあるが、具体的にはどのような活動が行われているのだろうか。

本節では、紛争後地域や被災地などを訪れるアンバセダークラウンの活動事例と筆者自身がフィールドワークを行った社会福祉施設「希望の家」での活動を紹介する。

事例 1 リマ・ペルー刑務所への訪問

アンバセダークラウンの創始者のパッチ・アダムの設立した「ゲズントハイト・イン

¹²⁹ 「Clowns Without Borders (CWB)」のホームページは <http://www.clownsf.com/> (2009/7/10 閲覧) である。このホームページからアメリカ、カナダ、ドイツ、フランス、スペイン、スウェーデンの団体のホームページにいき、それぞれの言語でホームページを閲覧することができる。

¹³⁰ 高田「第 2 回-2 アンバセダークラウン (クラウン親善大使)」ケアリングクラウン養成講座 2008 資料

スティチュート¹³¹ (Gesundheit Institute)」の理事でアメリカ在住の医師、ジョン・グリック (John Glick) は「アンバサダークラウンとしてペルーで春休みを過ごす」(「Caring Clown Report/Vol. 1」日本ケアリングクラウン研究所、2007 所収) の中で、アンバサダークラウンとしてペルーのリマ・ペルー刑務所を訪問した際の活動を報告している。

ゲズントハイトスティチュートはペルーの NGO 団体ドクターズ・ボロラヤ協力の下、2006 年 3 月 4 日～18 日の 2 週間のペルーへのクラウンツアーを主催し現地に赴いた。

グリックによれば、当時ペルーの首都リマは、人口の半分以上が貧困ライン以下の生活をしており、18%は極貧のレベルにあった。極貧地域のほとんどの家庭には水や電気が通っておらず、リマの貧困は深刻であった。

参加者は、彼を含めてアンバサダークラウンとしての経験が豊富な 10 名のクラウンと、クラウンのトレーニングを受けたペルーの医師、心理学者、俳優、弁護士など 15～20 名、初めて参加する大学生 32 名、高校生 1 名で構成されており、各自 1500 ドルの経費を負担し「極度の貧困地帯を訪問し、貧しい人、病んでいる人、障害がある人、投獄された人々を癒すため、ケアリングクラウンというユニークで一風変わった奉仕活動¹³²」に参加した。

ペルーでは病院、刑務所、ホームレスや孤児のためのマザーテレサ施設、脊髄を損傷した青少年や大人を保護する施設、貧民街などでクラウニングを行い、その一貫として 2006 年 3 月 15 日、リマ・ペルー刑務所に収容されている 40 名の囚人(全員 10 代の少女)を訪問した。その前の週に一度訪問していたのでこれが二度目の訪問となる。少女達は、第一回目の訪問でダンスやバルーンで遊んで打ち解けたクラウンたちとの再会を心待ちにしていたと言う。

訪問後に判明したことであるが、彼女達のほとんどが盗みや麻薬売買や売春の罪で囚えられており、禁固 3 年もしくはそれ以下に処されていた。一人は、母親に暴力を繰り返す父親を殺害した罪で囚われていた。彼女達の半分は、幼い頃父親からの性的暴力を受けていた。彼女達のほとんどは自分の家族を守るために犯罪に手を出したのだと言う。

クラウンメイクや衣装を施した参加者は、たくさんのプレゼントと食べ物、ペルー風グリルドチキン 40 人分にフライドポテト、清涼飲料水を抱えて少女たちを訪れ、皆で地面に座り、食べながら話をした。投獄の理由等には触れず、誕生日や兄弟姉妹の話、刑務所から出られる時期などの話は、通訳を通したり英語やスペイン語を使ったりしなくてもジェスチャーなどで充分コミュニケーションをとることができた。

食事が済むと、中庭で少女達が用意したプログラムの披露が始まった。歓迎のスピーチ、自作の詩の朗読、自分達で縫った衣装での民族舞踊、クラウンを交えてのダンス、

¹³¹ 「ゲズントハイト・インスティチュート (Gesundheit Institute)」の URL は <http://www.patchadams.org/> (2009/7/10 閲覧) である。無償で医療提供を行う施設としてパッチ・アダムスが創設した。

¹³² ジョン・グリック「アンバサダークラウンとしてペルーで春休みを過ごす」高田佳子、下原由香編「Caring Clown Report/Vol. 1」日本ケアリングクラウン研究所、2007 ; p. 19.

芝居などを披露してくれ、その度にクラウンの拍手と歓声が沸き起こった。最後には全員が参加してダンスを踊った。少女達のプログラムが終了すると、刑務所長とパッチ・アダムスから挨拶があった。その後別れの瞬間まで皆で踊り続け、ハグやキスが交わされ、クラウン団は刑務所を後にした¹³³。

以上が活動の内容である。では、グリック達クラウンの訪問は彼女たちにどういった意味を持っていたのだろうか。グリックは少女達による歓迎のスピーチの全文を掲載している。

親愛なるボラロヤのメンバーとそのお友達の皆さま、こんにちは。皆様のために愛を込めて準備したアートパフォーマンスを披露する前に、今一度歓迎の意を表しご挨拶したいと思います。皆様の前回、第一回の訪問は私たちにとり、とても特別なものでした。私達は、心が喜びと幸せに満ちるということを実感しました。ほほえみをたたえ笑い声をあげることで、わずかな時間とはいえ、自由の無い今の生活を忘れることができました。

皆様に知っていただきたいと願う、ここにいる私達全員にとって、とても大切なことがひとつあります。それは、皆さんが私たちと共に過ごしてくれたあの午後のひと時に、決して終わりはないということです。私達は皆様のことをこれからずっと、いつまでも、記憶と心の中で大切にします。そして、思い返すときにはいつも幸せを感じることができるでしょう。あの時の驚いた気持ち、笑ったこと、そして最初に皆さんを見たときのチョット恐かった感覚まで全て私達は忘れません。もちろん、愛と一緒に記憶するんです。なぜなら、私達にとって本当に忘れがたい、美しく素晴らしい出来事だったから。そして今日、再び皆様が来てくださったおかげでお会いできました。皆様が分けてくださる大きな喜びをシェアできることを心から幸せに思います。訪ねてきてくださって、本当にありがとうございます¹³⁴。

この挨拶文からは、彼女達がクラウンの訪問を喜んでいることや、クラウンの訪問が特別な意味を持っていたことが分かる。また、たとえ短い時間ではあっても、クラウン達と過ごした時間が彼女達に自分の苦境を忘れさせ、喜びと幸せに満たされることに繋がったと言えるだろう。

事例 2 広島県呉市・社会福祉法人「希望の家」訪問

次に、日本ケアリングクラウン研究所主催で行われた広島県呉市・社会福祉施設「希

¹³³ グリック 前掲書、2007；pp. 18-20.

¹³⁴ グリック 前掲書、2007；p. 20.

望の家」への訪問を取り上げる。「希望の家」は身体障害、知的障害、精神障害を持つ人を対象に生活介護や自立訓練、就労機会を提供する施設である。なお筆者もクラウンとして参加した。

2009年3月17日、CWB-USA代表のモシェ・コーエンを交えた17名で約1時間半の訪問を行った。参加者は日本ケアリングクラウン研究所主催の「ケアリングクラウン養成講座2008広島¹³⁵」でケアリングクラウンに関するトレーニングを受けた受講生で、今回の訪問が初めてのコミュニティクラウンの実体験であった。

当日は施設の人々が施設内のホールに集まり、そこにクラウンたちが入場する形式がとられた。対象者は車椅子の必要な身体障害や、知的障害、自閉症などの精神障害有している施設の利用者と保護者の合わせて約30名の人々とスタッフ約5名を合わせた45名ほどの人であった。

訪問は、前半部では対象者全員の前でのクラウンたちのショーがあり、後半部では参加した全てのクラウンが個別で対象者と関わりをもつという二部構成がとられた。訪問の様子を記すと以下ようになる。

別室でクラウンメイクを施しカラフルな色やダボダボの服を着て、ポケットやポシェットにはシャボン玉、風船、風車、ぬいぐるみ、シールなどのおもちゃを詰め込み、クラウンのシンボルである赤い鼻をつければ準備は完了である。

クラウンたちはぎゅっと身を寄せ合って不揃いに一列で並び、上に高く掲げた人差し指で行き先を提示するモシェを先頭に会場へと入場する。感情を言葉ではなく音で表現するジブリッシュと呼ばれるクラウンの言語でモシェが合図をすると、後ろに並んだクラウンたちは足を止め興味深そうに対象者を眺める。それを繰り返しながら、約数メートルの距離を数分かけて行進し、対象者の前にある広いスペースへと到達する。モシェ以外のクラウンは同じようにして来た道に戻り、それぞれが対象者の間に座る。

モシェのクラウンショーが始まると、会場は笑いで包まれた。上着を脱ごうとして左手を抜いたのに、半分脱げかかった上着を回転させて左手を入れ再度上着を着たり、帽子を被ろうとすると頭の上で帽子がはねて帽子が被れず泣きそうになったり、挙句の果てにずっと付近を歩き回っていた利用者の男の子に帽子をとられて怒り出したりする。このように屈託のないモシェの行動を楽しんで笑いがこぼれたのである。モシェが持参した紙袋からは厚めの素材のビニール袋や固めのチューブ、風車などが顔をのぞかせており、モシェはそれらを一つずつ取り出しては遊んでみせる。ビニール袋は数枚を宙に投げてまるでお手玉のようにくるくると回してみせる。固めのチューブは「これはなん

¹³⁵ 「ケアリングクラウン養成講座」は基礎コース5回と実践コース4回に分かれており、2008年5月から2009年2月までの約10ヶ月かけて行われた。講座では、ケアリングクラウンに関する勉強や実践者の講演のほか、言語を使用せずにユーモアを交えて即興で喜怒哀楽を表現するワークや、感情を音で表現するジブリッシュと呼ばれるクラウンの言語の練習、ペアを組み視聴覚に障害をもつ対象者などを想定したケアリングクラウンのロールプレイなど数多くのワークを行った。

だろう」と初めは訝しげな面持ちで眺めていたが、振り回すとヒュンヒュン音を立てることを発見し、嬉しそうにそれを振り回す。どんどんスピードを上げていき、しまいには疲れてチューブを放り出してしまふ。こうしたパフォーマンスは普段から練習しているものや演技として確立されているものもあるが、そのほとんどは即興によるものである。ケアリングクラウンにとって重要なことは、自分の演技を見せることではなく、相手に集中してその場の雰囲気を感じ取り、観客の楽しめるものを提供することであるからだ。そのため、付近を歩いていた男の子が帽子をとるという予期しない事態が起きても慌てることなく、むしろその男の子をパフォーマンスに組み込む形で引き入れることができるのである。

モシェのクラウンショーが終わると、数名のクラウンが登場し、即興のオーケストラを披露する。楽器役のクラウン達が弧を描いて皆の前に立つと、一人は指揮者の役で真ん中に立って、楽器（クラウン）の音（声）を確認していく。とはいえ、それは楽器のような声ではない。「ゲコッ」「ドン」「タタタタ」「ピンポーン」など楽器役のクラウンが各々の好きな音を出す。指揮者が棒を振ると、当てられたクラウンは自分の音を出し、それによってハーモニーを作り出し、オーケストラを奏でるのである。

数名のクラウンによるオーケストラの次は、別のクラウンによるクラウンショーである。普段からパントマイムなどの技術を鍛錬している彼は、実際には軽いはずのカバンが重くて持ち上がらないというパフォーマンスを行った。

最後に、一人のクラウンがピアノを弾き、クラウン全員で「春よ来い」を歌った後に、「パタカラダンス」というダンスを踊り、前半部が終了した。

後半部は、それぞれのクラウンが個別に対象者と関わるもので、その取り組み方はクラウンによって千差万別である。あるクラウンは対象者とぬいぐるみで対話し、あるクラウンは二人でコンビを組み対象者と一緒に歌を歌っていた。自閉症の症状をもつ対象者の一人は同じ経路で絶えず歩き回っており、その横をただ一緒に歩くクラウンの姿もあった¹³⁶。

あるクラウンは、壁際でひっそりと立っていた一人の利用者とシャボン玉で遊んでいた。クラウンがシャボン玉の液を浸して利用者の口に近づける。利用者は微笑みを浮かべて嬉しそうにそれを吹く。二人は何も言わずにキラキラと舞うシャボン玉をゆっくりとみつめる。シャボン玉が床に落ちてパチンと割れると、クラウンは再びシャボン玉の液を浸して利用者の口に近づける。利用者さんは微笑みながらそれを吹く。そしてまた七色に光りながら舞い落ちるシャボン玉をみつめる。そこでは、笑いはもちろん会話や感嘆の言葉さえ交わされていない。しかし、人間同士の強烈な繋がりや安心感に包まれていた。

¹³⁶ 訪問後分かったことだが「希望の家」の責任者によれば、当日会場内を歩き回っていた自閉症の利用者は普段は気に入らないことがあると癩癩を起こして部屋を飛び出してしまうのだそうである。

あらかじめ決められていた退場の時間がくると、施設のスタッフと利用者のリードによって全員で合唱が行われ、クラウン達は入場の時と同じように会場を後にした。

以上が活動内容の詳細である。さらに特筆すべきことは訪問後のクラウン達の反応である。別室に準備された控え室に戻ったクラウンのほとんどが感動のあまり涙を流していたのである。何故だろう。それは、ケアリングクラウンという行為が、クラウンから対象者へと一方的に何かを与える行為ではなく、対象者からクラウンへと何かを与える双方向の関係が築かれるからではないだろうか。

<写真4「希望の家」訪問時の参加者>



<2009年3月17日撮影>

以上二つのケアリングクラウンの事例を整理した。ケアリングクラウンはある場所に赴いてそこで何をするのだろうか。

事例1のリマ・ペルー刑務所に服役中の少女達を訪れたアンバセダークラウンの場合、話をしながら共に食事を取り、ダンスを踊り、ハグやキスをして交流をした。事例2の社会福祉施設「希望の家」を訪れたコミュニティークラウンの場合、熟練されたクラウンによるクラウンショーやパントマイム、オーケストラなどのパフォーマンスの披露や、歌やシャボン玉などの個別での交流があった。

こうした事例から分かることは、前述したケアリングクラウンの分野別にクラウンが訪問する先は異なるが、それぞれの活動現場においては実はそれほど特殊なことがされているわけではないということである。それは、たとえばクラウンショーであったり、一緒に歌を歌うことであったり、ダンスを踊ることであったり、シャボン玉を吹くことであったりする。

すなわち、クラウンがそこで何をするのかという行為にのみ焦点を当てるのではなく、

何故クラウンがある場へ赴き、何を重要視して対象者と関わろうとするのかというケアリングクラウンの根底を流れる思想にこそケアリングクラウンの本質があるといえる。次節ではケアリングクラウンの思想をみていく。

第3節 ケアリングクラウンの思想と笑い

本節では、ケアリングクラウンの活動の根底を流れる思想を整理し、ケアリングクラウンにおける笑いをまとめる。まず、ケアリングクラウンという単語が「ケアリング」と「クラウン」に分解できる事に着目し、それぞれの項目をまとめる。

クラウンであること

ホスピタルクラウンやアンバセダークラウンとして活動しながら、世界中のケアリングクラウンの活動報告をまとめているショーバナ・シュエブカ¹³⁷ (Shobana Schwebke) は『ケアリングクラウン 1 病院編』(晩成書房、2006)の中で、ケアリングクラウンが活動を行う場合、「一目でクラウンだとわかる格好をしていること、これは絶対に必要なこと¹³⁸」だと述べている。何故なら、クラウンとしてのおかしな行動をとったとき、不必要に不審がられることを未然に防ぐだけでなく、クラウンの格好は笑っても良いというサインでもあるからだ。

クラウンの外見を構成する要素は大きく分けて、メイク・衣装・小道具・赤い鼻の四つである。これらの要素は全てそれぞれに種類がある。メイクは鼻と頬紅を赤く塗るだけのソフトメイクから目の上や口の周りを白く塗り、顔全体の様子が変わるようなフルメイクまで、濃度の異なる種類がある。衣装にも、大きなリボンのついた服やダボダボの服など様々な種類がある。小道具には、帽子やウィッグ、楽器、パペットなどが挙げられる。赤い鼻も、頭に紐を巻くものや鼻に特殊な接着剤で張付けるもの、丸いものや細長いもの、さらには肌色の鼻や鼻の先を赤く塗るだけなど千差万別である。

シュエブカはサーカスで登場するクラウンの格好を模範とする多くの活動団体に対して「サーカス・クラウンは、大観衆に向けてパフォーマンスを行うものです。小屋のいちばん端にいるお客様にも、その顔がわからなければなりません。一方、一対一のパフォーマンスが中心の病院訪問クラウンや老人ホームでは、このような派手なメイクは不

¹³⁷ ショーバナ・シュエブカは病院などを訪問するクラウンであり、1995年からケアリングクラウン/ホスピタルクラウンの情報誌である「ホスピタル・クラウン・ニュースレター」を編集・発行している。「The Hospital Clown」のホームページは、<http://www.hospitalclown.com/> (2009/7/10 閲覧) である。

¹³⁸ ショーバナ・シュエブカ著/高田佳子訳『ケアリングクラウン 1 病院編』晩成書房、2006 ; p. 33.

必要です。むしろ不適切で有害なものです¹³⁹」と注意を呼びかけている。このように、訪問する場にあった適切な服装やメイクを選ぶことが重要である。

さらに、クラウン一人一人によってもクラウンの格好は異なる（写真5参照）。



写真5の左側の写真¹⁴⁰では、真っ赤な頬に青いアイシャドーなどのメイクが施され、胸元にリボンのついた衣装や、大きな花のついた帽子などを被り、赤い鼻をつけた格好であるのに対して、右側の写真¹⁴¹では、メイクは一切なく、胸元に小さなリボンをつけた白いシャツに黒いスーツ、踝が出るほど短いズボンを履き、黒斑のメガネ以外は赤い鼻もつけていない¹⁴²。このように、クラウンの格好は訪問する場所やクラウン一人一人の嗜好によって変化するものである。

シュエブカは「クラウンのキャラクターを形成するのは衣装やメーキャップではなく、それぞれの人の奥底にある感情や性格¹⁴³」であると述べ、ケアリングクラウンにとって

¹³⁹ シュエブカ 前掲書、2006；p. 33.

¹⁴⁰ 写真は「The Hospital Clown」のホームページ <http://www.hospitalclown.com/>（2009/7/10 閲覧）より典拠。

¹⁴¹ 写真は「Mohse Cohen」のホームページ <http://www.yoowho.org/>（2009/7/10 閲覧）より典拠。

¹⁴² モシェ・コーエンは、自身の衣装に対して「以前はカラフルな服も着ていたが、無駄を省いていった結果僕の場合は白黒になった。ズボンを短くしただけでも少し面白い感じになる。メイクアップはメガネだけ。」とコメントしている。（2008年3月16日、日本ケアリングクラウン研究所主催「モシェ・コーエンのユーモアワークショップ 2008」広島南区民文化センターにて、筆者メモ）

¹⁴³ シュエブカ 前掲書、2006；p. 33.

より重要なことは外見よりも自分自身の感情や性格を知ることであると指摘する。

では、クラウンのキャラクターとは何であろうか。シュエブカによれば、クラウンのキャラクターは「それぞれのクラウン固有のもの¹⁴⁴」であり、それは「クラウンの人格の中心にあるもの¹⁴⁵」であると言う。すなわち、ケアリングクラウンにおけるキャラクターとは、たとえば漫画のキャラクターのように確固とした役柄があり、それを模倣するのではなく、自分自身の感情や性格、人格を中心として形成されるものである。

シュエブカは、自身のキャラクターを「ショビ」と名づけ「“ショビ”は6歳のころの私自身であり、私の奥底にある喜びや繊細さ、遊び心そのものです¹⁴⁶」と形容している。人によってクラウンキャラクターが確立されるまでの経過は異なるが、「みんな、自分のクラウン・キャラクターを七転八倒して探し回ったり、つくりあげたりしたのではありません¹⁴⁷」と述べ、クラウンのキャラクターが外部にすでにあるものの模倣や、自分自身で加工していくものではなく、「クラウンは、そのキャラクターによって、その声色や歩き方、態度を決めていく¹⁴⁸」のであって自己の内面の感情や性格、人格を中心に確立されていくものであることを強調する。

これらのことをまとめると、ケアリングクラウンにおいて「クラウンである」ということは第一に自分自身であることに始まり、それに従ってクラウンキャラクターを確立していくことだと言えるだろう。

ケアすること

ケアリングクラウンの赴く場所は、「死」に近い場所でもある。難民キャンプには、先日仲の良かった兄弟を失ったばかりの子どもやその両親がおり、病院には、大怪我をして手術室に向かう患者や、大病を抱え長期入院を余儀なくされている入院患者、そして大切な人を看取る人々がいる。先週まで一緒に遊んでいた子どもが今週の訪問時には亡くなっていることや、ケアリングクラウンとして赴いた自分が、対象者の出会った最期の人になることさえ少なくない。ケアリングクラウンは何故こうした場に赴こうとするのだろうか。

2008年3月16日のCWB-USA¹⁴⁹代表のモシェ・コーエンへのインタビューにおいて筆者が「紛争地域や被災地といった深刻な場の人々のところへ向かうには勇気が必要だと思

¹⁴⁴ シュエブカ 前掲書、2006；p. 37.

¹⁴⁵ シュエブカ 前掲書、2006；p. 37.

¹⁴⁶ シュエブカ 前掲書、2006；p. 38.

¹⁴⁷ シュエブカ 前掲書、2006；p. 38.

¹⁴⁸ シュエブカ 前掲書、2006；p. 38.

¹⁴⁹ モシェによれば、CWB-USAの活動は、特別な場合を除き、水や食料の配給など第一次支援が必要な緊急性のある場所ではなく慢性的に支援不足の地域への訪問が多いという。難民キャンプなどでのクラウンショーや、クラウニングのワークショップ開催などの活動を行っているという。(2008年3月16日、日本ケアリングクラウン研究所主催「モシェ・コーエンのユーモアワークショップ2008」広島市南区文化センターにて、筆者メモ)

うのですがどうですか」と尋ねたところモシェの答えは以下の通りであった。

紛争地域の人々はすでに勇気をもっている。何故なら、彼らは難局を生き延びてきたのだから。僕らクラウンはただ笑える機会やユーモアを提示するだけだ。先ほど君は「勇気が必要」だといったけれど、勇気が必要だということもない。もし君がそこへ行ったとしたら、僕と同じことをすると思うよ。「その場をなんとかより良いものにしたい、そうだ自分は笑いを提供することができる、ならやろう」って同じことをすると思う（筆者訳）¹⁵⁰。

何故アンバセダークラウンとして現地へ赴くのか。モシェの回答からは、難局を経験してきた人を目前にしたとき、何か自分のできることをしようとした結果、クラウンとして笑いを提供できるからそれをしたのだということが読み取れる。それは難民キャンプにいる人々は苦しんでいて、その人々を救うために自分がユーモアを与えに行く、というような高飛車な姿勢では決してない。シュエブカもまた同様のことを述べている。

ホスピタルクラウンは、やさしさと思いやりの気持ちで、人の目に、そして目を通して人の心に語りかけてきます。人はみな優しさを求めています。恐怖や苦しみの中ではなおさらです¹⁵¹。

すなわち、人は恐怖や苦しみといった苦境の中では優しさを求めるものであり、クラウンはそういった人々に優しさを持って接しケアしようとするのである。

シュエブカは優しさを「ただ耳ざわりがよいだけの言葉ではなく、抱いたり、手を握ったり、たとえ1分でもいいから自分のことを気遣ってくれる、本物の心からの優しさ¹⁵²」であるとし、優しさの効用に関して以下のように言及している。

優しさを持って行動する人の心はオープンで、その優しさは人の恐怖心を取り除くことができます。優しさはリラックスさせ、信頼感を増し、この世界は本質的によいものであることを強調します。開いた心でいる人のもつ本当の優しさは、周囲の空気をより豊かなものにし、その人が出逢うすべてに大きな希望と人間に対する信頼をもたらします¹⁵³。

つまり、人は恐怖や苦しみの中で優しさを求めており、優しさに触れたときそれまで

¹⁵⁰ 2008年3月16日、広島市内にて、筆者インタビュー。

¹⁵¹ シュエブカ 前掲書、2006；p. 14.

¹⁵² シュエブカ 前掲書、2006；p. 70.

¹⁵³ シュエブカ 前掲書、2006；p. 70.

の恐怖心を取り除かれ、自己の置かれていた環境に対して肯定的な感じ方を始めることができるのだと言い換えることができる。

シュエブカはクラウンがこのような優しさをもつために最も大切な要素として「献身的奉仕」を挙げている。ここで言われている献身的奉仕とは、クラウン自身のエゴを超越し、対象者に徹底的に集中して自分の持っているものを与え分かち合う行為を意味する¹⁵⁴。

シュエブカによれば、「奉仕する (serve)」とは「援助する (help)」とは本質的に異なっている。「援助する」とは、まず現状に不足があるという判断があり、次に問題を抱えた対象者に対して、クラウンである自分が問題を解決してあげるという上下の関係がある。それは場合によっては、おごりと自己への執着にまみれ、自分が援助していることの認知を周りに求めることにつながりかねない行為である¹⁵⁵。

一方で、「奉仕する」とは憐れみ (pity) ではなく慈しみの心 (compassion) をもって相手に共感し、それぞれが自分の出来ることを精一杯やり、自分の持っているものを与え分かち合う行為である。そこには上下関係や自己への捉われはなく、互いが互いを支えあうように自分の出来ることを与え、分かち合う関係があるとシュエブカは言う¹⁵⁶。

つまり、ケアリングクラウンにおいて「ケアすること」とは「他者からの賞賛や見返りを求めるのではなく、他者への共感に基づき、私利私欲を超越して献身的奉仕に努めることである」とまとめることができるだろう。

ケアリングクラウンにおける笑い

では、こうしたケアリングクラウンの世界において、笑いはどのような位置づけにあるのだろうか。

ケアリングクラウンという言葉・概念を編み出し、ケアリングクラウンの養成プログラムを創始したウィスコンシン大学教員のリチャード・スノーバーグ (Richard Snowberg) は、『ケアリングクラウン (The Caring Clown)』(Visual Magic Publication、1992) の中で、ケアリングクラウンと笑いに関して以下のように述べている。

効果的なケアリングクラウンは、何らかの技能や才能を持っている必要がある。しかし、彼らが面白おかしくある必要はない。そう、ケアリングクラウンと居るときに「面白い」ことが起きることもあるだろうが、とても静かな場合もある。おそらく良い聴き手である技能の方がケアリングクラウンにはよりふさわしいのである (筆者訳)。

[Effective caring clown do have to have some skills or abilities. They may,

¹⁵⁴ シュエブカ 前掲書、2006 ; p. 75.

¹⁵⁵ シュエブカ 前掲書、2006 ; pp. 74-75.

¹⁵⁶ シュエブカ 前掲書、2006 ; pp. 74-75.

however, not be one which are necessarily funny. Yes, “funny” has its place with caring clown, but in some instances a very quiet, perhaps a clown with good listening skills, is more appropriate¹⁵⁷.]

すなわち、クラウンが常に面白おかしい存在であって笑いを引き起こさなければならぬというわけではない。躍起になって面白い存在であろうとしたり、笑わせようしたりするのではなく、むしろ静かに相手の話に耳を傾けることの方がよりふさわしいことの方が多いのである。

このように、クラウンがユーモアや笑いと密接な関係にありながらも、笑わせることを目的としないケアリングクラウンの在り方は、アンバセダークラウンとして活動続けるモシェへのインタビューからも伺える。2008年3月16日のモシェへのインタビューにおいて、筆者が「地域の人々の中には、笑いたくない人々やクラウンの登場自体を拒絶する人々もおられると思うのですが、どうですか」と尋ねたところ、モシェの答えは以下の通りであった。

1994年にクロアチアの難民キャンプに招待されて行ったことがある。クラウンのショーをするように頼まれたんだ。そこで一人のおじいさんに出会った。彼に「ショーをするからおいでよ」と誘ったら、彼は「ノー」と断ったんだ。だから、僕は「そうか」と言って別れた。

ショーの間中、彼は僕達のことをただ見ていたよ。僕達は機会を提供するだけなんだ。笑いたくない人を無理やり笑わせようとするのはしない。笑いたくない人はそっとしておく。観客のことをよく聞くことの方が大事なんだ。僕達は何かを提示するけど、それを受け取るかそうでないかは観客にまかせるんだよ。

難民キャンプでは、人々は疲れている。ハッピーな時間が少ないんだ。中には、先週家族を亡くした人々だっている。昨日大好きだったお兄ちゃんを失った子供だっている。彼らは罪のない犠牲者だ。その彼らに対して僕らはクラウンショーやパフォーマンスを行う。大人はショーに対しては笑えなくても、自分の子供たちが笑っているのを見ると、そのご両親はとても嬉しくなるんだよ¹⁵⁸（筆者訳）。

こうしたモシェの回答からは、難民キャンプなどの困難な場に生きる当事者にとって、笑顔や笑う機会を得ることには大きな意味があることを認め、その機会を提供できることを願いながら赴くものの、そこで笑いを強制したり、笑ってくれないからといって落ち込んだりすることはないことが分かる。

¹⁵⁷ Richard “Snowflake” Snowberg, THE CLOWN IN YOU: A BASIC TEXTBOOK, Visual Magic Publication, 1984. ; p. 10.

¹⁵⁸ 2008年3月16日、広島市内にて、筆者インタビュー。

また、病院などの場では、対象者が顔面麻痺の症状から表情の形成に困難を有する場合や、ターミナル期には、笑うという行為そのものが身体的負担になる場合もある。ホスピタルクラウンとしての活動を続けるシュェブカも、ケアリングクラウンにおいて笑いが目的にはなりえないことを述べている。

ただ誰かの手を取り、目を見つめて、そして彼女が何を求めているかを感じ取ることが大事なのです。おもしろいことをしようとおもって動くのではありません。笑いを誘うとしたら、それはクラウンのキャラクターがそう見せるだけなのです。(中略)人を笑わせることより、人とつながりあうことがたいせつなのです¹⁵⁹。

すなわち、クラウンが人を笑わせようとして笑いを生じさせるのではなく、笑いがあるすれば、それは人為的ではなく自然に起こる笑いであると言える。相手のことをよく見てよく聞いて人と人との繋がりがあうことこそがケアリングクラウンの目的であり、その結果として笑いが自然に起こるとまとめることができる。

本章では、笑いの実践的活動としてケアリングクラウンの活動を取り上げ、その活動内容と思想及びケアリングクラウンにおける笑いの位置づけを整理した。

本章を通して、ケアリングクラウンの目的は、エゴを超越した献身的奉仕を通して対象者とクラウンが繋がりを持つことであり、人と人との繋がりがあえた時、笑いが生じることが分かった。ケアリングクラウンにおける笑いは、目的ではなく結果生じるものであると言える。

ケアリングクラウンにおいて、もし自分の能力の誇示や対象者への強制として笑わせようとするのであれば、その笑いには何の意味もない。むしろ、それは対象者との繋がりを絶つ行為であろう。何故なら、それは対象者のことを無視し、自分のことにしか意識が集中していないからだ。言い換えれば、自分が周りの人と繋がろうとせず、自分の周りに壁を作ってしまったのである。

反対に、対象者への共感に基づき、自分のできることを精一杯やろうとする献身的奉仕の中で、人と人との繋がりがあえた時に自然と笑いが起こる。こうした笑いには対象者にとってもクラウンにとっても双方向に深い意味を持つ。

つまり、笑いには人を人と繋げる力があるが、笑いがあれば自動的に人と人との繋がるのかと言えばそうではない。笑いが人を繋ぐ力を有するには、笑いを担う人間の姿勢が問われると結論付けることができるだろう。

次章では、笑いが平和構築に役立つか否かという問いに対して結論を出す。

¹⁵⁹ ショーバナ・シュェブカ(基調講演)「病院にクラウン(道化師)が出現!—病院訪問クラウンの現況—」日本笑い学会「笑い学会研究14」2007;108.

第六章 結論

本章では、第二章から第五章において得られた知見を基に、笑いをホリスティックに捉えなおし、笑いが平和構築に役立つか否かを考察する。そして、本研究の結果において、十分に明らかに出来なかった点を含めた研究の限界について言及し、今後の研究課題を提起する。

第1節 結論

本研究における平和構築に対する問題意識を再度明らかにしておく。第一章で述べたように、冷戦終結後、勃発する地域紛争が意味することは、限られた地域内における隣人同士の対立であり、顔の見える範囲での人間関係の崩壊である。こうした場において、もう一度平和を構築するためには、法制度の整備や外交上の友好的な国家間関係などに重点が置かれてきた従来の政治学的アプローチに加えて、当事者の精神面に対するアプローチ、及び敵対する集団間の対立関係を協力関係へと移行しようとする当事者の意識変容と、顔の見える範囲での人間関係の再構築という視点を平和構築に積極的に取り入れることが必要不可欠である。

こうした問題意識に基づいた時、笑いが平和構築に役立つか否かという問いは、第一に「笑いは当事者のいかなる意識変容を促すことに役立つか」、第二に「笑いは人間関係を再構築することに役立つか」という問いに換言される。

本論文では、笑いを(1)現象としての笑い、(2)象徴としての笑い、(3)笑いの実践的活動に大別し整理したが、これらの作業から、笑いの「好転力」「繋ぐ力」「破壊力」が浮かび上がってきた。まず、「笑いは当事者のいかなる意識変容を促すことに役立つか」という問いに対し、笑いの「好転力」という観点から考察する。

笑いの「好転力」。それは第三章で明らかになったように、身体活動としての笑いがもたらす心理的变化とそれに伴う幸福感の効用を意味するものである。身体的表出が感情経験に先立つというジェームズ=ラング説及び顔面フィードバック仮説に基づけば、笑いが結びつくのは幸福感であった。笑いは、喜びと興奮の組み合わせさせた幸福感を誘引し、事態をそれほど脅威的でも深刻でもないと再定義する効用や、緊張や不安感などの負の情緒を低下させる効用など思考過程に大きな効果を及ぼすことが分かった。さらに、幸福感は主体の創造性に富んだ問題解決能力を高め、援助行動を増大させることが分かった。すなわち、笑いは主体の思考及び行動に変化を与え、事態を好転させる力を有しているとまとめることができた。

このような笑いの「好転力」は、当事者の肯定的な物事の捉え方や問題解決へと意識変容を促すことに役立つと考えられる。そして、それは深刻な事態であり問題が複雑に絡み合う平和構築の場において必要とされる意識変容でもある。その理由は二つある。

第一に、人間は深刻な問題に直面したとき、事態の深刻さゆえに深刻になりすぎてしまうことが多くあるが、そのことは、問題の当事者であり解決の主体でもある人間を閉鎖的にしてしまう。ところが、深刻かつ閉鎖的な態度は結局のところ問題の解決を促さない。問題解決に必要とされる柔軟な発想力や想像力、他者との協力関係が失われかねないからだ。

逆説的ではあるが、事態が深刻であればあるほど、解決の主体となる人間には、よりリラックスした精神状態で、物事を肯定的に捉える思考過程が求められる。幸福感がもたらす肯定的な思考の促進は、この点で役に立つ。

第二に、具体的な解決方法が、社会的なシステムの変更や政策レベルでの制度の導入等であるにせよ、問題解決の核には、問題を解決しようと模索する人間が存在する。当事者は、問題が複雑に作用しているがゆえに、目の前の問題を冷静に包括的に見据えた上で、柔軟な発想力や想像力を持ち、他者と協力しながら解決への道を模索する必要がある。幸福感がもたらす問題解決能力の向上や他者への援助行動は、この点で役に立つ。

さらに、笑いの誘引する幸福感そのものが平和の構築にとって極めて重要な課題である。何故なら、当人の置かれている環境が客観的にはいかに悲惨であっても、当人が心から幸福を感じている状態を平和ではないと言うことはできないし、反対に客観的には全く不足のない環境におかれていても、当人が幸福感を全く感じていない時、それが完全に平和であるとは言えないからである。幸福感の有無のみで平和を定義することはできないが、当人の幸福感の有無が平和の構築にとって重要な要素であることには違いがない。たとえ一瞬であっても、笑うことで幸福感を得ることができるのなら、平和構築の場における笑いの機会を排除してはならない。

続いて、「笑いは人間関係を再構築することに役立つか」という問いに対して、笑いの「繋ぐ力」という観点から考察する。

笑いの「繋ぐ力」とは、本論文の随所で明らかにされたものである。第二章の個体発生的視点からみた笑いの発達、第四章の日本における笑い及びスリランカの悪魔祓い、そして第五章のケアリングクラウンにおいてそれは顕著になった。

個体発生的視点からみた笑いの発達では、授乳後の満足を示すものとして最初の笑いが発生し、後に他者の受容や親しみの伝達、所属集団への親和性を表現するものとなり、さらには自らが笑いをとることで他者との親和関係を築こうとするなど、積極的に人間関係を樹立する道具として笑いが使用されるようになっていく笑いの発達過程が描かれた。これは、笑いがまず乳幼児と保育者を繋ぐ役割に始まり、自分と親しい人や所属集団とを繋ぐようになり、さらには新たな人間関係を繋いでいく道具として主体的に笑いが使用されるようになったと言い換えることができる。

日本における笑いでは、日本のアマテラス大神話や笑い祭りの存在から、笑いが神と人間を仲介するもの、すなわち神と人間とを繋ぐ役割を担ってきたとまとめることができた。

スリランカの悪魔祓いにおいては、孤独であるが故に悪魔に憑かれた患者は、悪魔祓いの儀礼の中で、村人と共に笑い共同体とのつながりを回復し、また患者と悪魔が共に笑うことで、敵対していた悪魔との関係が、味方の関係へと変化した。このことから、患者と村人、患者と悪魔を繋ぐ働きを笑いが持っていることが明らかになった。

そしてケアリングクラウンの活動においては、いかなる現場においてもケアリングクラウンが対象者への共感に基づき、自分のできることを精一杯やろうとする献身的奉仕の中で、人と人とが繋がりあえた時に、自然と笑いが生じることが見出された。

しかし、こうした笑いの「繋ぐ力」を「人間関係の再構築を促すことに役立つか」という問いに照らし合わせた時、答えを出すことはまだできない。何故なら、こうした議論には「何故笑いには人と人を繋げる働きがあるのか」という本質的な問いかけが抜け落ちているからである。

何故、笑いには人と人を繋ぐ働きがあるのか。それは、笑いが言語にならない感情を表出する非言語的活動であって、笑いを共有することは感情が共有されることに等しいからではないだろうか。人は感情的生き物である。言語的理解を越えて、感情と感情が直に共有されるから、笑いによって人と人とは繋がることができる。それは、ともに泣くこと（涙の共有）が人と人との距離を縮めるのと同じである。

言語的理解を超えた感情と感情の共有がもたらす人と人との繋がり。これが非言語的活動である笑いの「繋ぐ力」の本質である。そして、実はこのことが笑いの「繋ぐ力」の限界をも示している。

何故なら、こうしたケアリングクラウンの活動において結論付けられたように、笑いがあれば自動的に人と人とが繋がるのかと言えばそうではなく、笑いが人を「繋ぐ力」を持つには、笑いを担う人間の姿勢が問われるからだ。

ケアリングクラウンの活動において、自分の能力の誇示や対象者への強制として笑わせようとするのであれば、その笑いは、むしろ対象者との繋がりを絶つ行為であり、反対に、対象者への共感に基づき、自分のできることを精一杯やろうとする献身的奉仕の中で、人と人とが繋がりあえた時に自然と笑いが起こることが明らかにされた。

つまり、笑いが人と人との「繋ぐ力」を有するのか或いはそこに限界を設けるのか、それを決めるのは、笑いの「繋ぐ力」の本質であるその人の感情、すなわち率直な思いなのである。言い換えれば、笑いの「繋ぐ力」には、人と人との関係を再構築することに役立つ可能性があるが、その可能性が実を結ぶか否かはその人の心持ちが決定するのである。

さらに、笑いの「繋ぐ力」の土台を形成しているのは、笑いの「破壊力」である。笑いは、第一に、自己と他者、自己と周囲の世界に境界線を設けている自我意識を破壊するからである。まず、自我意識の破壊があり、これにより他者との感情の共有が可能となるのである。

笑いの「破壊力」。これは、笑いの根底を成す威力である。笑いの「破壊力」は、「好転力」の起爆剤とも言えるものである。笑いの「好転力」は、笑いによってもたらされる幸福感が当人の思考及び行動に変化を与え事態を好転させる力のことを指すが、そのためには、それまで自己を取り囲んでいた闇が破壊され、一筋の光が差し込んでくるこ

とが必要となるからである。笑いはその闇を破壊するのである。

しかし、笑いはただ破壊するのみである。第二章において整理されたように、笑いには自己の満足感や他者への親和を表現する笑いだけでなく、嘲りの笑いなど他者への攻撃としての笑いがあった。とりわけ、個体発生的視点からみた笑いの発達では、幼児が周囲とのずれを笑いによって戒めようとする教育的体験を通して、人から笑われることを恐れるようになり、さらにはその笑いを他者に向け、相手に対する攻撃として嘲笑を使用するようになってく様が描かれた。このことは、笑いが人の心を傷つけ、人間関係の構築を妨げる「破壊力」をも有することを示している。

笑いは、破壊する。自己と他者とを隔てる自我意識を。自己を取り囲んでいた闇を。神と人間との間にある境界線を。光と闇とを分ける硬い岩を。悪魔や環境を敵だとみなしていた自己の先入観を。苦しみや悲しみ、憂鬱の悪循環を。すでにあった人間関係を。これから築くことのできたかもしれない良好な人間関係を。

そして、笑いがあらゆるものを破壊した後、そこに破壊のみが残されるのか、それとも、それによって平和構築に有用とされる「好転力」や「繋ぐ力」が創造されるのか。それを決めるのは、笑いではなく、笑いを通して露呈する人間の在り方なのである。

第2節 今後の課題

本研究では、ケアリングクラウンの活動へのフィールドワークを通して、笑いの実践的な効果の一端をみることができたが、研究の大部分は文献調査によるものであり、笑いの実質的な効果をととりわけ平和構築の現場で検証してはいない。こうした研究手法の限界から、今後の課題として、あらゆる平和構築の現場に足を運び、そこで自然発生的に生じる笑いがもたらす影響を深く観察していくことが必要である。

参考文献

【和書（邦訳含む）】

1. 麻生幾次『笑の研究』東京堂出版、1947
2. 熱田神宮官庁編『熱田神宮史料 年中行事編』下巻、熱田神宮官庁、1975

3. アマルティア・セン著／大石りら訳『貧困の克服～アジア発展の鍵は何か～』
集英社朝日新聞社編、2002
4. アマルティア・セン著／東郷えりか訳『人間の安全保障』集英社、2006
5. アラン著／白井健三郎訳『幸福論』綜総社、1993
6. アレン・クライン著／片山陽子訳『笑いと治癒力』創元社、1997。Allen Klein,
THE HEALING POWER OF HUMOR, Jeremy P. Tarche, Inc, 1989.
7. アレン・クライン著／片山陽子訳『笑いと治癒力Ⅱ～ユーモアと死と癒し～』
創元社、2001。
Allen Klein, THE COURAGE TO LAUGH, Jeremy P. Tarche, Inc, 1998
8. 飯沢匡『武器としての笑い』岩波書店、1977
9. 井上光貞責任編集『日本書紀』中央公論社、1970
10. 井上宏「「笑い学」研究について」日本笑い学会「笑い学研究第九号」日本笑い
学会、2002；pp.3-15.
11. 井上宏『笑い学のすすめ』世界思想社、2004
12. 井之口章次「日本の笑い行事」言語編集部「言語」第23巻第12月号、大修館書
店、1994；pp.34-35.
13. 猪熊兼勝『日本の原始美術6 埴輪』講談社、1979
14. 宇井無愁『日本人の笑い』角川書店、1969
15. ヴィクトール・E・フランクル著／池田香代子訳『夜と霧』みすず書房、2002。
Viltor E. Frankl, EIN PSYCOLOGE ERLEBT DAS KONZENRATIONSLAGER in trotzdem
ja zum leben, Kosel-Verlag, Munchen, 1977
16. 上田紀行『スリランカの悪魔祓い』徳間書店、1990
17. 上野行良『ユーモアの心理学—人間関係とパーソナリティー』サイエンス社、2003
18. 梅原猛『笑いの構造～感情分析の試み～』角川書店、1972
19. エリコ・ロウ『アメリカ・インディアン 笑って生きる知恵』PHP文庫、2007
20. エリコ・ロウ『アメリカ・インディアンの書物よりも賢い言葉』扶桑社、2001
21. O・F・ボルノウ著／藤縄千グサ訳『気分の本質』筑摩書房、1973。Otto Friedrich
Bollllnow , Das Wesen der Stimmungen, Frankfurt, 1941
22. 大島希巳江『日本の笑いと世界のユーモア～異文化コミュニケーションの視点か
ら～』世界思想社、2006
23. 荻原浅男校注・訳『古事記』（完訳日本の古典1）小学館、1983
24. 小此木啓吾『笑い・人みしり・秘密』創元社、1980
25. 小田普、作田明編『心の病と現在5 脳と犯罪 性犯罪』新書館、2006
26. カント著／宇都宮芳明訳『永遠平和のために』岩波書店、2005
27. 北村英哉、木村晴編『感情研究の新展開』ナカニシヤ出版、2006

28. 吉川左紀子、益谷真、中村真編『顔と心ー顔の心理学入門ー』サイエンス社、1993
29. 木村洋二『笑いの社会学』世界思想社、1983
30. 酒井健『バタイユ入門』筑摩書房、1996
31. 志水彰『笑い／その異常と正常』頸草書房、2000
32. 志水彰、角辻豊、中村真『人はなぜ笑うのか～笑いの精神生理学～』講談社、1994
33. ジャン・デュヴィニョー著／利光哲夫訳『笑いのたくらみー喜劇性と滑稽さの博物誌ー』東海大学出版、1993
34. ショーバナ・シュエブカ著／高田佳子訳『ケアリングクラウン 1 病院編』晩成書房、2006
35. ジョルジュ・バタイユ著／西谷修訳『非-知-閉じざる思考ー』平凡社、1999
36. ジョン・グリック「アンバサダークラウンとしてペルーで春休みを過ごす」高田佳子、下原由香編「Caring Clown Report／Vol.1」日本ケアリングクラウン研究所、2007；pp.18-20.
37. 鈴木尚『古墳とその時代』朝倉書店、1958
38. 鈴木直人編『感情心理学』朝倉書店、2007
39. 角辻豊『笑いの力』家の光協会、1996
40. 高田佳子「訳者まえがき ケアリングクラウンの世界への誘い」ショーバナ・シュエブカ著／高田佳子訳『ケアリングクラウン 1 病院編』晩成書房、2006；pp.1-9.
41. 高田佳子「笑いとクラウンーパッチ・アダムスの病院訪問よりー」社団法人神奈川県看護協会編『小児看護』へるす出版第31巻第7号通巻第389号、2008；pp.822-825.
42. 高田佳子（司会）、ショバーナ・シュエブカ（基調講演）、塚原成幸（特定非営利活動法人日本クリニックラウン協会）、多田京子（保健師・患者）「病院にクラウン（道化師）が出現！ー病院訪問クラウンの現況ー」日本笑い学会「笑い学会研究14」2007；pp.106-116.
43. 高田佳子、下原由香編「Caring Clown Report／Vol.1」日本ケアリングクラウン研究所、2007
44. 高田佳子「クリニックラウンー入院中の子ども達に輝きの時間をー」「治療」Vol.88、No.3、南山堂、2006；pp.378-379.
45. 高田佳子「第1回 ケアリングクラウンの世界」ケアリングクラウン養成講座2008資料
46. 高田佳子「第2回ー1 病院訪問クラウン」ケアリングクラウン養成講座2008資料
47. 高田佳子「第2回ー2 アンバサダークラウン（クラウン親善大使）」

- ケアリングクラウン養成講座 2008 資料
48. 高田佳子「第 2 回-3 地域活動（コミュニティ）クラウン」
ケアリングクラウン養成講座 2008 資料
49. 高田佳子「第 4 回 自分のからだを感じる」
ケアリングクラウン養成講座 2008 資料
50. 高柳和江「補完代替医療としての笑い」日本補完代替医療学会誌第 4 巻第 2 号、
2007 ; pp. 51-57.
51. 高橋雅延、谷口高士編『感情と心理学～発達・生理・認知・社会・臨床の接点と
新展開～』北大路書房、2002
52. 谷泰『笑いの本地、笑いの本願—無知の知のコミュニケーション—』以文社、2004
53. ダニエル・キイス『アルジャーノンに花束を』早川書房、1999
54. 寺島順子編集『山の道化師 PACKMAN と笑っていこう』オフィス・エム、1999
55. 富田博子編「Caring Clown Report/Vol. 2」日本ケアリングクラウン研究所、2008
56. 富田博子編「Caring Clown Report/Vol. 3」日本ケアリングクラウン研究所、2008
57. 富田博子編「Caring Clown Report/Vol. 4」日本ケアリングクラウン研究所、2009
58. トム・ルッツ著／別宮貞徳（他）訳『人はなぜ泣き、なぜ泣きやむのか？—涙の
百科全書—』八坂書房、2003
59. 友定啓子『幼児の笑いと発達』勁草書房、1993
60. 中村天風『研心抄』天風会、1948
61. 中島英雄「笑いとユーモアの科学」ユーモア・サイエンス学会編「笑いの科学
Vol. 1」松籟社、2008 ; pp. 44-48.
62. ノーマン・カズンズ著／松田銑訳『笑いと治癒力』岩波書店、2001。
Cousins Norman, Anatomy an illness as perceived by the patient : reflections
on healing and regeneration, W.W. Norton & Company, Inc, 1979.
63. 橋元良明「笑いのコミュニケーション」言語編集部「言語」第 23 巻第 12 月号
大修館書店、1994
64. パッチ・アダムス、モーリーン・マイランダー著／新谷寿美香訳『パッチ・アダ
ムスと夢の病院』主婦の友社、1999。Patch Adams; with Maureen, Mylander
Gesundheit!:bringing good health to you, the medical system, and society
through physican service, complementary therapies, and joy.Patch Adams
with Maureen Mylander , 1993.
65. パッチ・アダムス著／高柳和江『パッチ・アダムス いま、みんなに伝えたいこ
と～愛と笑いと癒し～』主婦の友社、2002
66. 樋口清之『笑いと日本人』（日本人の歴史 9）講談社、1982
67. P. エクマン・W. V. フリーセン著／工藤力訳編『表情分析入門—表情に隠された意

- 味をさぐるー』誠信書房、1987。Paul Ekman and Wallace V. Friesen, UNMASKING THE FACE, San Francisco, 1975.
68. 福田正治『感じる情動・学ぶ感情～感情学序説～』ナカニシヤ出版、2006
69. ヘルムート・プレスナー著／滝浦静雄（他）訳『笑いと言きの人間学』紀伊国屋書店、1984。
Helmuth Plessner, Philosophische Anthropologie—Lachen und Weinen, Das Lachen, Anthropologie der Sinne—, Herausgegeben un mit einem Nachwort von Gunter dux, S. Fischer Verlag, 1970.
70. ベルクソン著／林達夫訳『笑い』岩波書店、1938。Henri Bergson, Le rire, 1900.
71. マイケル・アーガイル『幸福の心理学』誠信書房、1994。Michael Argyle, THE PSYCHOLOGY OF HAPPINESS, London, 1987.
72. 町田宗鳳『＜狂い＞と信仰』PHP 研究所、1999
73. 町田宗鳳『山の靈力—日本人はそこに何をみたか—』講談社、2003
74. 町田宗鳳「平和のメッセージ」池上良正(他)編『暴力—破壊と秩序—』（岩波講座 宗教 8）岩波書店、2004
75. 町田宗鳳『何故宗教は平和を妨げるのか』講談社、2004
76. 町田宗鳳、上田紀行『「生きる力」としての仏教』PHP 研究所、2006
77. 町田宗鳳『人類は宗教に勝てるか』日本放送出版協会、2007
78. 宮田光雄『キリスト教と笑い』岩波書店、1992
79. 村上和雄『笑う！遺伝子—笑って、健康遺伝子スイッチ ON』一三書房、2004
80. 百瀬宏『国際関係学』東京大学出版会、1993
81. 森下伸也「酔笑人神事」ユーモア・サイエンス学会編「笑いの科学 Vol.1」松籟社、2008 ; pp. 81-87.
82. 森下伸也『もっと笑うためのユーモア学入門』新曜社、2003
83. 柳田国男『不幸なる芸術・笑いの本願』岩波書店、1979
84. 柳田国男「山の神とオコゼ」『柳田國男全集 8』筑摩書房、1998
85. 山口昌男『道化的世界』白水社、1975
86. 山口昌男『道化の民俗学』新潮社、1975
87. 山口昌男『道化の宇宙』白水社、1980
88. 山口昌男『仕掛けとしての文化』白水社、1980
89. 山口昌男『笑いと言逸脱』筑摩書房、1984
90. 山田満『平和構築とは何か～紛争地域再生のために～』平凡社、2003
91. ユーモア・サイエンス学会編「笑いの科学 Vol.1」松籟社、2008
92. ヨハン・ガルトゥング・藤田明史編『ガルトゥング平和学入門』法律文化社、2003
93. ヨハン・ガルトゥング著／京都 YMCA ほーぼのぼの会訳『平和を創る発想術～紛

争から和解へ〜』岩波書店、2003

94. 余語真夫「表情と感情のメカニズム」吉川左紀子、益谷真、中村真編『顔と心ー顔の心理学入門ー』サイエンス社、1993;pp.136-167.
95. レイム・ディアー著/北山耕平訳『インディアン魂 下』河出書房新社、1998
96. レイム・ディアー著/北山耕平訳『インディアン魂 上』河出書房新社、1998
97. ロス・バック著/畑山俊輝監訳『感情の社会生理心理学』金子書房、2002

【洋書】

98. Madan Kataria, Laugh For No Reason, MADHURI INTERNATIONAL, 1999
99. Marshall B. Rosenberg, Nonviolent Communication : A Language of Life, PuddleDancer Press, 2005
100. Richard Snowberg, THE CARING CLOWN, Visual Magic Publication, 1992.
101. Richard “Snowflake” Snowberg, THE CLOWN IN YOU: A BASIC TEXTBOOK, Visual Magic Publication, 1984.
102. Patty Wooten, R.N., COMPASSIONATE LAUGHTER: JEST FOR YOUR HEALTH!, Commune-A-Key Publishing, 1996.
103. Van Hooff, A Comparative approach to the phylogeny of laughter and smiling. In R. A. Hind (Ed.), Non-verbal communication, Cambridge university Press, Cambridge・London・New York・Melbourne, 1972. ; pp. 208-241.